臺所爲ㇾ給可ㇾ申ㇾ。以上。

八月二日〇享保十八年(紀元二三九三年)。御目付大岡右近征。〇忠被ㇾ申聞ㇾ者、先月〇享保十八年(紀元二三九三年)七月。十日已來、布衣以上煩ハヽ、何日より煩何日より出初、又者今以煩之分ハヽ、其趣認、且又十日〇享保十八年(紀元二三九三年)七月。前煩之分者、十日〇享保十八年(紀元二三九三年)七月。以後出勤、又者今以煩之分も、是又認、今明日之内ニ大岡右近征。〇忠ハ可ㇾ指出ㇾ旨被ㇾ申ㇾ。尤煩無ㇾ之面々も、其趣書出し可ㇾ申旨、被ㇾ申聞ㇾ。〇八月七日及廿六日(〇享保十八年紀元二三九三年)病氣人少ノ處骨折リタリトテ高家織田伊賀守其他褒セラル。

——柳營日次記

町人中人別凡四拾六七萬人、此内三十萬人餘ハ自分働ニ而相應藥用可ㇾ申ㇾ。

殘る拾萬人餘。

此者共も、自力ニ而藥用申儀罷成間敷奉ㇾ存ㇾ。併右之内相煩不ㇾ申者、又者本服いたしハ者御座ハ間、凡藥給兼ハ者、六七万人も可ㇾ有御座哉、右之者共ハ被ㇾ下ハ藥之積、左之通。

凡七万人程。

此者共、壹人前御藥三服宛被ㇾ下ハ積。

凡藥數二十一萬服程。

此代銀二十五貫貳百目。

金ニメ四百貳拾兩。但、一服ニ付壹分貳厘懸リ。

七月〇享保十八年(紀元二三九三年)。大岡越前守
稻生下野守〇武。正

右書付、享保十八年丑(〇紀元二三九三年)七月大岡越前守より寫來ル。

——享保撰要類集

當月〇享保十八年(紀元二三九三年)。貴賤遍患ニ風邪、前代未ㇾ曾有ㇾ義也。布衣以上之諸役人、不ㇾ欠ニ勤番者僅七人、其以下不ㇾ得ニ出仕ㇾ者、不ㇾ知ニ其數ㇾ。

——萬年記〇慶寛私記略。

丑〇享保十八年(紀元二三九三年)。七月十日前後より江戸町中、其後國々在々迄風邪はやり、同〇享保十八年(紀元二三九三年)七月。十八十九日比風神送り夥敷につき、同〇享保十八年(紀元二三九三年)七月。二十日、御觸有ㇾ之。

——一話一言

一、同〇享保十八年(紀元二三九三年)。七月上旬ゟ風病流行、世間一統大名高家、貴賤上下、大人小兒、一人として不ㇾ煩といふ事なし。寒熱頭痛甚、絶食痰咳出、七月〇享保十八年(紀元二三九三年)。盆前後、取分病人多、病輕きは五日十日、或は廿日卅日ほと煩もの多し。一

覇都時代ノ疫癘

家不殘煩臥、殿中諸役人御番衆皆煩、御人少ニ付不寢等御免ニ也。前代未聞之事。

——森山孝盛日記

七月上旬〇享保十八年(紀元二三九三年)。より疫癘天下に行はる。十三日十四日大路往來絶たり。藁にて疫神の形を造り、これを送るとて、鉦太鼓をならし、はやしつれて海邊に至る。

——武江年表

一、七月上旬〇享保十八年(紀元二三九三年)。比より八九月〇享保十八年(紀元二三九三年)。に至り、江戸幷近在、風疫流行、死者多し、不勝計。〇中略。

感不祥之氣作

享保癸丑(〇十八年紀元二三九三年)之秋半、天地不祥之氣流行。而無貴賤無老若。莫不當其氣者矣。蓋今茲(〇享保十八年紀元二三九三年)夏秋之月。依雷風不相薄。山澤不通氣。無陰陽之交感故也乎。轉西州餓死之亡魂氣也乎。被犯於其氣者。或病痾弱之類。或樵夫牧童之賤者。殞其命者。不遑勝計。且夫視受其風邪者。頭痛發熱惡寒酷而胸痛、筋骨痿。飲食絶。展轉反側。悶絶煩亂。而眠伏。或四日或五日。漸而雖平愈。如見半醉半醒之人。顏色或如黃土。或如青草。包頭袋足。著重服往來。下手垂首。而如無力。其體愛々然。如喪父母。似離愛子。嗚呼實西州飢渴之人體。亦彷彿於此者乎。諸州爲之暫絶往行。東武之繁華。今東西寂寞焉。惟驚耳者百萬遍音叫。隣家祈禱讀經之聲。崩雷電。至若每日暮。稱送風神。營一小社。造風神之形。男女老少之類。數千百人。鳴金鼓吹法螺。充衢而馳奔西。其聲裂江河。震山川。遮眼者。醫師之奔走。無明醫無藪醫、往來駱驛。而不分晝夜。大抵用不換金正氣散。若藿香正氣散。而得其驗。大家則煎藥於大釜飲數人。小家則無看病人。而隣家互救助而飲之。醫人亦半表半裏。而安臥調藥。紛々診脈。農工商爲之絶產業。武士爲之乏臣僕。不得已而闕公務、絶音問。故於此時。一族類葉。曾袋交通。亦不奇怪乎。御湟淩。則雖爲天下之要用。無日雇人夫。而公役之諸候上杉秋田藤堂土屋秋元之類。各空手而茫然焉。惟乘不祥之氣。而得僥倖之利者。藥種之賣買。陰陽師之咒。賣僧之祈禱。早桶卒都婆之工。漫飩屋之商賣。時節惡而違胸算用族。先觀音之四萬六千日。炎魔大王之齋日。而寺院之布施物。町人之賣懸。醫師藥種。諸藝者之禮。或名半于例年、不同席而論者。行脚之桑門。乞食之門立。其損亡不可勝計。雖不遣不取。而我又不取不遣。各相半其損得。於此中元之嘉儀變爲中邊之害矣。於戲哀哉。壬子(〇享保十七年紀元二三九二年)西國之餓死數萬人。至癸丑(〇享保十八年紀元二三九三年)之盆。而無父子兄弟之可祭者。則無可止魂魄之所。無可止之所、則誰爲之向水。何人涕泣而燒香。幾世幾歲而成佛乎。嗚呼噫、天乎命乎、將雲霞乎。亡靈往々哭輪廻于六道。幸慕江戸之繁榮。附江戸生靈之驥尾。而欲見稻穗粟穗之姿。而到江府之比。餓死哀傷之毒氣充四方。一念亡愁之雲霞。天曇鬼哭。而衆人被犯其氣。遂爲盆前之頭痛鉢卷而已矣。

江都散人　神田白龍子

——續談海

月堂見聞集有德院殿御實紀同附錄ノ類、略ス。續日本王代一覽ニハ「六月〇享保十八年(紀元二三九三年)。ヨリ七月〇享保十八年(紀元二三九三年)。ニ至テ、海內風邪流行ス」ト有リ。時還讀我書ニ

霸都時代ノ疫癘

ハ、享保十八年辛丑（紀元二三九三年。）十二月、飢饉ノ後、時疫流行セシニヨリ、官ヨリ望月三英、丹羽正伯ニ命セラレ、治時疫方ヲ集メ、又凶年ノ時ハ、僻地ノ民雜食シテ毒ニアタルヲ以テ、解食毒方便易ナルヲ撰ハシメテ、町奉行ニテ上木ナサシメ、都鄙ニ頒行セシメタマフ。其方ハ、醫說ノ大豆甘草ノ方、肘後方ノ蘘荷根ノ方ナド、十一首ナリ。其後天明四年甲辰（紀元二四四四年。）諸國ニ時疫行ハルヽトキ、天保八年丁酉（紀元二四九七年。）荒歉ノ後ニモ、再其方ヲ頒タシメラレタリ。國家仁慈ノ政至レリトイハサルヘケンヤ。」ト有リ。

〔參考〕牧民金鑑（天明集成同。）云フ、

享保十八丑年（紀元二三九三年。）月（マヽ）御書付

時疫流行之節、此藥を用ひて、其煩をのかるべし。

一、時疫は、大豆大つぶなるを能いりて壹合、甘草壹匁、水にてせんじ出し、時々呑てよし。

右醫說ニ出る。

一、時疫には、若荷の根と葉をつき碎、汁を取りて、たゞのみてよし。

右は肘後備急方に出る。

一、時疫には、午房をつきくだき、汁をしぼり、茶はん半分つゝ二度のみ、其上桑の葉をひとにぎり程、火にて能あぶり、黃色になりたる時、茶はんに水四はい入、二盃にせんじて、壹度のみて汗をかきてよし。若桑の葉なくは、枝にてもよし。

右孫眞人食忌に出る。

一、時疫には、れつ殊の外つよく、きちがいのごとくさはぎてくるしむには、芭蕉の根をつきくだき、汁をしぼりて飲てよし。右、肘後備急方に出る。

一、一切の食物の毒にあたり、又いろ〳〵の草木きのこ鳥獸など食煩ふに用て、其死をのがるべし。

一、一切の喰物の毒にあたりくるしむには、いりたる鹽をなめ、又ぬるき湯にかき立飲てよし。但、草木の葉を喰て毒にあたりたるには、いよ〳〵よし。

右農政全書に出る。

一、一切の喰物、毒にあたりて、胸いたく腹はり痛には、苦參を水にてよくせんじ、飲食を吐出てよし。

右同斷。

一、一切の喰物にあたり苦しむに、大麥の粉を芳ばしくいりて、さゆにて飲てよし。

右本草綱目に出る。

一、一切の食物にあてられて、口鼻より血出て、もだへ苦むには、ねぎをきざみて、壹合水にてせんじ、ひやしおきて、幾度も飲へし。血出やむまで用ひてよし。

右衛生易管に出る。

一、一切の食物之毒にあたりて煩ふに、大つぶなる黑大豆を水にてせんじ、幾度も用ひてよし。魚にあたりたるには、いよ〳〵よし。

一、一切の食物の毒にあたり煩ふに、赤小豆の黑やきを粉にして、ばまくり貝に一

ッ程つゝ、水に而用ゆへし。獸の毒にあたりたるには弥よし。

右千金方に出る。

一、葦を食あてられたるに忍冬のくき葉とも、生にてかみ、汁をのみてよし。

右夷堅志に出る。

右藥之法、凶年之節、邊土之もの雜食の毒にあたり、又凶年之後、必疫病流行の事あり。其爲心安き法を撰へき旨、依レ被二仰付一諸書内ゟ致二吟味一書レ之。

享保十八年丑年〔〇紀元二三九三年〕十二月　望月三英　丹羽正伯

附記　享保十九年疫疾　享保廿年痘瘡　享保廿年痘瘡事蹟

〔附記〕續皇年代略記ニ、

三月〇享保十九年〔紀元二三九四年〕。疫疾流行、至レ夏尤甚。死者尤多。

廿年乙卯〔〇享保〇紀元二三九五年。十二月、江戸痘瘡流行ス。〇御徒方萬年記。

享保廿年痘瘡　御徒方萬年記〇憲法編年錄同。云フ、

一、十二月八日〇享保二十年〔紀元二三九五年〕。

此節世上疱瘡時風之段達二上聞一、二血丸御目見以上之面々望之者ゟ可レ被レ下旨、河野仙壽院ゟ申達、頂戴致候樣西尾隱岐守殿〇忠尚。被レ仰渡一ゟ由、御目付大岡右近〇忠征。被二申達一之。

風也集ニハ、是歳〇享保二十年〔紀元二三九五年〕山陽西海諸國疫シ、人多ク死シタルコト見ユ。

櫻町天皇享保廿一年丙辰〇五月七日改元、元文元年〔紀元二三九六年〕。二月二日丙寅〇丙寅、三正綜覽。

江戸痘瘡行ハル、ニ由リ、幕府市民ニ象洞ヲ頒ツ。〇享保撰要類集。

享保二十一辰年〇紀元二三九六年。二月二日、小笠原石見守殿ゟ進達。

享保廿一年痘瘡　享保撰要類集ニ據レバ、

町々名主共へ象洞相渡ゟ儀ニ付申上ゟ書付

町々名主共へ象洞相渡ゟニ付、左之通申渡ス。

覺

頃日疱瘡はやりゟ由ニ付、象洞遣ゟ。疱瘡煩ゟ者ニ用ひさせ可レ申ゟ。象洞出來合之分相渡ゟ。又一兩日中可レ相渡一ゟ。淀橋〇武藏國豐多摩郡。井兩國橋近所吉川町〇市内日本橋區。にて賣弘メゟ段、先年相觸ゟ處、其以後者、人々忘ゟ哉、心付不レ申ゟ儀も有レ之哉、近き頃者調ゟもの無レ之由にゟ。象洞之儀、疱瘡はかりに不レ限、袋書付ニ有レ之通之病氣に用ひゟ分にゟ之間、望之者ゟ、淀橋〇武藏國豐多摩郡。井當時兩國橋向藤代町〇市内本所區。兩所之内にて相調ゟ樣ニ、町々裏々之者まで可レ申聞由。名主共へ、左之通象洞相渡ゟ。

壹町ゟ三町迄支配之名主ゟ　三貼宛。

霸都時代ノ疫癘

四町ゟ五町迄同斷
六町ゟ九町迄同斷
拾町ゟ拾七町迄同斷
拾八町ゟ二十町迄同斷

右之通昨二日〇享保廿一年(紀元二三九六年)二月。名主共へ、象洞書面之通相渡申ㇾ。一、白牛洞ハ、六拾貼ならでハ無御座、壹貼當ニも不足仕ㇾ間、相渡不ㇾ申ㇾ以上。

二月三日〇享保廿一年(紀元二三九六年)。

四貼宛。
五貼宛。
六貼宛。
八貼宛。

大岡越前守〇忠相。
稲生下野守〇正武。

元文二年熱病
元文二年熱病事蹟

蓋前年〇享保廿年(紀元二三九五年)。ノ流行ヲ繼續セル者歟。

元文二年丁巳〇紀元二三九七年。三月、熱病流行ス。〇續談海。

元文二年熱病 續談海ニ、

一、三月下旬〇元文二年(紀元二三九七年)。

世上熱煩時花申ㇾ。此比芝邊〇市内。而、夜中何者ともしらず人をよび申ㇾ由、答ㇾへは、煩付、又なくなりㇾ日くれかれに我居をしらて呼へは、異國へこされこゝは神國。

元文五年痘瘡
元文五年痘瘡事蹟

〇柳營日次記。

五年庚申〇元文五年〇紀元二四〇〇年。正月前年〇元文四年(紀元二三九九年)。ヨリ江戸痘瘡流行ス。

元文五年痘瘡 柳營日次記ニ、

廿九日〇元文五年(紀元二四〇〇年)正月。

當日御名代左近將監〇松平乘邑。右之御書付駒井勘負〇正壽。被申觸ㇾ。疱瘡流行ㇾ間、陰陽二血丸可ㇾ被ㇾ下ㇾニ付、布衣以上并御目見以上之面々、望之者有ㇾ之ㇾハヽ、河野仙壽院、栗本瑞見方迄相願拜領可ㇾ仕ㇾ。尤勤ㇾ者ハ、於ニ御城ニ仙壽院、瑞見ㇾ申達ㇾ共可ㇾ仕ㇾ。

但疱瘡不ㇾ致子供大勢有ㇾ之、餘慶拜領致度ものハ、子供何人と申儀、兩人迄申達可ㇾ相願ㇾ。

右之趣向々ㇾ可ㇾ被ニ申達ㇾ置ㇾ。

正月〇元文五年(紀元二四〇〇年)。

其前年〇元文四年(紀元二三九九年)。ヨリ行ハレタル可シト思ハル、ハ、柳營日次記及大成令ニ、十二月九日〇元文四年(紀元二三九九年)。能勢甚四郎一〇。頼申觸ル、所ノ書付ニ「疱瘡麻疹水瘡病人看病人竹千代樣御座所ㇾ被ニ罷出ㇾ由」ト稱スル者見エ、續談海ニモ、左ノ

寛保四年痘瘡　延享元年風病　寛保四年痘瘡事蹟

如ク有リ。

當未年（元文四年（紀元二三九九年））。世上時花煩多し。右まじない。

一、黒まめ　百八ツ。

一、小豆　我家の亭主の年の數、幷家内の人數をかぞへ入。

右さゆにて給申ハ。殘りハ、戌亥の角へいけハ。

禁里御歌のよし門にはり、

わしの山とふそのもりのもふの木は、病を拂ふえゝ木ゝの宿。

寛保四年甲子（二月廿九日改元、延享元年（紀元二四〇四年））。**正月、江戸痘瘡流行ス。**（御徒方萬年記。總御書付留。）

延享元年甲子（紀元二四〇四年）。**六月ヨリ風病行ハル。**（我衣。武江年表。）

寛保四年痘瘡　御徒方萬年記（柳營日次記。總書付留略同。）云フ、

一、正月廿一日（寛保四年（紀元二四〇四年））。左之御書付出ル。

疱瘡はやりハ二血丸可レ被レ下間、御目見以上之面々、望之者有レ之ハヽ、元文元辰年（紀元二九六年）。之通、栗本瑞見迄相願拜領可レ仕ハ。尤出合ハもの者、於二御城一瑞見（栗本）ハ申達、致二頂戴一ハ可レ仕ハ。

子（寛保四年（紀元二四〇四年））。正月

瑞見當番日

廿五日　廿八日

瑞見（栗本）方ハ二血丸願ニ出候節、書付持參候事。

御役名　何之誰

御番名何之誰組（支配）歟　何之誰

延享元年風病　江戸ニモ行ハレタル者ナル可シ。

延享元甲子（紀元二四〇四年）。六月中旬ヨリ、七八月（延享元年（紀元二四〇四年））。之比マテ、諸國大ニ風病ハヤル。萬人ノ内九千九百人ニ及ブ。——我衣

夏（延享元年（紀元二四〇四年））。より冬（延享元年（紀元二四〇四年））。まて、諸國風邪流行。——武江年表

續日本王代一覽、六月（延享元年（紀元二四〇四年））。西國及五畿内東國、疫病大ニ流行ス。」トス。弘賢覺書追加、續皇年代略記ノ類亦同ジ。

〔附記〕　家記延享三年（紀元二四〇六年）。亦痘瘡流行シタルコトヲ記ス。

延享四年丁卯（紀元二四〇七年）。**九月ヨリ十月ニ至リ、江戸風邪流行ス。**

總御書付留。一話一言。續談海。續日本王代一覽。武江年表。

延享四年風邪　左ノ如シ。

覇都時代ノ疫癘

延享四卯年〇紀元二四〇七年。十月

此節世上一同之風邪病人有之ニ付、職人諸人足其外諸色野菜等ニ至迄、高直ニ候段、相聞不届ニ候、引下商賣可致候。若於相背者、吟味之上急度可申付候條、此旨町中可觸知候。

——總御書付留〇憲法編年錄同。

十月〇延享四年(紀元二四〇七年)。

九月二十九日〇延享四年(紀元二四〇七年)。風邪流行につき、長髪並供廻り格別減少ニ而も可相勤旨、被仰渡候。

——一話一言

一、九月下旬〇延享四年(紀元二四〇七年)。風邪流行、江戸中甚し。其外國々ニも、不相殘頻申候由。殿中向當番も段々御人少成候よし。其内寄合御醫師馬島卿市と申仁、風邪相煩、熱氣強、亂心の如くなり、妻ト男女を切殺申候。依之御僉儀之上、亂心と乍申切腹被仰付候。

——續談海

九月〇延享四年(紀元二四〇七年)。ヨリ十月〇延享四年(紀元二四〇七年)。ニ至リ、諸國風邪疫病大ニ流行ス。

江城ニ於テ下々勤仕ノ輩ニ煎藥ヲ賜ル。

——續日本王代一覽

武江年表ニハ、十月上旬〇延享四年(紀元二四〇七年)。より、諸國風邪流行ト見ユ。

桃園天皇寶暦三年癸酉〇紀元二四一三年。江戸麻疹流行、四月ヨリ九月ニ

至ル。〇風也集。麻疹精要方序。武江年表。續日本王代一覽。麻疹年代記。

寶暦三年麻疹　ハ、左ノ如シ。

自ル夏至ニ九月一〇寶暦三年(紀元二四一三年)。麻疹流行。

按麻疹之流行、其間相距十有餘年、或廿有餘年云。僕所目撃、寶暦癸酉歳〇三年(紀元二四一三年)。夏秋之際、東都麻疹大流行矣。其證、初大發熱、噦欬咽痛、或泄瀉、或衄血、則發疹、其形初如蚊刺、漸成紅斑、周身如錦文、成徹紅駁色、而沒矣。其沒時、成白屑而散落矣。其初欬爲佳、噦爲佳、泄瀉爲佳、徹衄爲佳、若誤用止泄止欬等、則邪氣閉塞而其害不淺也。

——麻疹精要方序〇麻疹諸收。

四月〇寶暦三年(紀元二四一三年)。より九月〇寶暦三年(紀元二四一三年)。に至り、麻疹流行、人多く死す。

——武江年表

續日本王代一覽、今年〇寶暦三年(紀元二四一三年)。四五月ヨリ八九月ニ至ル迄、海内一統、麻疹流行ス。」ニ作リ、續皇年代略記「四五月〇寶暦三年(紀元二四一三年)。麻疹流行。」ニ作ル。麻疹年代記ニハ、「寶暦三癸酉〇紀元二四一三年流行。享保十五〇紀元二九三〇年。ヨリ廿四年目也、自春至夏。」ト有リ。

十三年癸未〇寶暦〇紀元二四二三年。江戸疫疾大ニ行ハル〇時還讀我書。

寶暦十三年疫疾事蹟

寶暦十三年疫疾　時還讀我書左ノ如ク有リ。寶暦末年ト云ヘハ、十三年〇寶暦〇紀元二四二三年。ヲ指ス歟。

袖暦ニ又云ク、寶暦ノ末年〇十三年(紀元二四二三年)歟東都ニ大疫アリ。

其症自汗、壯熱、煩渇、小便頻數、淋痛短少、大便或ハ祕シ、或ハ溏シ、甚キ者ハ頭眩嘔逆、譫語脉浮緩也。類案ニ風濕ト名ケ、傷寒ニアラズトテ、五苓散ヲ主トセルニ從テ、五苓散ヲ煎湯トナシ、與ヘテ、人ヲ救フヿ多シ。若脉ニ根ナク、舌胎ナク、乾燥スルハ、附子ヲ加ヘテ愈ユ。又症同クシテ小水遠ク脉緊數ナル者ハ、五苓散ハ效ナク、猪苓湯ニテ效ヲ得タリ。此症ソノ後モ多クアリ。大抵脉ヲ以テ標的トセリ。風濕トハイヘド、概シテ濕温ト名ケテ可ナラン。醫者濕邪ナルヲ知ズ、誤治シテ變ヲナスモノ甚多カリシ也。

明和六年風邪

後櫻町天皇明和六年己丑〇紀元二四二九年。**十月、江戸風邪流行。**〇柳營日次記。後見草。一話一言。續談海。

明和六年風邪事蹟

明和六年風邪　相傳フ、

十月四日〇明和六年(紀元二四二九年)。御目付口上之趣書付ニ而向々被相達ハ。此節時行風ニ而、長髮ニ而罷出ハ儀、且供廻り等も格別相減召連ハ而も不苦旨、水野壹岐守殿〇忠見。無急度被仰渡之。

——柳營日次記

九月〇明和六年(紀元二四二九年)。に至りて感冒さかんに行れし、初めはさせるほどの事あらざりしが、次第にはやりゆく程に、後には道を往來する人も絶へ、將軍家へ仕へ奉る人々を始として、大小名の御屋形に直宿する人も稀に成しによりて、其家々の厨にて藥夥敷煎し、或ハ荷桶手桶なといへる物に入れ、倒居たる者の枕元に運ひ、夫々に汲配りあたへしなり。

——後見草

十月〇明和六年(紀元二四二九年)。此節大に風流行、家毎に病まざるものなし、世俗稻葉風といふ。

——一話一言

十月上旬明和六年(紀元二四二九年)。の頃江戸中風邪流行して、大半平臥ニ付、御觸有、長髮御免、并供廻り減少可仕ハ、御臺所にて藥を煎し、當番衆ハ被下置ハ、鎌倉河岸〇市内。にては風藥をせんじ、一椀に付三文ツヽ賣申ハ由。後に聞、當七月〇明和六年(紀元二四二九年)。紅毛人着岸之刻、諸船之異國人、洋中ニ而煩出し、長崎へ着之刻、皆々相煩申ハ由、夫より所々へ流染し、九月上旬〇明和六年(紀元二四二九年)。京都にて風邪多く、東海道筋流行、駿府交代之時大に流行にて、道中人馬差滯ハ、當府〇江戸。ニ而も下町邊別而多く兩芝居も二三日相止申ハ。

右ニ付落首、

醫者は飛びうどんは賣れる世の中に、何とて湯屋はつれなかるらん。

また畜類馬犬迄も相煩、烏紅葉山○城内。にて、日々落申い

——續談海

明和九年疫癘

慶弘紀聞明和六年○紀元二四二九年。「天下疫、多ニ死者一」ト云シ、續日本王代一覽「同○明和六年(紀元二四二九年)八月。廿六日○中略。京○山城國。大坂○攝津國。江戸及諸國、風邪流行し、人民多死ス。」ト爲ス。武江年表ニハ「十月○明和六年(紀元二四二九年)。風邪流行す。貴賤煩はさるはなし。大家にては薬を手桶に入てはこび、下部に與ふる程のことなりし。」ト記ス。

(參考)日本野史明和七年○紀元二四三〇年。「疫疾流行、人多死。」ト有リ。日本災異志云フ「按、六年○明和○紀元二四二九年。誤。」ト。

後桃園天皇明和九年壬辰○十一月二十五日改元、安永元年(紀元二四三二年)。疫癘行ハル。○慶弘紀聞。武江年表。日本疾病史。

明和九年疫癘　次第左ノ如シ。

自二四月一　○明和九年(紀元二四三二年)。天下疫、多ニ死者一。

——慶弘紀聞

四月　○明和九年(紀元二四三二年)。より五月○明和九年(紀元二四三二年)。迄、諸國疫癘行る。

安永二年疫癘

安永二年疫癘事蹟

安永○紀元二四三二年。ノ初年、長夏、流行ノ病アリテ、死亡塗ニ相望メリ。其症種々異同アリト雖モ、其始多惡風、肌熱水渴、嘔吐、不食ニ起リ、煩渴譫語、吐衄ナド、日ヲフルマヽニ沉重ニ至リ、醫皆手ヲ束ネタリ。一老醫(前田春策)寢冷ヨリ起リタリトテ、張景岳ガ五君子煎ヲ投シテ、救療尤多シ。救瘟袖曆。一夕話。

——日本疾病史

二年癸巳○安永○紀元二四三三年。疫癘行ハレ、江戸ニ於ケル死者十九萬人ト稱ス。○浚明院殿御實紀。續談海。後見草。醫道問答。蜘蛛の糸巻。曳尾庵隨筆。

——武江年表

安永二年疫癘事蹟

安永二年(紀元二四三三年)。　此春○安永二年(紀元二四三三年)。頃より疫癘しきりに行はれ、下賤のやから多くまぬかるゝ事なかりしかば、おほやけにもあはれませ給ひ、人蔘を下し給はりて御救ひあり。

——浚明院殿御實紀

一、當夏　○安永二年(紀元二四三三年)。初ゟ諸國疫病大ニ流行。尾張中將殿○徳川治休。ニも、右御煩の由ニ付、狂歌、

御屋敷へ町から移る疫病は、始中間、おわり中將。

霸都時代ノ疫癘

一、七月十二日　〇安永二年(紀元二四三三年)。御側御用御取次白須甲斐守〇政賢。先達而ゟ病氣之處、今日　〇安永二年(紀元二四三三年)七月十二日。卒去也。嫡子淡路守〇白須。御小性勤被居ゐ處、先月　〇安永二年(紀元二四三三年)六月。中疫病ニ而先達而病死也。依之急ニ養子(〇正賢)增山對州(在所出生。)末子幾之助三男之由。と申仁急養子被相願ゐ。

——續談海

其年　〇安永元年(紀元二四三二年)。の冬より、同しき〇安永二年(紀元二四三三年)。の春に至り、疫病天下に行れ、就中東海道は甚敷、死したる人も多しとかや、抑當夏〇安永二年(紀元二四三三年)の疫病は、去る明和四年〇紀元二四二七年。に行ゐれし感冒といふことかはり、其毒の強き事、筆にも詞にも盡しかたし。一人として此病に染る人の助る者は聞さりき。遠江國日坂の宿抔にては、人種も盡る計に死けるよし。江戸にても餘りに死ける故、公よりの御救として、人參といふ藥を賤しきものに給ゐるなり。此年〇安永二年(紀元二四三三年)。二月より同〇安永二年(紀元二四三三年)。五月晦日まて、葬具商ひせし數いかはかりと、棺屋の限り呼出し、町奉行所にて尋給へは、凡十九萬計りもと答申せしよし。此病は中人以上には病む事少く、下賤の者のみ多かりき。蓋戰國の其古へ、恥を知り義を守り、國の爲主君の爲に命を捨し人々の、其白骨は其節おさめ葬る人もなし、今に山野にすてさらし、雨露にうたれてありと聞。

今治れる御代の國恩にゐ、かくはかり死したる人々、たとへ賤しき屍にても、皆夫〳〵の分に應し、禮式を整へ、骸のおさまらさるは一人もなし。難有御代に生れ逢してとなりと、志しある方々の申侍るも斷りなり。又其頃の事に侍りしゐ、年頃疫病の咒し、或は其姓名を紙札に記し、家毎の門に張せたりし、深川蛤町〇市内。水屋半助と云へる男有けるか、此度疫病に罹り、其身はかりか家内のこらす煩ひ死たり、俗人の習ひとは申なから腹かゝゆへき一談なり。扨此病も秋　〇安永二年(紀元二四三三年)。に至りいつとなく止みたりしなり。

——後見草

癸巳　〇安永二年(紀元二四三三年)。ノ春ヨリ夏ニ至テ、疫病流行シテ、都下死者多シ。病患ニ罹ルモノ奴隸ニ多シ。

——醫道問答

安永二年〇紀元二四三三年。度疫病流行死亡多かりし故、官より寺院へ御尋有しに、疫死十九萬人、蓋し中人以上ゐ病るもの稀にして、下賤に多かりしとぞ。

——蜘蛛の糸卷

安永二年巳　〇紀元二四三三年。諸國疫病流行、人多く死ス、公儀より日光人參を被下置。

——曳尾庵隨筆

覇都時代ノ疫癘

武江年表亦略蜘蛛の糸巻ニ同シク、三月末〇安永二年(紀元二四三三年)。マテニ凡十九萬人疫死スト爲シ、御救トシテ朝鮮人參ヲ賜ハルト記ス。

安永五年風邪

五年丙申〇安永〇紀元二四三六年。一月、江戸風邪流行シ〇森山孝盛日記。武江年表。三月〇安永五年(紀元二四三六年)。ヨリ初秋〇安永五年(紀元二四三六年)。ニ及ヒ、麻疹大ニ行ハレ、貴人ノ之ヲ患フル者少ナカラズ。〇續談海。後見草。半日閑話。蜘蛛の糸巻。武江年表。續日本王代一覽。麻疹年代記。

安永五年麻疹

安永五年風邪事蹟

安永五年風邪　安永五年〇紀元二四三六年。二月、風邪ノ江戸ニ行ハレタルコト、森山孝盛日記、武江年表ニ見ユ。

一、同〇安永五年(紀元二四三六年)三月〇中略。

——森山孝盛日記

一、此節世上一統風邪流行、病人多。

——武江年表

二月〇安永五年(紀元二四三六年)。風邪流行。

兎園小說左ノ如ク記ス者、或ハ是時ノ感冒乎。

予〇瀧澤解。が東西をおぼえしころより、大約五十年このかた、時々の感冒に、世俗の名を負せしもの少からず。まづ安永〇紀元二四三二年—二四四〇年。の中葉にはやりし風邪をお駒風と名づけたり。こゝ城木屋お駒といふ淫婦の事を旨として作りたる淨瑠理のいたく行れたればなり。

安永五年麻疹　是年〇安永五年(紀元二四三六年)。ノ麻疹ハ流行貴紳ニ及ブ。

一、同〇安永五年(紀元二四三六年)五月。十九日

大納言樣〇德川家基。御麻疹被遊ニ付、西丸御本丸ヘ惣出仕有之、於席々老中謁之。

一、同〇安永五年(紀元二四三六年)五月。廿五日

御使津田日向守(〇信之)

檜重一組。

生子鮭一箱。

水戸宰相殿〇治保。

右御麻疹爲御尋、被進之ル。

當夏〇安永五年(紀元二四三六年)。ニ至る迄、麻疹流行多く、死する者多し。

世の中のよくなるはしか時行出て、上は御社參、下は醫者さん。〇曳尾庵隨筆同。

一、五月廿七日〇安永五年(紀元二四三六年)。

御使巨勢伊勢守(〇至忠)

御檜重一組。

生干鯖一箱。

德川宮内卿殿〇重好。

右御麻疹爲御尋被遣之。

霸都時代ノ疫癘

一、同（安永五年（紀元二四三六年）六月。）廿五日　尾張中納言殿（宗睦。）麻疹中、以二上使一御尋之爲二御禮一、御登城、於二御座之間一御對顏。

一、同（安永五年（紀元二四三六年）七月（中略。）

一、日光新宮（公璋法親王。）麻疹薨去ニ付、今日（安永五年（紀元二四三六年）七月十日。）より明日迄、鳴物停止、普請ハ不レ苦事。

四月（安永五年（紀元二四三六年）。）日光御社參有レ之。此頃より麻疹流行す。

同（安永五年（紀元二四三六年。）五年の春の末より麻疹といふ病時行、三十歳以下の人々の病さるものハ稀なりし。此病ひ二十五年以前流行せしが、其時を校ハ、今年（安永五年（紀元二四三六年）。）ハ殊に烈敷となり。

——後見草

同（安永五年（紀元二四三六年。）五年麻疹流行、三十以下之人貴賤となく病さるはなし。

——蜘蛛の糸巻

麻疹一哈「安永五年（紀元二四三六年。）夏、麻疹大作、都下人衆、座レ之而斃者不レ鮮。」續日本王代一覽「同月（安永五年（紀元二四三六年）四月。）より五月六月（安永五年（紀元二四三六年。）ニ至り、京都（山城國。）大坂（攝津國。）江戸及諸國一同ニ「麻疹流行、人民多死ス」。トシ、武江年表「三月（安永五年（紀元二四三六年。）末より秋の初まで、麻疹流行、八多く死す」。麻疹年代記「安永五丙申（紀元二四三六年。）流行。寶暦三（紀元二四一三年。）ヨリ廿四年目也。自レ春（安永五年（紀元二四三六年。）至レ夏（安永五年（紀元二四三六年。）。家治公（徳川。日光（下野國。）御社參の年也。此年（安永五年（紀元二四三六年。）。ハ、諸國死亡人多ク、危急之症多」。トス。

附記　安永六年風邪

〔附記〕曳尾菴隨筆左ノ如ク有リ、江戸亦風邪ノ流行ヲ見タル乎。

安永六酉年（七年（中略。）四三諸國風邪流行。

安永八九年風疹

八年己亥（安永八年（紀元二四三九年。）秋末ヨリ九年庚子（安永九年（紀元二四四〇年。）春ニ亘リ、風疹流行ス。（兎園小說。保嬰須知。）

安永八九年風疹事蹟

安永八九年風疹　保嬰須知云フ、

嘗記、安永己亥年（八年（紀元二四三九年。）秋末至二庚子一（安永九年（紀元二四四〇年。）春、有二一種疫疾一。其證、大抵、初起、頭痛發熱惡寒、嗣發二疹子一、而或痒或否、或目赤、或咽痛、或齒齦腫痛、或頭面脹起。而六七日、若十餘日、而乃痊。其脈浮數弦緊、滿城能免者幾稀。俗稱二三日麻一概與二消毒葛根湯、化斑湯之類一、則疹沒而諸證隨安。雖二是毒氣所一レ致、其邪甚輕淺。顧其不レ藥、亦必自愈也。

ト。兎園小說、安永（〇紀元二四四三―二四四〇年。）の末にはやりし風邪を、お世話風と名づけたり。こは大きにお世話お茶でもあがれといふ戯語の流行しによりてなり。」ト傳フル者、或ハ是歟。蜘蛛の糸巻亦お世話風ノ說有リ、言フ所同ジカラズ。

不斗思ひ出る儘、是も昔をしのぶ一端ならんと記しぬるは、寛政三四年（〇紀元二四五一年―二四五二年。）の頃にか有けん、世上一圓風邪流行て、大人小兒是に犯されぬ人少なし。殿中伺公の面々長髪人も苦しからずとの御書付出し程の事也。其頃の街唄に、そんれは大に御世話へといへるが殊の外流行し故、御世話風といひき。其翌春の新板に醒齋翁の作にて、御世話風を趣向の種とし、御世話といへる流行妓女有て、彼が許へ通へるもの、いつしか床にいれば、おせわ團扇をもてあふぐに、たちまち襟元ぞつとして皆此風に犯さるゝといふ青本至て行はれて、予〇岩瀬百樹。も持居たりしが、はや六十年の昔となりぬ。

天明元年風邪

光格天皇天明元年辛丑〇安永十年四月十三日改元（紀元二四四一年）。十一月、江戸風邪流行ス。〇天明紀聞。森山孝盛日記。兎園小說。

天明元年風邪事蹟

天明元年風邪　ハ、

一、此月〇天明元年（紀元二四四一年）十一月。世間一統風邪流行也。信濃風と唱へ、御老中方御始メ不レ殘ラ御引籠りにて、大和守殿〇久世廣明。御一人御つとめなり。月半より又こなそのよし。又谷風共云。せき出る故なり。又古くき風共云。ぬけかぬるといふ謂れなりとそ。

――天明紀聞

天明元年〇紀元二四四一年。十一月十日

一、日頃世上一般之風邪流行、貴賤無二差別一。主殿頭殿〇田沼意次。周防守殿〇松平康福。御引、兩芝居入無之。凡而三度宛宛究而再感ト云々。

――森山孝盛日記

天明中〇紀元二四四一年―二四四八年。には、やり風邪を谷風と名付たり。こは谷風梶之助い當時無雙の最手なりければ、これに勝るものあること稀なり。谷風嘗て傲語して、とてもかくても土俵の上でわれを倒さんことい難かり、わが臥たるを見まくほりせば、風を引きたる時に來て見よかしといひしとぞ。この言世上に傳へ聞きて、人々話柄としたる折、件の風邪を谷風がいちはやくひき初めしとて、遂に其名を負いせしなり。されば此時四方山人〇大田南畝。這風神狂詩あり、錄してもてこゝに證とす。引道（ひくならく）此風號谷風。關關痰咳響東西。惡寒發熱人

無色。煎樣如常藪有功。一片生姜和酒飲。半丁豆腐入湯空送。君四里四方外。千壽品川問屋中。

泰平年表ニモ「九月十月〇天明元年(紀元二四四一年)。諸國風邪流行」ト有リ。

——兎園小說

天明二年痘瘡
天明二年痘瘡事蹟

二年壬寅〇天明二年(紀元二四四二年)。江戸痘瘡流行ス。〇天明紀聞。

天明二年痘瘡 ハ、

一、同〇天明二年(紀元二四四二年)十二月。廿九日。〇中略。御檜重一組。生干肴一箱。

御使高井兵部少輔(〇綽望)
德川常陸介殿〇治寶。

右者、疱瘡爲御尋被遣之。

——續談海

一、此節〇天明二年(紀元二四四二年)。六傳馬町〇市内。三升屋にて製し出す二寸四方程之黑やき紙有り。是を火の上におけば、しばらく之内に灰になり、角力取り又ハ役者之似貝あり〳〵とあらはれ候製法にて、世間大流行にて、貴賤男女老若之差別なく是をもてあそへり。此紙に續きてはやる物は疱瘡なり、日に增し夥敷事なり。

——天明紀聞

〔參考〕天明紀聞云フ、

一、今度西丸樣(〇德川家齊)御疱瘡前に付、御輕痘之御まじなひに、天竺の龍砂川より、鯉魚を活なから江戸へ御取寄せに相成り、此水をは御湯浴み被遊候由、奇妙之珍事なり。十二月(〇天明三年紀元二四四三年)に至り、永田傳兵衛殿方、御下り貰請小兒共に浴させ候。

天明四年時疫
天明四年時疫事蹟

四年甲辰〇天明四年(紀元二四四四年)。江戸時疫行ハル、死者多シ。〇久松日記。保嬰須知。武江年表。

天明四年時疫 ハ、

五月七日〇天明四年(紀元二四四四年)〇中略。

一、時疫流行に付、御藥方被下ル書付、周防守殿〇松平口阿彌を以御渡、信濃守〇河野安副。被請取寫、宅方被差越ル。自分二ノ帳、來ル十日〇天明四年(紀元二四四四年)五月。觸之積に申合ル由。

五月十日〇天明四年(紀元二四四四年)〇中略。

一、去ル七日〇天明四年(紀元二四四四年)五月。松平周防守殿〇康福。御渡ル時疫御藥方御書付、自分二ノ帳當前に付、今日〇天明四年(紀元二四四四年)五月十日。宅方觸遣ス。觸帳書入相濟ル間、御城信濃守〇河野安副。賴遣ル。

——久松日記

天明甲辰〇天明四年(紀元二四四四年)。春都下人民、患頭痛壯熱、脈洪大數急、而嘔吐不止者尤多矣。其證候頗劇、殆有入裏之勢。然余〇片倉鵬陵。治之先與葛根加半夏湯、繼以小柴胡湯等而取效者、凡七八人、如其嘔或二三日、或四五日而止、歷十餘日而諸症

漸平。時適獲竹茹湯一方於本事方中。即取而用之、則一服而嘔止、四五日而諸患脫然。眞所謂若以湯沃雪然。

——保嬰須知

武江年表ニハ「四月〇天明四年(紀元二四四四年)。諸國飢饉、時疫行はれて、人多死す」ト有リ。

寛政四年百日欬

寛政四年壬子〇紀元二四五二年。春末ヨリ秋初ニ至リ、江戸百日欬流行ス。

〇保嬰須知。

寛政四年百日欬事蹟

寛政四年百日欬　保嬰須知ニ、

小兒久嗽、俗稱百日欬。小兒生不出百日而欬者、謂之百晬內欬。而今以久嗽稱百日欬、蓋以其久不差也。此明人所謂頓嗽也。寛政壬子歲〇四年(紀元二四五二年)。自春末至秋初都下兒童多有患之者。其證欬聲一發則連連不止、氣逆上衝、面赤汗出、目瞪淚出、聲喝不出、似氣息將絕、乃吐乳食並粘痰、而欬漸止、乃發啼聲。如此者日夜六七發、或十餘發至其甚則衄血者、間亦有焉。

——保嬰須知

寛政七年風邪

寛政七年風邪事蹟

七年乙卯〇寛政〇紀元二四五五年。三月、江戸風邪行ハル。〇安藤日記。一話一言。時還讀我書。

寛政七年風邪　世ニ之ヲ御猪狩風ト稱ス、小金原〇下總國。狩獵後流行シタルニ依ル歟。

廿三日〇寛政七年(紀元二四五五年)三月。〇中略。

一、此節世上一般風邪流行いたし、右風氣ニ相見、寺社奉行四人共、病氣ニ而引被申ハ。今日〇寛政七年(紀元二四五五年)三月廿三日。詰番へ斷被申上ハ。尤町奉行相賴御届被出由、傳言ハ無之ハへ共、池田筑後守〇長惠。より拙者ハ物語申ハ。

廿八日〇寛政七年(紀元二四五五年)三月。〇中略。

此節一統流行風ニ而、長髮ニて罷出ハ儀、并供廻等も、格外ニ減召連ハ而ハ不苦旨、無急度御目付へ申渡、大目付へハ、右之趣相達ハ樣、是又申渡ハ事。

晦日〇寛政七年(紀元二四五五年)三月。〇中略。

一、此節一般風邪流行ニ付、長髮ニ而ハ不苦、供廻等も格別減召連ハ而も不苦趣、被仰渡ハニ付、明朔日〇寛政七年(紀元二四五五年)四月。御目通へ罷出ハもの、長髮ニ而も不苦哉之旨、稻葉丹後守〇正諶。問合、越前守〇安藤惟德。森川主膳〇俊尹。申談、丹阿彌を以伊豆守殿〇松平信明。へ被相伺ハ處、右ハ今日迄押ハ處、明日〇寛政七年(紀元二四五五年)四月朔日。御目見ハ、初へ引込も殘念成事、月代濃きもの、御役人之事ニ而、年若きものハ、月代四五日之分ハ不苦間敷、うすきものは、乃至十日計ハ不苦間敷ハ。是ハ人ニ見計も可有之事之由、伊豆守殿〇松平信明。備前守殿〇京極高久。被仰聞ハよし。右之趣を

以、丹後守〇稻葉正諶。に越前守〇安藤惟德。ゟ及挨拶ゟ。

朔日〇寛政七年(紀元二四五五年)四月。〇中略。

一、此間月代、已後流行風邪ニ付、御用捨被仰出ゟニ付、御奏者番水野壹岐守〇忠如。

廿八日〇寛政七年(紀元二四五五年)三月。の儘ニ而、長髮ニ而罷出、披露相勤申ゟ。其外御勝手月次御禮、小笠原近江守〇貞溫。小田切土佐守〇直年。いつれも四日之月代ニ而被罷出ゟ。

——安藤日記

時疫ノ流行ハ、其理ヲ推知スヘカラサルヿアリ。寛政七年〇紀元二四五五年。ノ三月初旬、大君〇德川家齊。小金原〇下總國。ニ狩シ玉ヒテ、四五日ノ後ヨリ感冒行レタリ。其患者ノ衣袂ニ必ス猪鹿ナトノ獸毛アリ、少キハ七八根、多キハ掌ニ滿ルニ至ル。故ニ時人名ケテ御猪狩風ト云シトソ。實ハ何ノ故ナルヿヲ審ニセサルナリ。

——時還讀我書

三月二十八日〇寛政七年(紀元二四五五年)。風邪流行ニ付、長髮並供廻り格別減少にて可相勤、被仰渡ゟ。

——一話一言

此外森山孝盛日記ノ類、略ス。

寛政十一年痘瘡麻疹疫痢

十一年己未〇寛政〇紀元二四五九年。三月ヨリ、痘瘡麻疹流行シ、秋〇寛政十一年(紀元二四五九年)。

寛政十一年痘瘡麻疹疫痢事蹟

附記

享和元年風病

疫痢流行ス。〇巷街贅說。日本疾病史。

寛政十一年痘瘡麻疹疫痢 相傳フラク、

寛政十一己未年〇紀元二四五九年。三月初旬より、疱瘡はしか流行、其咒たらやうの葉へ左の通り書記して、〇印の處へ、灸すへて、川へ流すべしと云へり。

〇麥殿は生れながらに〇はしかして、
もがさの〇跡は我身なりけり。

おなじ夏〇寛政十一年(紀元二四五九年)。頓病といふ病流行す。此咒、左之二字を紙に書、一夜枕の下に敷て、翌朝はやく川へ流して、其病を除くと云あへり。

——巷街贅說

殿婿

寛政十一年(紀元二四五九年。西暦一七九九年)秋、疫痢流行。(成蹟錄)

——日本疾病史

巷街贅說謂フ所ノ頓病、或ハ日本疾病史說ク所ノ疫痢ヲ謂ヒタル者乎否乎。

〔附記〕我衣ニ左ノ如ク記ス。江戸亦流行ヲ見タル乎否乎。

享和元酉年〇紀元二四六一年。三月比ゟ、大ニ風病流行シ、延享元年〇紀元二四〇四年。ノ如シ。

霸都時代ノ疫癘

享和二年風邪

享和二年風邪事蹟

享和二年壬戌〇紀元二四六二年。二月ヨリ四月ニ至リ、江戸風邪行ハル。〇廻状留。御徒方萬年記。天保集成絲論錄。聞のまにま。森山孝盛日記。巷街贅說。武江年表。泰平年表。

享和二年風邪　左ノ如シ。

三月十六日〇享和二年(紀元二四六二年)。

一、此節一統風邪流行ニ付、長髪ニ而罷出ル義、并供廻り等も格別ニ減し召連レ而茂不苦旨、伊豆守殿〇松平信明。無急度、堀田攝津守殿〇正敦。ヘ被仰聞レ旨、神保佐州〇長光。爲心得被申聞レ。

一、風邪ニ而押而相勤レ者、御用無之レ者ハ、勝手次第退出いたしレ樣、廻り後御同人〇堀田正敦。被仰聞レ段、同人〇神保長光。被申聞レ。

——廻状留

一、同日〇享和二年(紀元二四六二年)三月廿日。

去十七日〇享和二年(紀元二四六二年)三月。廻状追啓之通、御徒方御藥頂戴之儀、一昨十八日〇享和二年(紀元二四六二年)三月。ゟ本御番加御番御供番ヘ茂、御藥被下レ。

一、風邪流行ニ付、今日〇享和二年(紀元二四六二年)三月廿日。茂、御徒方一統御藥被下レ。并風邪流行中、常ニ御臺所不被下レ而ハ御徒方ヘ茂御臺所被下レニ付、人數書差出候樣、御目付長田六左衛門〇繁昌。ヘ被申聞レニ付、本御番夕出之者組頭共拾三人、御供番組頭共、夕御臺所頂戴爲仕度旨、御目付右同人〇長田繁昌。ヘ本御番黒川與市相達、今日〇享和二年(紀元二四六二年)三月廿日。ゟ御臺所被下レ事。

右ニ付、一昨十八日〇享和二年(紀元二四六二年)三月。ゟ同廿九日迄、當番御徒方ヘ御藥被下、夕御臺所者、今廿日〇享和二年(紀元二四六二年)三月。ゟ同〇享和二年(紀元二四六二年)三月。廿七日迄被下レ事。

一、三月廿四日〇享和二年(紀元二四六二年)。

此節病人多ニ付、本加御供番共、御定人數之内繰合、他組ゟ助取不申、御番相勤レ樣仕度段、伺書堀田攝津守殿〇正敦。ヘ三阿彌ヲ以差上レ處、伺之通被仰渡レ。且組々追々出勤いたしレ得ハ、猶又申上レ樣、攝津守殿〇堀田正敦。被仰渡レ。右書面ヘ致承附、助詰御番稻葉主稅差出申レ事。

一、三月廿七日〇享和二年(紀元二四六二年)。

此間中風邪流行ニ付、御徒方一統御臺所被下レ處、明廿八日〇享和二年(紀元二四六二年)三月。ゟ御藥不被下レ旨、御目付長田六左衛門〇繁昌。口達。

一、三月廿九日〇享和二年(紀元二四六二年)。

堀田攝津守殿〇正敦。被仰渡レ由、此間中風邪流行ニ付、御藥被下レ處、最早明朔日〇享和二年(紀元二四六二年)四月。ゟ御藥不被下レ旨、御目付土屋長三郎〇正備。口達。

一、四月二日〇享和二年(紀元二四六二年)。先達而申上ゐ風邪流行、組々病人多ニ付、本加御供番共、人數繰合相勤ゐ處、此節追々出勤、定例相成ゐ段、堀田攝津守殿〇正敦。ゐ三阿彌ヲ以御届申上ゐ事。

——御徒方萬年記〇巷街贅說。大意同。

享和二戌年〇紀元二四六二年。三月風邪流行ニ付、長髪ニ而罷出ゐ儀、併供減ゐ而召連ゐ儀不苦ゐ云々、此節、一統風邪事明和六丑年〇紀元二四二九年。之通〇下略。

——天保集成絲論錄

享和二年壬戌〇紀元二四六二年。二月より四月ニ至りて、風邪流行す。是をお七風と呼。民間へ米錢を御救として給ふ。其頃覗からくり言たて節を付て手を打たゝき、八百屋お七か事を唄ふ、小兒ら此を學べり。

——聞のまに〳〵

是月〇享和二年(紀元二四六二年)三月。至四月、〇享和二年(紀元二四六二年)。諸國疫。幕府發ニ錢米ニ賑ニ江戸病民一。

——慶弘紀聞

此外憲法部類續編、森山孝盛日記等ニモ見ユレド略ス。泰平年表ニハ「二月〇享和二年(紀元二四六二年)。より四月〇享和二年(紀元二四六二年)。まで、諸國風邪流行、勤仕之輩に湯藥を賜ふ。又公儀より町家の貧民へ御救として、米錢を賜ふ。」ト記シ、武江年表ニハ「二月〇享和二年(紀元二四六二年)。より四月〇享和二年(紀元二四六二年)。に至り、風邪流行、賤民へ御救米錢を下し給ふ。俗にお七風といふ。八百屋お七の小唄はやりし故なり。」ト傳フ。續日本王代一覽亦異傳ナシ。兎園小說ニ「文化元年〇紀元二四六四年。にはやりし風邪を、お七風と名つけたり。こは八百屋お七といふ小うたの流行せしによりてなり。」トスルハ或ハ記臆ノ誤リニ非サル歟。若夫時還讀我書、左ノ如ク記ス者、亦此時ノ感冒ヲ謂フ乎否乎。

〇上略。閑田次筆ニ享和辛酉ノ歲二〇元年(紀元二四六一年)。極月ヨリ壬戌〇享和二年(紀元二四六二年)。ノ正月ニ及ビ疫邪流行ス。荷蘭人ヨリ傳ヘシモ、去年漂流セシアンボシナトヨリ染シモ云ヘリ。京師ハ、二月廿日〇享和二年(紀元二四六二年)。ヨリ三月廿日〇享和二年(紀元二四六二年)。頃マテ行ハレ。關國ミナ病ム。微疫ナリ。其病人候ノ中ニ必ズ薄赤キ毛アリ。或ハ一條、或ハ二三條ツヽナリ。蠻人ヨリ傳ヘシ故ニカヽル毛モ生セシヤト云ヘリ。意フニコレ〇寛政七年(紀元二四五五年)。御猪狩風ヲ指ス。同證ナランカ。彼ノ所謂羊毛瘟ハ身體ヘ羊毛ノ如キモノ、生スルニテ、自ラ別病ナリ。

享和三年痲疹

三年癸亥〇享和〇紀元二四六三年。江戸痲疹流行、四月ヨリ六月ニ至ル。〇塵塚談。時還讀我

霸都時代ノ疫癘

書。麻疹啓廸。麻疹年代記。麻疹年譜。成蹟錄。傳法院日並記。聞のまゝに。森山孝盛日記。癸亥隨筆。享和雜記。橘黃年譜。麻疹必用。

享和三年麻疹　ハ、塵塚談、時還讀我書、傳法院日並記其他ニ見ユ。相參看シテ、流行ノ狀況ヲ知ル可シ。

四月廿九日癸巳〇享和三年(紀元二四六三年)。

一、此節世上專ら麻疹流行　先年ゟ廿八年目。怪我も有之。本間拙齋、先年駿府在番之節、夢想ニ麻疹之神ゟ被ㇾ傳ㇾ呪之由ニ而、小十人頭江間平右衛門相傳ニ而、先年流行之節も呪被ㇾ致ㇾ、其外榊原小兵衛　御代官。も相傳ニ而呪被ㇾ致ㇾ、中川飛驒守も同樣、郡代屋敷ニ而呪を被施ㇾ、毎日三百人程つゝ來。札を以取扱ㇾ由。然共中川江間共、息麻疹を被煩甚重く、漸快氣ノ由。其外有德院樣〇德川吉宗。御傳法之三豆飲など專ら諸家相用ㇾ得共、きかす。樣々呪も流行致ㇾ處一ツもきかす。〇五月十八日、六月二日(〇享和三年紀元二四六三年)ニも麻疹ノ記事有リ。

——森山孝盛日記

四月〇享和三年(紀元二四六三年)。より**江戸麻疹大**に流行、貴賤多く之を患ふ。顯道〇小川。此度の發疹病**四月二十一日**〇享和三年(紀元二四六三年)。より**七月**朔日〇享和三年(紀元二四六三年)。まで他の病人**百二十三人**、親族家僕十九人、養生所病人の舊十六人、都て**百五十八人**、**丙**に孕婦九人あり、**百五十八人中死せしもの一人もなし**

——塵塚談

江戸ハ專ラ四月〇享和三年(紀元二四六三年)。ヨリ流行シ、貴賤上下老少ヲ分タズ傳患セザルモノナカリケリ。〇中略。**三月末**〇享和三年(紀元二四六三年)。ヨリ四五月〇享和三年(紀元二四六三年)。ノ間盛ニシテ**六月**ニ及ヒテ**少ナリ**、**四月末**〇享和三年(紀元二四六三年)。ヨリハ已ニ北漸ス。

——麻疹啓廸

癸亥〇享和三年(紀元二四六三年)。麻疹ハ、都**下**〇江戸。ハ**四月**〇享和三年(紀元二四六三年)。中マデ病モノ猶少カリシガ、端午〇享和三年(紀元二四六三年)五月。ノ日未牌ヨリ酉牌ニ至ルマデ、白氣一道アリテ天ヲ亘リシガ、爾後俄ニ多ク行レ、沿門皆病ムニイタル。**丙申**〇安永五年(紀元二四七六年)。ノ疫ノ前ニモカヽル事アリシト聞ク、錦城先生〇太田。ノ話ナリ。

——時還讀我書

享和三癸亥〇紀元二四六三年。**流行安。永五年**〇紀元二四三六年。ヨリ二十八年目也。自仲春〇享和三年(紀元二四六三年)。至仲秋。此年〇享和三年(紀元二四六三年)。の痲疹は、死亡危急の輩は、先年よりすくなけれども、麻疹後餘毒甚敷、或ハ頭瘡、又ハ瘰癧等ヲ發シ、或ハ目に入、手足不叶、或は腰の廻りに惡瘡を發し、又は生涯片輪者と成たる人々、其數を知らず。既當時二十五六歲比の男女の盲人は、**多分享和三年**〇紀元二四六三年。**の麻毒**

つよき輩也。尤重きは餘毒すくなく、輕きは却て餘毒多し。油斷すべからず。又病後毒斷のゆるかせより發る也。　——麻疹年代記

文化三年痘瘡

十五日〇享和三年(紀元二四六三年)五月。

一、此節海内一統麻疹流行ニ付、自分方御家來幷供僧役僧も大勢相惱ハ事。自分家來者不殘ニ而甚迷惑いたしハ事。

一、明日〇享和三年(紀元二四六三年)五月十六日。ハ、善光寺如來御著ハ由、別而此節甚困り入ハ事。　——傳法院日並記

聞のまに〳〵ニハ「四月〇享和三年(紀元二四六三年)。より麻疹流行して人多死す」ト有リ。成蹟錄、癸亥隨筆、享和雜記、橘黃年譜、麻疹必用、武江年表、續日本王代一覽ノ類、亦略同シ。麻疹年譜ニハ、

竹内直躬ノ詩ニ享和三年〇紀元二四六三年。麻疹流行シテ夏ヨリ秋ニテ猶止マズ。

戲題寄造化小兒詩

麻疹流行已滯遲。幾家年少瘦腰肢。往鄉歸去無遺恨。爲擬人間驅疫辭。

文化三年丙寅〇紀元二四六六年。春ヨリ四五月〇文化三年(紀元二四六六年)。ニ至ルマテ、江戸痘瘡流行ス。〇續日本王代一覽後記。

文化三年痘瘡　ハ、

當春〇文化三年(紀元二四六六年)。ヨリ四五月〇文化三年(紀元二四六六年)。ニ至テ、江戸及近國疱瘡大ニ流行シテ、小兒多死亡ス。　——續日本王代一覽後記

五年戊辰〇文化五年(紀元二四六八年)。秋、江戸風邪行ハル。〇兎園小說。續日本王代一覽後記。

文化五年風邪　ハ、世俗之ヲねんころ風ト稱ス。兎園小說云フ、

前年〇文化四年(紀元二四六七年)。の冬より、五年〇文化五年(紀元二四六八年)。春夏の頃まで、里巷の小唄本ねん〳〵ころ〳〵節とかいふものゝいたく流行りし事ありき。そのうたを聞くに、わしがわかいときやおかめといふたがのんころ、今は庄屋どのゝ子守する、ねん〳〵ころ〳〵ねんころりとうたへり。〇このうた、もとは歌舞伎狂言にはしまりしを、つひに江戸中に推うつりて、いたく流行したるなり。又みめよりと名づけたる下品のあん餅を、市中の辻〳〵にて賣りはじめしも、この時のことなり。こは右のうたの中に、人はみめよりたゞこゝろ、といふことのあればなるへし。

識者或はいへることあり、今茲〇文化五年(紀元二四六八年)。ハ秋のころに至て、感冒必流行せん歟、細人小兒おしなべて、寢々轉々と謠ふことと、是病臥の兆ならんといへり。果して八九月の頃に至りて、風邪感冒流行して、良賤病臥せさるハなく、輕きハ兩三日にしておこたるもありしかど、重き

いその症疫熱に變じたる、三四十日に至るもあり。或ハ庸醫に惑られてよみぢに赴くものもありけり。このときのゑせ狂歌に。

はやり風無常の風もましりけり、ねん〳〵ころり用心をせよ。

かくて病むとやむ程に、關の八州いへばさら也、京攝の間まで、脫るゝものなかりしとぞ。○中略。**文化五年**○紀元二四六八年。の秋はやりし風邪をねんころ風と名づけたり。

續日本王代一覽後記ニハ「八月下旬○文化五年(紀元二四六八年)。ヨリ九月下旬(○文化五年(紀元二四六八年)。ニ至テ、江戸及近國風邪大ニ流行。」ト見ユ。

八年辛未○文化八年(紀元二四七一年)。**四月、江戸風邪流行ス。**○枳園隨筆。聞のまに〳〵。街談文々集要。武江年表。

文化八年風邪　ハ、

文化辛未　○八年(紀元二四七一年)。季春下浣ヨリ初夏(○文化八年(紀元二四七一年)。ニ沿テ傷風大ニ行ハル。其狀前ニ比スレバヤヽ輕ク、其行ハルヽヤ、前ニ比スレバ勢緩ナリ。然レドモ享和壬戌○二年(紀元二四六二年)。**以來ノコトナリ。風鬼ヲ造リ、是ヲ街外ニ送リ、邪氣ノ淹滯ヲ漏ス。**

四月初旬　○文化八年(紀元二四七一年)。より風邪流行。

——枳園隨筆

人のなり小袖のもやう髮かたち、流行風さへ遲き山の手。蜀山人

——武江年表

十三年丙子　○文化(紀元二四七六年。**夏秋ノ候、江戸時疫流行シ死スル者多シ。**○時還讀我書。武江年表。聞のまに〳〵。

文化十三年時疫　傳ヘテ云フ、

文化丙子　○十三年(紀元二四七六年)。**夏秋ノ際、都下**○江戸。**大ニ疫アリ。其證、初起速ニ少陽ヲ犯テ、熱勢熾盛ニ、日ナラズシテ精神昏憒スルニ至ル。大抵大小柴胡黃連解毒ノ類ノ擬スヘキ者多ク、正陽陽明ヲナス者ハ少カリキ。老醫ノ話ヲ聽ニ、先年ハ陰證躁擾スル證多カリシト。先敎諭ノ傷寒ヲ治セラレシヲ視ニ、亦多ク參附ヲ用タマヒシナリ。蓋コノ歲**○文化十三年(紀元二四七六年)。**ヨリ以後ノ疫ハ、大略コノ種ノ證ニシテ、陰證ハ至テ稀ナリ。風氣變遷ノ然ラシムルモノナランカ。**

——時還讀我書

文化十三丙子　○紀元二四七六年。(八月閏有)初夏ヨリ秋○武江年表「閏八月」ニ作ル。まで、**江戸ニ疫癘流行、人多ク死。**

——聞のまに〳〵。○武江年表同。

文政二年風疫

仁孝天皇文政二年己卯○紀元二四七九年。**二月、江戸風疾行ハレ、**○泰平年表。**五月**

文化八年風邪

文化八年風邪事蹟

文化十三年時疫

文化十三年時疫事蹟

文政二年痢疾

○文政二年(紀元二四七九年)。ヨリ八月○文政二年(紀元二四七九年)。ニ亘リテ、痢疾流行ス。死者尠カラズ。○時讀我書。

文政二年風疫事蹟

文政二年風疾　ハ、泰平年表云フ、

二月、○文政二年(紀元二四七九年)。江戸諸國、風疾流行。

文政二年痢疾事蹟

文政二年痢疾　ハ、時還讀我書云フ、

文政己卯○紀元二四七九年。**五月**末ヨリ八月頃マテ、都下大ニ痢疫アリ、斃ルヽモノ凡**幾**クナルヲ知ラス。皆熱毒痢ニシテ、初發ヨリ熱勢熾盛ニシテ、甚キハ百餘行ニイタル。大抵發表攻裏、如クハ清涼ニテ其功ヲ奏セリ。偶虛ヲ挾ムモノアリ、又桃花湯ヲ用シ證モアリ。粟穀訶子ノ類ハ必害ヲナセリ。又虛家渴下シテ、血水ヲ下シ、羸脫ニ及モノアリ。又腸中液燥クヿ甚キ證ノ腹裏拘急スルニ、地黃ヲ用テ效ヲ得シヿモアリシ也。

〔參考〕續日本王代一覽後記云フ、

四月九日　○文政二年(紀元二四七九年)。肥前國海濱ニ龍宮界ヨリ使女神社姫ト云フ人面鱗身ノ魚出現シ、今年　○文政二年(紀元二四七九年)。コロリト云ル病流行シテ、萬民多死亡スベシ、此難ヲ遁ントト欲スル輩ハ、我姿ヲ早ク見ルヘシト云々。江戸中ノ貴賤、此神社姫ノ姿ヲ畫テ門戸ニ張ル、其愚嘲笑スベシ。

武江年表亦云フ、「夏　○文政二年(紀元二四七九年)。より痢病行る、死亡のもの多し。此節の病を俗にコロリといふ。是を避る守り也とて、探幽が戲畫百鬼夜行の内、ぬれ女の圖を寫し、神社姫と號して流布せしなり。」ト。虎列刺病名考○編年史料收。ニハ、「虎列刺病、支那ニ於テハ、瓜瓤瘟ノ瘟毒ト名ク。又蕃痧病ノ暴瀉、霍亂等ノ諸病名ノ如キ、包含シテ往々虎列刺ノ別稱タリ。明末ニ始リ、清ノ乾隆(○元文元年(紀元二三九六年)―寛政七年(紀元二四五五年)。)嘉慶(○寛政八年(紀元二四五六年)―文政三年(紀元二四八〇年)。)年間流行、年ヲ過ルニ從ヒ甚シ。我邦ころり又とんころり(急性を指す)三日坊ノ數名稱アリ。蓋シころりハ洋名ニシテ、とんころり、三日坊ハ、病ノ形容ヨリ名ヲ下セシ者ナリ。」ト有リ。此疫果シテ虎列刺ナリシヤ否ヤヲ知ラズ。見聞雜記左ノ如ク見ユルハ、其流行ノ甚シカリシヲ推スルニ足ル。

文政二卯年(○紀元二四七九年)夏、痢病流行の時、

艱難經

滅法法蓮華經、文政二ヶ年世ヶ間困窮、武家三々、米石下ヱ直、諸色高直、痢病流行、藥品高直、醫者三々、藥禮無ヲして、盜賊流行、加役本役、輿ヲ力同心、めつた無生、欠ヲけり歩行、滅法がいなヲ、時節到、あんまりだ〳〵。

〔附記〕時還讀我書ニ據レハ左ノ如シ。

覇都時代ノ疫病

文政三年疫病

文政庚辰〇三年(紀元二四八〇年)。春夏ノ際、淫雨ヤマス。ソレヨリ暑ヲ催ス頃マテ、乾霍亂ニ似テ心腹暴痛スル病人多シ。其證、熱氣アリテ脉洪大、心下滿鞕支痛スルヿモアリ。飲食下ラス、大便祕結ス。困テ備急陷胸ナトニテ一下シテ、一旦ハヤヤ緩メ𪜈、却テ痛甚ク、熱候盛ニナリ、煩渴スルニ至ル。是ニ於テオモヘラク、此雨濕ノ氣内ニ犯テ水毒ノ聚タルモノナラン、下スヘキ證ナラストソ、增損理中丸料ニ蒼求ヲ用テ白求ニ代ヘ、水煎服セシメシニ、痛頓ニ減シ、不日ニ快復セリ。遂ニ十數人ヲ活シタリ。後ニ導水瑣言ヲ檢スルニ、京師ニ結胸證ニ似テ下劑ノ應セス、外臺ノ桑白皮黑豆檳榔ノ方ニテ愈ル證行レシヿアリト云ヘリ。盖一類ノ病ナリ。

文政四年風邪

文政四年疫疾

文政四年風邪事蹟

四年辛巳〇文政〇紀元二四八一年。二月、江戸風邪行ハル。〇御徒方萬年記。政保間記。北叟遺言。兎園小說。松屋筆記。時還讀我書。五月〇文政四年(紀元二四八一年)。再流行有リ。〇時還讀我書。七月〇文政四年(紀元二四八一年)。又疫ス。〇時還讀我書。

文政四年風邪　左ノ如シ。

一、二月廿一日〇文政四年(紀元二四八一年)。

廻狀追啓之内、

風邪流行ニ付、長髮罷出、供廻格別減少不苦旨、(朱)若年寄内藤紀伊守殿〇信敦。御口達之由、御目付阿部四郎兵衛〇次德。被申聞ル。

右之段、本御番組頭衆ニ申渡ル。

一、同〇文政四年(紀元二四八一年)二月。廿四日

廻狀追啓之内、

一、昨日〇文政四年(紀元二四八一年)二月廿三日。(朱)御目付須田與左衛門〇盛昭。被相達ル。此節風邪流行ニ付、格別引多之御組者、相達可申旨之由。與左衛門殿〇須田盛昭。御組拾壹人引。書面ニ而今朝〇文政四年(紀元二四八一年)二月廿四日。相達ル處、一組限之儀ニ無之、御徒惣人數勤之者引込之旨、此節之調ニ而可相達旨ニ付、御組々取調ル而、本御番所ニ一兩日中相屆ル樣、可相觸旨、拙者組頭ニ申渡置ル。取調相揃ル節、本御番之御方、一紙ニ御書分、御達可被成与存ル。

一、同日〇文政四年(紀元二四八一年)二月廿六日。

廻狀追啓之内、

此節風邪流行ニ付、御目見以下之者共ニ、御煎藥被下ル旨、且病人多ニ付、御

臺所被レ下レ旨、兩樣とも堀田攝津守殿〇正敦。御書付を以被二仰渡一レ由、御目付阿部四郎兵衛〇次德。被二申聞一レ二付、本御番組頭レ二申渡ス。

一、此節風邪流行ニ付、御用向無レ之、詰御番之面々者、御廻後勝手次第致二退散一レ而茂不レ苦由、堀田攝津守殿〇正敦。被二仰聞一レ旨、御目付阿部四郎兵衛〇次德。被二申聞一レ。

一、二月廿七日〇文政四年(紀元二四八一年)。

廻狀追啓之內、

一、此節日々御徒方レ被レ下レ御臺所頂戴之人數之儀、毎日人數相定レ候ニ付、差出レ候ニ及間敷哉与詰御番修理殿方御目付酒井作右衛門〇政長。レ被レ及二掛合一レ處、人數定居レ候ハヽ、最早日々差出ニ不レ及、今日之斷を定人數ニ相定、日々可レ被二申聞一レ下筈、作右衛門被二申聞一レ。

一、同斷御藥被レ下レ人數書者、日々取調差出レ候事、且此儀茂二度目何拾人分、三度目何拾人分与申書付持參、請取レ候者被レ下レ旨、御目付大草主膳〇高好。被二申聞一レ間、〇以下脫歟。

——御徒方萬年記〇政記大略同。

文政辛巳〇四年(紀元二四八一年)。ノ二月中旬ヨリ、都下感冒流行シ、闔家コト〳〵ク枕ニ就ニ至レリ。西國ニテハ去冬〇文政三年(紀元二四八〇年)。ヨリ行レテ、邪氣盛ニシテ久解セサルモノアリト。關東ハ、其證初起ハ稍劇ク加進スヘキ勢ナレ共、桂葛柴胡ノ類ニテ、速ニ愈タリ。三月初旬〇文政四年(紀元二四八一年)。マテニテ止タリ。然マヽ餘邪留連スル者アリ、動スレハ吐衄血ヲナスモノ多カリシ。蓋近年感冒ノ流行病者ノ夥キヿ、是歲〇文政四年(紀元二四八一年)。ノ如キハ曾テ見及サルホトノヿナリキ。

辛巳〇文政四年(紀元二四八一年)。ノ五月、都下又感冒行ハル。春日ニ比スレハ邪モ輕ク、病モノモ亦少シタヽ、小兒ニハ日ヲ引モノ多シ。

——時還讀我書

同年〇文政四年(紀元二四八一年)。二月中旬、引風流行。江戸中一軒之內之者、一人ニてもものがるヽものなく、一統ニ三四日つヽはわつらふ。此以前はやりたるお七風よりもつよしといへり。此風邪は、長崎〇肥前國。より來るとも、又鎌倉鶴ヶ岡のうはばみの毒氣也ともいふ。御城御臺處ニ而、大釜ニて風藥せんじ、御勤仕の人々ニ被レ下、此節御勤仕之方々、長髮ニ而も不レ苦よし。大風邪流行に付、町會所にて御救錢被レ下。〇中略。

此流行の風は、長州侯御下向の節よりはやりたりとて、長州風といふ。落書、

長門風藥きくかはしらねとも、氣はおもだかで、たいふくるしむ。
又先頃よりだんぽさん〳〵といふ童謠はやりし故、たんぽ風ともいへり。

御城ニ而被下ル御藥

紫蘇三分　陳皮半兩　半夏三分
茯苓三分　葛根三分　桔梗半兩
前胡三分　枳殼半兩　木香半兩
甘藥三分　人參三分

煎方

水一升半、一升ニ煎シ用。但生姜七片入。

御藥被下ル人數延人

巳〔〇文政四年紀元二四八一年〕二月廿六日二千二人。
同〔〇文政四年紀元二四八一年二月〕廿七日千七百七十六人。
同〔〇文政四年紀元二四八一年二月〕廿八日千五百十三人。
同〔〇文政四年紀元二四八一年二月〕廿九日千五百四十七人。
同〔〇文政四年紀元二四八一年二月〕晦日千四百五十九人。
三月朔日〔〇文政四年紀元二四八一年〕千二百三十人。
三月二日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕千二百六十二人。
三日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕千二十八人。
四日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕千百三十九人。
四日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕千百三十九人。

五日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕千二十八人。
五日〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕九百廿九人。
同〔〇文政四年紀元二四八一年三月〕六百七十一人。

合一万四千五百六十六人。

但、御藥石數十四石五斗六升三合。

外ニ西丸女中へ被下候人數二千八百人。

御本丸御藥被下候人數延、

巳〔〇文政四年紀元二四八一年〕二月廿六日ゟ
同〔〇文政四年紀元二四八一年〕三月六日迄

合三万五千四百四十四人。

御藥石數三十五石四斗四升四合。

右之通御座候。

風邪流行ニ付、其日稼之者も町會所ゟ御救錢被下置候惣高、左之通、

一、錢四千七百廿九貫五百文。獨身者一万五千七百六十五人。但一人ニ付二百文ツヽ。

一、錢七萬三百五貫五百文。二人暮以上之者廿八萬千二百廿二人、但一人ニ付二百五十文ツヽ。

二口合錢七萬五千三十五貫文　六貫七百五十六文替ニテ、

此金一萬千六十七兩二分ト銀九分四厘二毛。

外、金十九兩三分ト十一匁四分二厘　筆墨紙代。

公儀ゟ御施藥之人數覺

二月廿五日(〇文政四年紀元二四八一年)ゟ三月六日(〇文政四年紀元二四八一年)迄十二日之間、御目見以下諸向ゟ、御施藥被ㇾ下候。但煎湯ニ而被ㇾ下。

三萬五千四十四人。但壹度ゟ三度四度迄頂戴之惣人數。

此藥廿五石六斗。

二月廿五日(〇文政四年紀元二四八一年)ゟ三月五日(〇文政四年紀元二四八一年)迄十一日間、大奥御目見以下、女中又者共、御藥被ㇾ下候員數、御藥四貫六百四十二匁。

——北叟遺言

二月〇(文政四年(紀元二四八一年)。)中ゟ風邪流行、此比ダンボサンヤ〳〵と云て飴賣者あり。しを小兒學ひいへり。(是下輩の詞に、なのがごちの者を少しあがまへてたんほこいへるは、僧家の檀方のこゝろなり、たんほは略なり。)これニ依て此節の風邪をダンボ風といへり。賤民に御救ひ米を賜ハる。

——聞のまに〳〵

文政四年〇(紀元二四八一年。)春二月の頃、いたく流行せし風蓋をだんほう風と名つけたり、こはこの時のはやり小謠に、だんほうさん〳〵と謠ひしことのあればなり。〇(中略。)此うち、谷風・お七風・ねんころ風・たんほう風ははげしかりき。家々毎に五人三人、枕をならべてうち臥さぬはなかりけり。西は京攝に至り、東は安房・上總、西南は甲斐・伊豆の海邊、北は信濃越後まで、なべて脫るゝものなかりしよし。その折〳〵に、友人の郵書にも聞えたり。たんほう風のはやりしとき、何ものかよみたりけん、

みやこから乘せてくるまのたんほ風、ひくものもあり、おすものもあり。

いとおかしきや、例の人の癖なるべし。かゝれば此風は、京〇(山城國。)よりはやり來つるにこそ。

——兎園小說

二月中旬〇(文政四年(紀元二四八一年)。)より彌生のはじめに及ぶまで、疫癘流行、十中八九はこの憂にかゝらさる家なしことし〇(文政四年(紀元二四八一年)。)今樣の囃に、だんほさん〳〵とはやすこと流行せり。〇(中略。)これより疫癘を名づけて、だんほ風といへり、〇(中略。)政府命ありて出仕の官人に長髮を許さる。

——松屋筆記

當月中旬〇(文政四年(紀元二四八一年)二月。)ヨリ下旬ニ至テ、江戸及諸國風邪大ニ流行ス。錦城ニ於テ、勤仕ノ輩ニ湯藥ヲ賜ル。町人貧窮ノ者ニ錢ヲ賜ル。

五月初旬〇(文政四年(紀元二四八一年)。)ヨリ中旬ニ至テ、江戸及近國風邪又流行ス。

——續日本王代一覽後記

慶弘紀聞ニハ、二月〇(文政四年(紀元二四八一年)。)疫。幕府賜ニ錢米於江戸貧民一濟ㇾ之ト有リ。

文政四年疫疾事蹟

文政四年疫疾　時還讀我書ニ、

辛巳ノ歳（○文政四年（紀元二四八一年）。）春來ヨリ雨少ク、梅雨モナク、夏秋炎熱甚シカリシガ、七月中旬（○文政四年（紀元二四八一年）。）ヨリ疫邪多シ。其證、初起惡寒セス、肌熱甚ク手ヲヤクカ如シ。脈多ハ數或ハ洪ヲ帶ヒ、或ハ緊細ヲ帶テ脈ヲ診スル時手顫ルモノアリ。下利日ニ四五行、滑便ベト〳〵ト夥ク瀉ス。渴劇ク冷物ヲ好ム。舌上多ハ胎少シ。黃白胎ニナルモアレト、マツハ啻ニ乾燥ス。心下支滿、腹部熱アリ、腹滿スルヿアレト實滿ニアラス、按スレハ水鳴ナトアリ。譫語アリ、昏睡不語、或ハ喃々妄言スルアリ。舌上ヌメリ赤ク、後ニハ爛レ、或ハ鏡面舌ヲナスアリ。頻ニ白沫ヲ吐クルアリ、嘔スルアリ。病甚ケレハ速ニ羸痩シテ、揷目上視スルアリ。初ヨリ汗ナキアリ、頻ニ汗出テ、額上ニ多キモアリ。日ヲ經レハ多ハ黑敗血ヲ下スナリ。數日血下テ漸々ニ斃ルモノ多シ。下血暴脫スルハナシ。一兩日ニシテ死タルハマヽアリ。此外ニ諸證アレモ、大略ハ右ノ如ク、大抵綱繆引日ナリ。熟ラ考ルニ、此證暑熱ノ所致ニシテ、先肌肉ヲ犯シテヨリ、筋脉ヘ着シ津液ヲ乾シ、血分ヘ迫ル故ニ、血コレカタメニ道ヲ失テ、內陷瘀滯シテ、遂ニハ下ルナリ。ソレユエ頻熱アレモ、石膏ヲ用テ解セス。胃實ノ候ナケレハ、固ヨリ硝黃ノ主トスヘキニ非ス。下利アレモ、附子ヲ用レハ熱更ニ甚ク、收血ノ方ヲ與レハ腹滿ヲナシ、破瘀ノカヽルヘキ蓄血ニモアラサルユエ、倘コレヲ用レハ、必命期ヲ促セシナリ。治療掣肘ノ證ナリ。清潤補ノ三法ト利水ヲ錯綜シテ、藥ヲ施テ愈シナリ。既濟湯益元湯ナトハ用ユヘキ證モアリ。又地黃ノヨク應セシモアリ。發表スヘキハ、少シナレモ、初起清凉ヲ兼タル汗藥ヲ用タルモヨロシ。大抵下血ノモノ多ク、不治ナリ。病後水氣ヲナスモノ多シ。又液燥テ熱ノ心ヲ熏シ、狂ノ如ナル者マヽアリ。輕證人邪氣留連シテ勞瘵ニ類スレト、小兒ハ疳熱ニ變スルアリ。是歳（○文政四年（紀元二四八一年）。）ノ疫丙子ノ歳ニ比スレハ、病者多カラス。邪勢モ彼ノ劇キニ似ス、證候ヤヽ異ナリ。經ニ所云ノ中喝中熱ノ類ニシテ、一種ノ疫病ナリ。注夏病モマヽ、有シカ、其證大ニ別アリ。

文政五年時行嗽

文政五年時行嗽事蹟

五年壬午（○文政五年（紀元二四八二年）。）秋、時行嗽行ハル。（○保嬰須知。）

文政五年時行嗽　保嬰須知ニ據レハ、

戴元禮證治要訣云、時行嗽、發熱惡寒、頭痛鼻塞氣急、狀如二傷冷一、熱連欬不レ已。初得疾即伏レ枕一兩日即輕。記、壬午、（○文政五年（紀元二四八二年）。）秋、滿城有二此病一。繼時甲申（○文政七年（紀元二四八四年）。）年、夏秋之交、又自二南而北一、得免者少。並呼爲二蝦蟇瘟一。用二參蘇飲加細辛半

錢。

其文政七年〇紀元二四八四年。ニモ流行ヲ見タルコト、下文之ヲ記ス。

附記　文政六年小兒頓嗆

〔附記〕時還讀我書ニ據レハ、

癸未〇文政六年(紀元二四八三年)。夏秋ノ際、都下ニ小兒頓嗆行ハル。亦一種ノ疫ナレハ、欬嗽ノ套方ニテハ效ヲミルヿ少シ。大略ハ清涼ノ藥ヲ佳トス。世緝ハ半夏瀉心湯加茯苓旋覆花ヲ多ク用テ治タリトイヘリ。宋人ノ蛤粉青黛ノ散藥醫意商ノ碧玉丹ナト應スルヿモアリ。奇方ニ、蝙蝠・青ホウツキシヤコ蝦ノ類ナリ。イツレモ燒テ性ヲ存シ、末トナシ服セシム。一味ツヽノ單方ナリ。俱ニマヽ驗アリ。其後戊子ノ歲〇文政十一年(紀元二四八八年)。ニモ行レタリ。多ハ石膏ニテ效ヲ得タリ。欬嗽ニ拘ラス、宿癖ナトノ動スルニ目ヲツケテ、消疳飲或ハ鷓鴣菜等ニテ治シタリトイヽシ醫モアリキ。

文政七年麻疹　文政七年風邪

七年甲申〇文政〇紀元二四八四年。春、江戸麻疹行ハレ、夏秋ニ及ブ。〇柳營日次記。本丸廻狀留。御徒方萬年記。時還讀我書。北叟遺言。聞のまに〳〵。是歲〇文政七年(紀元二四八四年)。又風邪ノ流行有リ。〇御徒方萬年記。甲子夜話。時還讀我書。兎園小說。續日本王代一覽後記。

文政七年麻疹事蹟

文政七年麻疹　是年〇文政七年(紀元二四八四年)。ハ、一方ニ麻疹ノ流行ヲ見、一方ニ風邪ノ流行ヲ見タリ。內麻疹ニ關スル所傳左ノ如シ。

正月十日〇文政七年(紀元二四八四年)。

松平伯耆守當番之所、麻疹被相煩難被勤、助順攝津守殿左近殿ゟ得共、上野〇市內下谷區。御參詣被仰出、爲御先詰被相越ゟ付、難被申越、次順壹岐守殿ゟ、助之儀被申越ゟ處、就疝瀉難被相勤、次之順拙者〇西尾隱岐守。今日助御番相勤申ゟ。

——本丸廻狀留

廿九日〇文政七年(紀元二四八四年)二月。

御檜重一組。生干御肴一箱。

右麻疹被相煩ゟニ付、被遣之。

御使水野石見守　德川右衛門督殿〇齊莊。

二日〇文政七年(紀元二四八四年)三月。

右御麻疹爲御尋被遣之。

御使仙石丹後守　紀伊宰相殿〇齊順。

十一日〇文政七年(紀元二四八四年)三月。

御檜重一組。生干御肴一箱。

御使藤川伊豆守　水戸宰相殿〇齊脩。

霸都時代ノ疫癘

右御麻疹爲ニ御尋一被レ遣レ之。

十八日〇文政七年(紀元二四八四年)五月。

御檜重一組。
生干御肴一箱。

右麻疹ニ付、爲ニ御尋一被レ遣レ之。

一、二月廿七日〇文政七年(紀元二四八四年)。

廻狀追啓之內、

昨日〇文政七年(紀元二四八四年)二月廿六日。御目付金森甚四郎〇可充。被ニ申聞一レ、此節世上麻疹流行ニ付、面々供連人數、格別減少召連レ而も不レ苦旨、無ニ急度一、向々ニ相達レ樣、(朱)若年寄增山河內守殿〇正寧。御口演之由、被ニ申聞一レ。

御使巨勢日向守
德川兵部卿殿〇齊禮。

——柳營日次記

文政癸未〇六年(紀元二四八三年)。霜月ノ頃ヨリ、西國ニ麻疹流行ノ風聞アリシニ、都下モ臘月〇文政六年(紀元二四八三年)。ノ末ニハ、芝邊〇市內。ニテ患ルモノアリ。甲申〇文政七年(紀元二四八四年)。正月初旬ヨリ、漸々流行シテ、二月〇文政七年(紀元二四八四年)。ニ至テハ、滿城皆コレヲ病ミ、三月〇文政七年(紀元二四八四年)。マテニテ止ニケリ。大抵ハ輕證ニシテ、藥セスシテ愈ル者亦少ナカラス。故ニ予〇多紀茝庭。カ處療セシモノ三百人ニハ滿ス。一人モ疑難措手ノ證ニ遇ス。享和癸亥〇三年(紀元二四六三年)。ノ疫ニハ、逆證モ多カリシト聞シ

ニ、當年〇文政七年(紀元二四八四年)。ハ事カハリ、東西ヒニ不治ノ證ヲ見ズトソ。

——時還讀我書

はるはしか、なつはかりたく又出みづ、秋はらくたに、冬はひやほん。是いかなる人の作りしを知らず、しかるに此にてことし甲申の年〇文政七年(紀元二四八四年)。の世間のあらましを盡したりといふべし。しかるにはしかは、余かやみたりし年とは大きにかるらかにして、此疾にてうせぬる人は、誠に十に一人もなかりし也。世に疱瘡はみめ定め、はしかは命定めとなんいへる諺もあれと、當時は、此疾の療養殊の外にひらけて、至極も造作なる手當にて、みないゆる樣子也き。余か家にも、女子ともに此疾にかゝりたれと、これもいとかろらかにて愈たり。〇下略。

——北叟遺言

文政七年甲申八月閏有(〇紀元二四八四年)。春より麻疹流行、夏秋〇文政七年(紀元二四八四年)。に及ぶ、又風邪多。

——聞のまに〳〵

文政七年風邪 傳へ云フ、

一、三月廿日〇文政七年(紀元二四八四年)。

廻狀追啓之內、

霸都時代ノ疫癘

御目付神尾市左衛門〇元孝。被二申聞一候者、此節世上風邪流行ニ付、面々供連、人數格別減少召連候而も不レ苦、且長髪ニ而相勤候而も不苦儀之旨、無二急度一向々〻相達候樣、攝津守殿〇正敦。御口演之由、被二申聞一候。

——御徒方萬年記

甲申〇文政七年(紀元二四八四年)。三月、麻疹ヤヽ止ントスル頃ヨリ、時氣盛ニ行レ、一家、少長トナク皆床ニ臥ニイタル。其證一應ノ感冒ヨリ熱氣強ク、初起ヨリ少陽ヲ兼ルモノ多シ。二日ノ間ハ煩熱シ、胸脇ヨリ周身マテ疼痛セリ。輕ハ七八日、重ハ十數日、柴胡種類ニテ清涼シテ全治セリ。此亦先タツテ浪華〇攝津國ニ行ルヽ傳聞セシニ、間モナク都下ニモ及セリ。辛巳〇文政四年(紀元二四八一年)。ノ春ノ疫ト相似テ稍重カリシ。

——時還讀我書

近年氣候不順ニシテ兩三年諸國風水旱ノ患頻ニアリ、人身ニモ障ル者ト見エテ、流行病モカレコレアリキ。同シク晴ツヽキシガ、二月〇文政七年(紀元二四八四年)。ノ末ヨリ霖トナリ、花時モ寒ク降續キ過ヌ。ソレ故ニヤ春寒甚シク、穀雨ノ候モ、人々嚴冬ノ服ヲ着ヌ。且世上麻疹行ハレテ、家コトコレニ染シガ、コノ頃又風邪一般流行シ、感冒セヌモノハ無シ。因テ林翁〇檉宇。へ書通ノ次テニ、若ヤコノ流行風ノ患ハ無キヤト問ケレバ、ソノ返書ノ端ニ、

老朽し柳は人になびかねば、世の春風もよきて吹らし。

ト書テ越シタリ。此翁強頂ノ風骨、コノ戲ノ一首ニモ見エケリ。麻疹ハ別ナリ、予カ內モ、家來老若ミナ流行染タルカ、予ト外ニ兩三人ハ、ソノ患ニカヽラズ。予カ齡ハ、翁ヨリハ十年モ長ケタルカ、コノ頃ハ風病ニテ劍技ハ相手ナケレバ、日々指矢ノ百筋二百筋ハ射リヌ。

——甲子夜話

去年甲申〇文政七年(紀元二四八四年)。の春二三月の頃、はやりし風邪を薩摩風と名づけたりこは西國よりはやり初て、こヽまで移り來つればならん。〇下略。

正幹〇渥美〕云、文政四年〇紀元二四八一年〕の春はやりし風邪の折、本町〇市內日本橋區〕なる町醫西尾寬仲といふもの、治療いたく行はれしと云。この時、半可山人(俗稱植木八三郎と云)の狂詩あり。因にこヽに錄しぬ。

本町無二處不一風邪一。寒熱往來頭痛斜。西尾寬仲傳二妙藥一。功能散二入病人家一。

——兎園小說

〔參考〕時還讀我書ニ、

甲申〇文政七年(紀元二四八四年)。臘月ヨリ乙酉〇文政八年(紀元二四八五年)。ノ春マデ、一種ノ傷寒ヲ病ムモノアリ。其證ハ初起、一應ノ太陽ナレドモ、發汗シテ解セズ、下痢日ニ

霸都時代ノ疫癘

數行、輕キハ兩三行、重キハ十餘行、或ハ下痢セズ、三四日ニシテ熱勢イヨ〳〵盛ニ、譫語煩悶、口舌乾燥、渴ハ甚シカラズ、呼吸頻ル促ク、脈弦濇數ニシテ、按スルニ根蒂少ナク、舌上ハ黃潤ニシテ澁リ、面赤耳聾テキカズ。此ノ如キモノ、三四年前ヨリ寒月ニハ間々是アリ。○中略。或ハ一二日、或ハ三四日ニシテ諸症頓ニ減ジ、不日ニ全癒セリ。

十日（○文政七年（紀元二四八四年）六月。

御書付

石坂宗哲ニ製法被仰付候官製人參之內、御用殘り之分、此度世上爲御救、本町○市內。大傳馬町○市內。南組藥種問屋共へ御拂ニ相成、御府內何れ之藥種屋ニ而も商賣いたし候間、右御救之御趣意萬石以上以下幷寺社之面々共相心得、人參望之者ニ、勝手次第買請候樣可致候。

右之趣、江戶中武家寺社之面々にも不レ洩樣、可レ被二相觸一候。

——柳營日次記

文政八年痘瘡　ハ續日本王代一覽後記謂フ所左ノ如シ。

八年乙酉（○文政○紀元二四八五年。十月、痘瘡流行シ、年ヲ踰テ止マズ。○續日本王代一覽後記。

文政八年痘瘡事蹟

今月（○文政八年（紀元二四八五年）十月。ヨリ江都及諸州疱瘡大ニ流行シ、年ヲ踰テ止ズ、人多死亡ス。殊ニ小兒甚タ多シ。戊年（○文政九年紀元二四八六年）三四月ニ至テ、漸ク止ム。

話。時還讀我書。

十年丁亥（○文政○紀元二四八七年。五月江戶風邪流行、死スル者尠カラズ。○甲子夜話

文政十年風邪　ハ、世ニ津輕風ト云フ、

五月（○文政十年（紀元二四八七年）。此頃都下一般ニ風邪流行シテ其患ニ罹ラザルモノナシ、其中ニハ疫症ト變ジ、死ニ至ルモ少カラズ是ニツキ、亦世ニ俗諺行ハル、此度ノ流行風ノ名ヲ津輕風ト云フ、其故何ゾト云フニ、シソンズルト輿ニノル、コシハ俗間死者ノ葬行ノ具ナリ、コレハ津輕侯ガ御大禮ノ節、輿ニ乘テ謹責セラレシ故ナリ。

——甲子夜話

文政丁亥（○十年（紀元二四八七年）。ノ五月、感冒大ニ行ル。其證大抵辛巳（○文政四年（紀元二四八一年）。甲申（○文政七年（紀元二四八四年）。ノ疫ト同ク、紫胡マテニテ癒タリ。劇證ハ絕テナカリキ。

——時還讀我書

［附記］　疫邪流行年譜ニ、

一夕話淺田翁。ニ云、文政十二年（○紀元二四八九年。六月大風ノ後、赤病ト稱シテ、人々五

文政十三年時疫

文政十三年時疫事蹟

身赤クナリテ二三日ニテ、人クルヒ死スル者多ク、男子ノ分ハ、赤裸ニナリテ市中ヲ走リテ死スト云フ。其後ハ痢病流行ノ人多ク死シタリ。是ハ風後ノ水、口體赤クナリ、井戸替シテ漸ク常ニ復シタリ。其水ヲ呑タル人ハ、皆痢ヲ病シト云。此病諸藥驗ナク、病人青梅ヲ食シ、狂走ノ止ミシヲ聞テ、醫者烏梅ヲ以テ治スト云フ。

十三年庚寅（文政十二月十日改元、天保元年（紀元二四九〇年）。）四月ヨリ六七月ニ至ル間、江戸時疫行ハル。（時還讀我書。）

文政十三年時疫　時還讀我書ニ據レバ、

天保庚寅（天保元年（紀元二四九〇年）。）四月ヨリ六七月（天保元年（紀元二四九〇年）。）ニ至ルマテ、時疫アリ。患ル者甚多シ。其證、多ハ初ヨリ惡寒ナク、熱甚ク、脉緊數ニメ、大便下痢、舌上胎ナク、水ヲ欲シ、劇キハ赤斑ヲ發シ、或ハ發黃、或ハ齦血、大便血、或ハ齒齦出血スルモノアリ。清熱冷血ノ效ヲ得ルヿ多カリシ。サレモ不治ノ證亦少カラス。舌胎ト熱候トハ、甚相適セサリキ。且其熱ノ解シテ爽快ニ及フニハ、甚日ヲ引タリ。輕證ニテモ一月餘、重キハ二三月ヲ逾ルニ至レリ。邪熱血脉ニ沈漬セシ故ナルヘシ。前件ニモ云ヘル如ク、近年ハ攻補温凉モニ純一ニナシカタキ證多キヿハ、コレ等ニテモ知ルヘキナリ。

天保二年感冒

天保二年感冒事蹟

天保二年辛卯（紀元二四九一年。）三月末ヨリ四月中旬（天保二年（紀元二四九一年）。）ニ至リ、江戸感冒行ハル。（時還讀我書。）

天保二年感冒　時還讀我書記ス所、左ノ如シ。

天保辛卯（二年（紀元二四九一年）。）三月末ヨリ、四月中旬（天保二年（紀元二四九一年）。）ニ至テ、感冒大ニ行ル。然モ芳香ノ劑效ナク、大略柴桂湯ナトニテ癒タリ。近來ノ徵疫オホカタハ此證ナリ。

天保三年風邪

天保三年風邪事蹟

三年壬辰（天保三年（紀元二四九二年。）冬、江戸風邪大ニ行ハル。（本丸廻狀留。御徒方萬年記。聞のまに〳〵。時還讀我書。兎園小說餘錄。武江年表。）

天保三年風邪　傳フラク、

一、同月（天保三年（紀元二四九二年）十月。）廿五日

此節風邪流行致しい間、長髮ニ而登城致しい而ハ不苦、且供人格別減少いたしい而ハ不苦い旨、堀大和守殿（親寧。）被仰渡い由、御目付佐橋市左衛門（佳富。）被

申聞候

一、同月（○天保三年（紀元二四九二年）十月。）廿八日

此節病人多ハニ付、御番衆其外ニ而ゟ、例与違、詰切、自分辨當之面々者、此砌御臺所給させ可申ハ。

右堀大和守殿（○親寳。）御書取ヲ以被仰渡ハ由、御目付佐橋市左衛門（○佳富。）被達ハ間、記置申ハ。以上。

御徒頭衆

此節一統風邪流行ニ付、御目見以下之者共ハ御煎藥被下ハ旨、大和守殿（○堀親寳。）被仰渡ハ間、諸事文政四巳年（○紀元二四八一年。）之通、御心得可有之ハ。依之申達ハ。

以上。

十月（○天保三年（紀元二四九二年）。）

（朱）御目付佐橋市左衛門（○佳富。）

一、同月（○天保三年（紀元二四九二年）十月。）廿九日

（朱）廻狀追啓之内、

追啓。此節風邪流行ニ付、御目見以下之者共ハ御煎藥被下ハ由、且病人多ニ付、御番衆其外ニ而ゟ、詰切ハ面々ハ御臺所被下ハ旨、右兩樣共堀大和守殿（○親寳。）御書取ヲ以被仰渡ハ由、御目付佐橋市左衛門（○佳富。）被申聞ハニ付、其段本御番與頭衆ハ被申渡、例之帳面ハ被記置ハ由、尤昨日（○天保三年（紀元二四九二年）十月廿八日。）ゟ人數書被取調、御目付大澤主馬（○信豐。）ハ被相達、御藥并御夜食御臺所ハ頂戴爲致ハ由、昨日（○天保三年（紀元二四九二年）十月廿八日。）廻狀後ニ付、今日書加ハ樣、助本明次左衛門殿被申送ハ。

一、御臺所被下ハ人數書之儀、日々定居ハ義故、昨日（○天保三年（紀元二四九二年）十月廿八日。）被相達ハ人數書を以、定人數ニ相定、日々可被下筈、御目付大澤主馬（○信豐。）ハ被掛合ハ由ニ付、且御藥被下ハ人數書者日々取調差出ハ樣、右者貳度目何十人分、三度目何十人分と申書付、其都度ニ持參、引替請取ハ樣、御目付右同人被申聞ハ間、其段本御番組頭衆ハ被申渡ハ由、助本明御同人被申送ハ。

一、風邪流行ニ付、御用無之詰御番之面々者、御廻り後勝手次第致退散ハ而ゟ不苦ハ由、堀大和守殿（○親寳。）被仰聞ハ旨、御目付戸川播磨守（○安清。）被申聞ハ間、爲御心得申入ハ。

見出し御臺所頂戴人數書　御徒頭

本御番朝御臺所頂戴人數　拾貳人。　内組頭壹人。

夕御臺所頂戴人數　拾三人。　內組頭壹人。

御夜食御臺所頂戴人數　貳拾五人。　組頭共。

右之通、日々頂戴仕り候人數ニ御座候。以上。

十月廿八日〇天保三年(紀元二四九二年)。

——御徒方萬年記

天保壬辰〇三年(紀元二四九二年)。十月中旬ヨリ、霜月上旬〇天保三年(紀元二四九二年)。マテ、都下感冒大ニ行レ、斃ルヽモノ殆少シ。其證ハ輕易ニシテ、葛根柴桂諸湯ニテ癒タリ。之ヲ東西ニ訪ニ、西國ハ九月下旬〇天保三年(紀元二四九二年)。ヨリ始リ、奥羽ハ霜月下旬〇天保三年(紀元二四九二年)。ニ行レタリト。綿亘六十餘里ノ地、僅ニ二月ニ滿スシテ、衆人同病サルハナシ。邪モ亦靈怪ナルカナ。

——時還讀我書

十一月〇天保三年(紀元二四九二年)。ニ至ル頃ヨリ、西方ヨリ痎邪來ルト覺シク、江戸一般コノ邪ニ罹ラサルハ莫シ。又因琉球風ト唱ヘタリ。夫ニ就キ何者カ口占シケン、二首ノ詩アルヲ或人示ス。是レ琉參ノ一ニ與ラサレト今コヽニ屬出ス。

——聞のまに〳〵

風邪篇

琉球風神驅二東方一。田原振出大繁昌。盛場閉口平一面。藪醫高慢僅三甕。獨美按摩針療治。可レ憐湯屋髮結床。今度病人無二怪我一。和尙閑暇眠二本堂一。

其二

一統風邪咳唾音。當レ暮藥代貳朱金。殿中長髮因二宥免一。病後保養蒙二御墜一。駒場番衆延引喜。芝居座元思案沈。雖レ然雲助這無レ構。裸體道中不レ可レ禁。〔一朱金ハ、當冬始テ通用ヲ命セラル〕。

——甲子夜話

北叟遺言ニモ此風邪ヲ傳ヘ「十月中旬〇天保三年(紀元二四九二年)。より都下一般風邪流行、十室九病と申す勢ひ」ト記シ、唐人風ト稱シタリト云フ。茶菓詩亦琉球風ノ詩有リ。

兎園小說餘錄ニハ左ノ如シ。

文政(〇天保歟)三年壬辰(〇紀元二四九二年歟)まで、世上一同に感冒流行して、一家十人なれば十人みな免るゝものなし。輕きは四五日にして本復す。大かたは服藥せず、重きは傷寒のごとく、寒熱甚しくて、譫語するものもあれど、それも病臥十五六日にして痊可に及べり。この風邪にて病死せしものはなし。江戸は九月下旬〇天保三年紀元二四九二年歟)より流行して、十月〇天保三年紀元二四九二年歟)さかりなりしよし。大坂〇攝津國)並に伊勢松坂なる友人の消息に聞えたり。前々流行の風邪には、何風など唱へて必苗字ありしが、こたびの風邪には苗字を唱ることを聞かず。二十餘年前に琉球人來朝の折も、感冒流行したるに、今茲〇天保二年紀元二四九二年歟)も亦琉球人の來ぬれば、京〇山城國)大坂〇攝津國)にては、琉球風といふものもありとぞ。予〇瀧澤解)おもふに、はやり歌はやり詞の流行せる年は、必感冒流行す。安永のお世話風、文

霸都時代ノ疫癘

化のたんぼう風など、當時のはやり詞はやり歌を苗字にして唱へたり。今茲（〇天保三年紀元二四九二年歟）は秋八月の比より、江戸にてかまやせぬといふ小うた流行したり。（くもらばくもれ箱根山、ばれたとて、お江戸が見えるぢやあるまいし、コチヤかまやせぬ、（原本脱字）く名高き團十郎、あらためて、海老藏になりたや親の株、こちやかまやせぬ、などいふたぐひあまたありて、小人はをさ〳〵うたへり。此うたはじめは、よみうりとかいふあきん人のうたひしものなり）しかるにこたみ流行の感冒は、中より以下の男女多く、服藥せずひさゝいへどもかまはずしておこたりにき。童謡は必吉凶の表兆たる事、和漢に例尠からず。かまひはせぬといふ童謡、又是一奇といふべし。しかれども初冬一ケ月は、江戸中の湯屋も浴るもの多からざりしかば、風邪流行に付、夕七時早仕舞といふ札を出し置たり。この折窮民御救ひの御沙汰ありて、籾藏町會所へ裏借屋の町人を召呼れ、一人別に御米五升、女は四升、三才以上の童には、三升づゝ下されしよし聞えたり。文化のたんぼう風の折には、錢にて一人別に、二百五十文づゝ下されしよしなりしが、こたびは米にて下されたり。借家といへども表店に在りて、渡世しつるもの並に召仕は、男女ともに除れしと云。

天保六年風邪
天保六年風疹
天保六年風邪事蹟

六年乙未〇天保六年（紀元二四九五年）。**十月、江戸風邪流行ス。**〇續日本王代一覽後記。**十二月中旬ヨリ七年丙申**〇天保七年（紀元二四九六年）。**三月ニ亘リ、風疹流行ス。**〇時還讀我書。

天保六年風邪

天保六年風邪　續日本王代一覽後記天保六年〇紀元二四九五年。十月ノ條云フ、

江戸風邪大ニ流行。俗是ヲ仙石風ト云フ。

天保六年風疹事蹟

天保六年風疹　時還讀我書云フ、

乙未〇天保六年（紀元二四九五年）。臘月中旬ヨリ都下風痾大ニ行ハル。其初寒熱甚ク、ソレヨリ周身赤癮ヲ發シ、恰麻疹ノ如ク、不食咽痛、殆ト麻疹ニ似タリ。輕ハ一二日、重キモ四五日ニノ快復セリ。俗呼テ三日ハシカ又ハシカカセト稱セリ。翌年〇天保七年（紀元二四九六年）。正月中ハ最盛ニテ、貴賤モニ患サルハナク、三月〇天保七年（紀元二四九六年）。中マテモ發スルモノアリ。五十年以前〇疫邪流行年譜云フ、「此ニ五十年以前トアルハ、大略ヲ云ヒタルニテ、則安永八年ニ〇紀元二四三九年）ノ事ナラン。」ト。モカヽルアリテ、其時モ三日ハシカ又オセハ風ナドヽ呼リト老人ノ話也。

天保七年麻疹

天保七年麻疹事蹟

疫邪流行年譜ニ「此年風邪ノ川柳ニ、流行風三井の店に小半年」ト見ユ。

七年丙申〇天保七年（紀元二四九六年）。**六七月ヨリ、江戸麻疹流行シ、十二月**〇天保七年（紀元二四九六年）。**ニ至ル。**〇武江年表。時還讀我書。續日本王代一覽後記。

天保七年麻疹　八、

天保丙申〇七年（紀元二四九六年）。**六七月ヨリ、都下麻疹マタ行ル。曩年ニ比スレハ、更ニ輕シ。往往藥治ヲ須サルモノアリ。差後ニ至テ、麩片ノ如ナルモノモ少シサレ**ド

先年ニ患ヘシモノハ、必コレヲ免ルヽ片ハ、斷然タル麻ナリ。但其行ルヽ、一時ニ來ラス、漸次ニ繁衍シ、夏〇天保七年(紀元二四九六年)。ヨリ冬ニ至リ、丁酉〇天保八年(紀元二四九七年)。ノ正月マテ患フルモノ間コレアリ。凡テ疫邪ハ行ハルヽコトニ、其異ナルコトカクノ如シ。

天保七年〇紀元二四九六年。七月ヨリ麻疹流行。其證、咳嗽噦噎、鼻淡涕ヲ流シ、呵欠眼胞腫汪々トメ面微腫シ、惡心乾嘔、頭痛目眩等アリテ、痘ト克似タリ。但、雙腮赤クシテ、咽中痛甚シキヲ異トス。

——橘黃年譜

七月〇天保七年(紀元二四九六年)。麻疹流行。

——聞のまに〳〵〇武江年表同。

續日本王代一覽後記天保七年〇紀元二四九六年。六月ノ條ニハ、「江都麻疹流行。五六月(〇天保七年紀元二四九六年)頃ヨリ流行始リ、極月(〇天保七年紀元二四九六年)ニ至ル。」ト見ユ。

〔附記〕橘黃年譜ニ、左ノ如ク見ユ。其江戸ノ事ニ係ルヤ否ヤヲ知ラズ。

天保七丙申〇紀元二四九六年。ノ春夏ノ際、濕疫大ニ行ハレ、老壯ヲ問ハズ、沿門闔戸疾サルモノナシ。外熱内寒ノナス處、皆饑荒陰雨ノ爲ナリ。

八年丁酉〇天保八年(紀元二四九七年)。江戸疫癘行ハレ、春〇天保八年(紀元二四九七年)。ヨリ秋末〇天保八年(紀元二四九七年)。ニ至ル。〇時還讀我書。

附記

天保七年濕疫

天保八年疫癘

天保八年疫癘事蹟

天保八年疫癘　ハ、

丙申ノ歳〇天保七年(紀元二四九六年)。年穀不登、道饉相踵ニイタル。丁酉〇天保八年(紀元二四九七年)。ノ春月ヨリ疫邪盛ニ行レ、秋末〇天保八年(紀元二四九七年)。ニ至リテヤヤ止ヌ。其證、前年〇天保七年(紀元二四九六年)。ヨリ行ルヽモノト大約相同ノ、少陽病殊ニ多シ。サレド貧賤ノ人ハ多ハ下痢ナト虛候ヲ兼ルモノ少ナカラス、參附ノ證マヽコレアリシ也。都テ攻下ノ對スヘキハ至テ少シ。且富貴ノ人ニハ稀也。畢竟窮氓ノ連月麁食セショリ、脾氣ヲ竭乏セシモノニ多カリシナリ。

——時還讀我書

秋〇天保八年(紀元二四九七年)四月。疫病流行。

——聞のまに〳〵

續日本王代一覽後記ニハ、「天保八年〇紀元二四九七年。四月ノ條ニ、同〇天保八年(紀元二四九七年)四月。廿九日、疫病流行ニ依テ、右除病ノ御書付〇享保十八年(紀元二三九三年)天明四年御口法也。增山河内守〇正寧。傳達セラル。」五月〇天保八年(紀元二四九七年)。ノ條ニ、「京師、東都諸國、疫癘大ニ流行ス。〇三月天保八年紀元二四九七年)ヨリ漸々ニ蔓リ、此頃盛ンニナリ、東州江都甚ク、大家寄合部屋ノ奴僕、町家ウラ町屋ノ貧民始、病ニ罹テ死亡スル者夥シ。實ニ嘆ベシ。」ト有リ。武江年表ハ、八月〇天保八年(紀元二四九七年)。ノ條、「疫癘行る。」ト記ス。

〔附記〕日本疾病史記ス所ニ據レバ、

天保十二年〔紀元〕二五〇一年。〔西暦〕一八四一年)夏格別ノ暑氣ニテ堪ガタ

霸都時代ノ疫癘

附記

天保十二年痢疾濕疫

カリシガ、秋ニ至リテ、痢疾、濕疫、瘧疾多カリキ。醫事雜話

ト有リ。或ハ江戸ノ地ナルヤ否ヤヲ知ラズ。

弘化三四年痘瘡

弘化三四年痘瘡事蹟

弘化三年丙午〇紀元二五〇六年。**冬、江戸痘瘡流行シ、四年丁未**〇弘化〇紀元二五〇七年。**正月ニ及ヒ、本所**〇市内。**邊病者最多シ。**〇聞のまに〳〵。

弘化三四年痘瘡　聞のまに〳〵云フ、

弘化四年丁未〇紀元二五〇七年。舊冬〇弘化三年(紀元二五〇六年)。ゟ痘瘡行はる。正月〇弘化四年(紀元二五〇七年)。に至て、本所〇市内。邊專ら病む。

〔參考〕日本醫學史ニ、

六月(〇嘉永二年紀元二五〇九年)、和蘭ノ船、牛痘苗チ齎ス。「モーニツケ」之チ三名ノ小兒ニ植テ感スルチ得タリ。檜林宗建、「モーニツケ」ニ親炙シテ聞キ得タル所ラ錄シテ、牛痘小考ヲ著フ。コレチ牛痘種法ノ始トス。

接スルニ、是ヨリ先天保十年(〇紀元二五〇八年)「モーニツケ」痘漿チ携ヘ來リタルヲ聞キ、亦善感セズ。嘉永元年(〇紀元二五〇八年)「モーニツケ」ニ勸メテ漿ニ代ルニ痂チ以テセシム。翌二年(〇嘉永〇紀元二五〇九年)六月和蘭ヨリ痘痂ト漿ト到ル。「モーニツケ」之チ三名ノ兒ニ種テ、善感スルモノ一名。此年(〇嘉永二年紀元二五〇九年)十月、宗建(〇檜林)牛痘小考チ著シ、人痘苗チ選テ、江戸ノ戸塚靜海、大坂(〇攝津國)ノ緒方洪庵、京都

(〇山城國)ノ日野鼎哉ニ送ル。由テ邦內ニ傳播スルコトチ得タリ。

嘉永三年風邪

嘉永三年風邪事蹟

孝明天皇嘉永三年庚戌〇紀元二五一〇年。**十一月江戸風邪行ハレ、翌春**〇嘉永四年(紀元二五一一年)。**ニ至ル。**〇續武江年表。

嘉永三年風邪　續武江年表——

六月中旬〇嘉永三年(紀元二五一〇年)。より曇天多く、冷氣にて、病者多し。

十二月〇嘉永三年(紀元二五一〇年)。末、風邪流行、春〇嘉永四年(紀元二五一一年)。に至る。

三月〇嘉永四年(紀元一五一一年)〇中略。ニ米價去年〇嘉永三年(紀元一五一〇年)。より續て貴く、并風邪流行す。依て町會所に於て、市中貧困の者へ御救米賑給あり。

嘉永四年疫病

嘉永四年疫病事蹟

四年辛亥〇嘉永四年(紀元二五一一年)。**夏秋ノ候、江戸疫病有リ。**〇續武江年表。

嘉永四年疫病　ハ、

此春〇嘉永四年(紀元二五一一年)。より雨しば〳〵降り、夏〇嘉永四年(紀元二五一一年)。の末より秋〇嘉永四年(紀元一五一二年)。へかけて、炎威殊に盛にして、疫病行はる。　——續武江年表

嘉永五年暑疫

嘉永五年暑疫事蹟

五年壬子〇嘉永五年(紀元二五一二年)。**七月江戸暑疫行ハル。**〇橘黃年譜。

嘉永五年暑疫　橘黃年譜云フ、

嘉永壬子〇五年(紀元二五一二年)。**暑疫流行、醫多寒凉ヲ投テ誤ル。附子ニテ救治スル者多**

シ。一種最初ヨリ下痢アリ。協熱利ニ似テ、熱解シ難キモノアリ。小柴胡湯加竹茹麥門黄連滑石茯苓ヲ用ヒ、意外効ヲ得タリ。前年ノ疫ニ多ク石膏ヲ用テ効ヲ奏ス。當年ノ疫大抵附子ニ非ラサレハ、救事能ハズ。疫氣ノ年運ニ關スル論癈スベカラズ。

嘉永七年風邪瘟疫

七年甲寅（嘉永七年十一月改元、安政元年（紀元二五一四年）。）春、江戸風邪流行シ、（疫邪流行年譜。）夏秋、瘟疫行ハル。（橘黄年譜。）

嘉永七年風邪事蹟

嘉永七年風邪　疫邪流行年譜傳フル所、左ノ如シ。

嘉永七年瘟疫事蹟

安政元年（紀元二五一四年。）正月ヨリ二月ニ至リ疫流行風邪ニメノ、都下大ニ流行ス。安政元年（紀元二五一四年。）ハ則嘉永七年甲寅（紀元二五一四年。）十一月改元。其正月米使横濱沖ヘ至リシ節故ニ、アメリカ風ト稱ス。柴葛解肌湯ナトニテ治シタリ。

嘉永七年瘟疫　橘黄年譜ニ據レバ「夏秋（嘉永七年（紀元二五一四年）。）ノ際、江戸瘟疫流行」ト有リ。續武江年表亦「秋（嘉永七年（紀元二五一四年）。）傷寒風邪等の病人多し。」ト記ス。疫邪流行年譜ハ云フ、「此時（嘉永七年（紀元二五一四年）。）ハ、余カ廿一歳ノ時ニメノ、其患者モ家君ノ代診ニテ略記臆シヌ。葛根湯加石膏ヨリ柴桂湯位ニテ皆治シタリ。」ト。

安政四年風邪

安政四年風邪事蹟

四年丁巳（安政四年紀元二五一七年。）二月、江戸風邪流行ス。（時風錄。疫邪流行年譜。續武江年表。）

安政四年風邪　ハ、

二月十三日（安政四年（紀元二五一七年）。）酒井右京亮殿（忠毗。）御渡。

此節一統流行風ニ付、長髪ニ而罷出ル儀、并供廻り等も格別ニ減召連ル而も不苦旨、無急度、御目付ヨリ被申渡、大目付ヨリも右之趣是又申渡ル事。

一、風邪ニ而押ル而罷出居候者ハ、御濟次第早々退散致候樣、御目付ヨリ申渡、大目付ヨリも右之趣是又申渡ル事。　——時風錄

此年（安政四年（紀元二五一七年）。）二月三日大雪降リ、夫ヨリ日ニ寒氣サヘ返リ、爲ニ風邪大ニ流行ス。此時モ一時ニテ直ニ止ミタリ。此邪氣モ京坂ヨリ東海道ヲ流行シテ來ルト云フ。　——疫邪流行年譜

二月（安政四年（紀元二五一七年）。）風邪をやむもの多し。　——續武江年表

安政五年虎狼痢

五年戊午（安政五年（紀元二五一八年）。）七月、江戸虎狼痢流行シ、病勢猖獗ヲ極メ、武家及市民ノ死スル者甚ダ多シ。十月（安政五年（紀元二五一八年）。）ニ至リテ漸ク止

安政五年風邪

安政五年虎狼痢事蹟

ム。○暴病管見。橘黄年譜。頃痢流行記。續武江年表。嘉永明治年間錄。九月下旬（○安政五年（紀元二五一八年）。）ニ ハ、又風邪ノ流行有リ。○續武江年表。

安政五年虎狼痢 虎列剌病ノ我邦ニ入リタルハ何レノ時代ナリシ乎。古呂利考ハ、元祿十二年（○紀元二三五九年。）ノ江戸ニ於ケル古呂利、正德六年（○享保元年（紀元二三七六年）。）ノ疫病等ヲモ、同ク虎列剌ト爲ス。而モ近時ノ諸說ハ、概シテ文政五年（○紀元二四八二年。）ヲ其第一回流行トシ、第二回ノ流行タル安政五年（○紀元二五一八年。）ニ於テ初テ江戸ニ入リタル者ト爲スコトニ一致スル如シ。

本邦ニ於ケル每回虎列剌流行ノ事蹟ニ就テ病毒傳來ノ經路ヲ察スルニ、概ネ海外ノ流行ト緊密ノ關係ヲ有シ、其流行ハ、病毒ヲ海外ヨリ輸入スルニ原由スルヲ知ル。

本邦ニ於テ初メテ虎列剌ノ流行ヲ來タセシ年月ハ、未タ詳カナラズシテ、已ニ元祿十二年（○紀元二三五九年。）（千七百九十九年）ニ於テ、江戸ニ此病ノ流行アリト云フモノナキニアラズト雖モ、確實ナル記錄ノ以テ之ヲ徵スルニ足ルモノナシ。而シテ其明カニ虎列剌ナルヲ證定シ得ル流行ハ、文政五年（○紀元二四八二年。）（千八百二十二年）ヲ以テ初メトス。

ヒルシ地理病學ニ千八百三十一年（天保二年（○紀元二四九一年。））日本ニ虎列剌流行スト記シ、又タ往々天保元年（○紀元二四九〇年。）（千八百三十年）ニ流行セリト云フモノアリ。ヒルシハ又タ別ニ千八百五十四年（安政元年（○紀元二五一四年。））ニモ日本ニ虎列剌流行セリト云フト雖モ、何レモ確證トスヘキモノナシ。千八百二十二年（○文政五年（紀元二四八二年。））ニ虎列剌ノ流行シタルハ、今日ニ至ルモ事實明瞭ナレバ、其後ニ至リ、果シテ此病ノ流行アレハ、何ソ之ヲ知ラサルノ理アランヤ。余輩ハ其誤ナルヲ確信スルモノナリ。

又ヒルシハ、其後ノ流行ヲ論スルニ當リ、日本ニハ千八百五十七年（○安政四年（紀元二五一七年。））乃至五十九年（○安政六年（紀元二五一九年。））ニ流行セリト記スレモ、是レ一ケ年ノ違算ニシテ、其實千八百五十八年乃至千八百六十年（安政五年（○紀元二五一八年。））乃至萬延元年（○紀元二四二〇年。））ナリ。

——虎列剌病流行事蹟報告書（○中央衞生會年報收。）

之ヲ傳染病史ニ徵スルニ、虎列剌病ガ其本國タル印度ヲ出デ、世界ニ蔓延セシハ、西曆一千八百十七年（我文化十四年（○紀元二四七七年。））ニシテ、之レヨリ先キ印度國內ニテハ、一千七百六十八年（寶曆五年（○紀元二四一五年。））ヲ第一回トシ、次デ一千七百八十年（安永九年（○紀元二四四〇年。））一千七百八十三年（天明三年（○紀元二四四三年。））ノ數回、

虎列剌流行アリシト雖モ、未ダ其國外ニ出テタル報告ヲ得ズ。寶暦一〇(紀元二四一一年)一二三年。以前ニ我邦ニ傳ハラザリシコト、固ヨリ疑ナカルベシ。然ルニ文政五年〇(紀元二四八二年。)二月蘭人來タリテ、一昨年(一千八百二十年〇文政三年(紀元二四八〇年)。)瓜哇バタビアノ地ニ虎列剌病ノ流行アリ、各歳殊ニ甚シカリシコトヲ告ゲ、其病狀ヲ記述セル書ヲ示セシヨリ、我邦醫家始メテ虎列剌ノ病アルコトヲ知リ、次テ其歳〇(文政五年(紀元二四八二年)。)ノ夏ニ至リテ、虎列剌病始メテ我カ關西地方ニ起リ、可列剌莫爾蒲斯(Cholera-morbus)ヲ膽液病ト譯シ、桂川甫賢ハ酷列辨ヲ著ハシ、宇田川榕庵ハ膽液病說ヲ著ハシ、其ニ西洋ノ說ニ依リテ、其病理治法ヲ論述シ、大坂(〇攝津國。)ノ齋藤方策ハ壬午天行病醫按ヲ著ハシ、西田耕悅ハ雜氣病按ヲ著ハシ、其ニ自家ノ實驗ヲ叙述シタリ。

——日本醫學史

而シテ謂フ所ノ第一回流行タル文政五年〇(紀元二四八二年。)ノ虎列剌ハ、

(〇紀元二四八二年文政五年(千八百二十二年)ノ流行ハ、本邦ニ於テ確證スルヲ得ル虎列剌流行ノ嚆矢ニシテ、八月(〇文政五年紀元二四八二年)西南ノ地方ニ發生セシニ初マリ、其病毒傳來ノ系統ヲ考フルニ、此年期ハ、ヒルシノ所謂第一流行ノ期年即チ千八百十七年(〇文化十四年紀元二四七七年)乃至二十三年(〇文政六年紀元二四八三年)中ニアリ。是ヨリ先キ印度榜葛剌州ニ於テハ、虎列剌連年流行シテ止マズ。千八百十八年(〇文政元年紀元二四七八年)ヨリ、漸ク其地方病タル各地ノ堺界ヲ越エテ四方ニ瀰漫シ、西ハ孟買ヨリ亞剌比亞ニ入リ、波斯・小亞細亞ヲ襲ヒ、東ハ暹羅・馬剌加・新嘉坡・瓜哇・呂宋等ニ行ハレ、千八百二十年(〇文政三年紀元二四八〇年)ニハ、支那ニ來タリ、爾後二年間ハ、支那ニ猖獗ノ勢ヲ逞クシ、遂ニ二十二年(〇文政五年紀元二四八二年)ヲ以テ日本ニ流行スルニ至レリ。我文政五年(〇紀元二四八二年)ノ流行ハ、即チ虎列剌大蔓延ノ餘波ヲ承ケシモノニシテ、瓜哇ヨリ來レル蘭船ノ長崎(〇肥前國)ニ著セシヨリ、日ナラズシテ發生セシヲ考フレハ、蘭船ノ媒介ニ依リテ病毒ヲ輸入シ、此流行ヲ致セシモノナルベシ。蓋シ當時海外ト交通ノ便アリシハ、獨リ蘭船及支那船ノ互市ノ爲メ長崎(〇肥前國)ニ來港スルモノノミナリトス。

——虎列剌病流行事蹟報告書(〇中央衛生會年報收。)

ノ系統ニ屬シ、左ノ如キ流行狀態ヲ有シタル者ナリ。

(〇上略)其(〇古呂利)甚く行はれしを、文政壬午(〇五年紀元二四八二年)の秋とす。瘟疫論發揮云、壬午(〇文政五年紀元二四八二年)之疫、其初自朝鮮傳于我西州、歷北陰、迨浪華、(〇攝津國)無論老少強弱、闔戸傳染、勢如破竹、死者日三四百人。好生緒言云、壬午(〇文政六年紀元二四八三年)間西州天行病、水瀉二三行、而目陷鼻尖云々、是なり。時還讀我書云、文政壬午(〇五年紀元二四八二年)の秋末冬初、浪華(〇攝津國)に三日古呂利と稱する病流行せり。初は鎭西より起て、中國に至り、浪華(〇攝津國)に及ぼし、京師にも偶々病者あり、其症初起、卒に惡寒し、續て吐瀉甚しく、

霸都時代ノ疫癘

或は胸膈へ迫りて、急なるは日を出さず、緩なるは三日許にして斃る故、かくは名けしこと也。渾華(〇攝津國)にては甚多く、沿門閭戸死亡する者ありと聞けり、導水鎭言にいへる、三日坊の類なるへしと云へり、何れ霍亂の一種にてもあるへきか、百々漢陰は、増損理中丸の症なりと言遂れり、げにも然るへし云々。此時伊勢路まで流行して、江戸には及はざるなり。

文政五年(〇紀元二四八二年)我邦第一次ノ虎列剌流行ハ、我カ西陲ニ起リ、八月中旬〇文政五年紀元二四八二年)ニハ、長崎ニ來タリ、ソレヨリ山陽道ヲ經テ、同月(〇文政五年紀元二四八二年)ニ至リテ一層劇シク、十月下旬(〇文政五年紀元二四八二年)ニ至リテ漸ク止ミ、京師ニモ波及シタレドモ、流行ノ勢ハ大坂(〇攝津國)ノ如クナラズ、伊勢路ニモ入リ、或ハ東海道ヲ沼津(〇駿河國)邊ニ來タリシカドモ、遂ニ箱根(〇相摸國)以東ニハ及ボサリシナリ。

——古呂利考

——日本疾病史

我邦ノ第二回流行ニシテ、江戸ニ於ケル、第一回流行ト稱セラルヽ、安政五年(〇紀元二一八五年)ノ虎列剌ハ、虎列剌病流行事蹟報告書(〇中央衛生會報收)ニ據レバ、其系統

安政五年(〇紀元二一八五年)。乃至萬延元年(〇紀元二一八六年)ノ流行(〇千八百五十八年乃至千八百六十年)

此流行ハ、安政五年(〇紀元二一八五年)。(千八百五十八年)六月長崎(〇肥前國)ニ發生セシニ初マリ、而シテ當時統計ノ方法十分ナラサレハ、患者數死者數ヲ確言スルヲ得サレド、死者數十萬人ニ登レリト云フ。而シテ流行スルコト、延キテ三年ニ及ヒ、萬延元年(〇紀元二一八六〇年)ニ至リテ消滅セリ。是ヲ第二回ノ流行トス。

此流行ハ、ヒルシノ所謂第三流行(千八百四十六年(〇弘化三年紀元二一五〇六年)乃至六十三年(〇文久三年紀元二一五二三年)。)ノ範圍內ニアリテ、廣ク東西半球ヲ侵シタルノ秋ナリトス。而シテ虎列剌ハ、印度ノ鄉國ヲ出テヽ、西ハ遠ク歐洲ヲ侵シ、五十三年(〇嘉永六年紀元二一五三年)。同五十五年(〇安政二年(紀元二一五五年)。)ニハ、獨逸及露國ニ最モ猖獗ヲ逞クシ、又東方南洋諸島ヲ犯セリ。即チ千八百五十二年(〇嘉永五年(紀元二一五二年)。)ニハ爪哇・スマトラ・及ヒ其近隣ノ諸島ニ及ヒ、此年(〇嘉永五年(紀元二一五二年)。)呂宋及ヒ支那諸港ニ流行セリ。我安政五年(〇紀元二一八五八年。)ノ流行モ、亦其餘燄ノ延及セルモノニシテ、而シテ其病毒ヲ輸入セシハ、合衆國軍艦「ミスシッピー」號ナリ。コレ蓋シ此艦ノ支那地方ヨリ患者ヲ載セテ長崎(〇肥前國。)ニ來著セシ後、速カニ虎列剌ノ流行ヲ來タシタレハナリ。

「ミスシッピー」號ノ事ハ、當時在留ノ蘭醫ボンペモ亦其著書「フエース、ヤーレン、イン、ジヤパン」第二百八十頁ニ於テ之ヲ言ヘリ。

ニシテ、米艦ミスシッピー」號ノ支那ヨリ傳移シ來リタル者ニ屬ス。其江戸ニ於ケ

ル流行ヤ、眞ニ慘毒ヲ極ム。左ノ諸傳ヲ參看シテ其一斑ヲ知ル可シ。

此節流行之病症ニ而、死亡人多ク、市中恐怖之餘り、中ニ者祈禱ヲ與唱手遊之神輿或ハ獅子頭等、夜中町内持歩行候哉之趣、畢竟親ヲ除候處ヲ輕キもの共心得違ニ而右樣所業致間敷共難申、種々祈禱等致候義者格別、多人數集り候樣ニ而者、乎日共違、此節柄火之元者勿論、都而物噪敷儀無之樣、兼而申渡置候ニ付、相愼可罷在處、右樣心得違者有之間敷、全風聞迄之儀ヲ相聞候得共、御中陰中、萬一心得違之もの有之ニおゐてハ、當人者不及申、町役人共迄急度可及沙汰條、其旨町々不洩樣可觸知もの也。午（安政五年（紀元二五一八年））九月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、町中借屋店借裏々迄、召仕等迄不洩樣、可相觸候。

九月四日（安政五年（紀元二五一八年））。

一、當八月（安政五年（紀元二五一八年））中流行急病ニ而相果候もの、町會所ニ而取調候惣高左之通、爲心得記置、尤町方計り之合高ニ候事。

朔日（安政五年紀元二五一八年八月）　百拾貳人。
二日（安政五年紀元二五一八年八月）　百七人。
三日（安政五年紀元二五一八年八月）　百五拾五人。

町年寄役所

四日（安政五年紀元二五一八年八月）　百七拾貳人。
五日（安政五年紀元二五一八年八月）　貳百拾七人。
六日（安政五年紀元二五一八年八月）　三百五拾人。
七日（安政五年紀元二五一八年八月）　四百六人。
拾日（安政五年紀元二五一八年八月）　四百拾人。
十一日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百七人。
十二日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百七十九人。
十三日（安政五年紀元二五一八年八月）　六百廿六人。
十四日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百八十八人。
十五日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百八人。
十六日（安政五年紀元二五一八年八月）　六百廿二人。
十七日（安政五年紀元二五一八年八月）　六百八十一人。
十八日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百六十一人。
十九日（安政五年紀元二五一八年八月）　五百九十七人。
二十日（安政五年紀元二五一八年八月）　四百六十九人。
二十一日（安政五年紀元二五一八年八月）　三百九十一人。
二十二日（安政五年紀元二五一八年八月）　三百六拾三人。
二十三日（安政五年紀元二五一八年八月）　三百七十人。
二十四日（安政五年紀元二五一八年八月）　三百七拾九人。
二十五日（安政五年紀元二五一八年八月）　四百十四人。

二十六日(〇安政五年紀元二五一八年八月)　三百九十七人。
二十七日(〇安政五年紀元二五一八年八月)　四百拾六人。
二十八日(〇安政五年紀元二五一八年八月)　四百三十五人。
二十九日(〇安政五年紀元二五一八年八月)　三百四十七人。
三十日(〇安政五年紀元二五一八年八月)　三百三十三人。

〆壹万貳千四百九拾貳人。(〇頃痢流行記同)

右者、當七月下旬(〇安政五年(紀元二五一八年)。)頃ゟ諸人何病ゟも難名付、俄ニ腹痛吐瀉甚々敷、手足嚴冷致絶脈、一日一夜、又ハ三四時或ハ壹貳時、至而甚敷ニ至り候而者、一時半時ニ相果候。右者八丁堀、靈岸島、築地、佃島(〇市内。)等最初ニ而、追々轉旋いたし候哉、市中一般ニ而、同(〇安政五年(紀元二五一八年)。)八月半ニ至り候而ハ、實ニ恐敷事ニ有之、殊ニ此病受候もの壹人ゟして快方無之、醫師も鍼治も可施手段無之、然ル處同月(〇安政五年(紀元二五一八年)八月。)下旬頃ゟ時候も定り、且ハ町々一般加治祈禱等致、醫師も治療方工夫相付候哉、三人ニ壹人ハ全快も出來候樣相成候。此病俗ニころりと相唱、外國ニ而ハコレラゟ申候由、上人ニ少く、下人ニ多く、右之内ニも漁業船乘等ニ多く有之候。依之海岸川付ニ多く、山之手ニ少し。我其頃町會所ゟ相詰、御救筋等取扱候處、困窮人病死取置料願出

虎狼痢流行圖

原寸　竪六寸八分　横八寸九分

帝國圖書館所藏

頃痢流行記載スル所、安政五年(紀元二五一八年)虎列刺病流行當時ニ於ケル千住焼場附近ノ光景ヲ圖シタル者也。同書ハ當時僅ニ百部ヲ印刷シタル者ナリト云フ。本書及内閣文庫其他ニ藏スル者、皆其一ナル可シ。

新古今

候もの日々數十口有」之、内ニ者家内五人暮之處、三日之間ニ五人共不」殘相果候樣申立、實ニ身之毛もよ立候事ニ有」之、依」之御公儀ゟも、御救米又ハ藥法等厚く御世話も被」爲」在候故歟、同〇安政五年(紀元二五一八年)九月。半端ニ者更ニ無」之樣相成候。且此病ひ御府内計ニ無」之、近在遠境共一般之趣ニ御座候事。

一、一向宗其外共火葬いたし候ニ付、燒場殊之外混雜致し、別而小塚原〇武藏國北豐島郡。燒場者、中々手廻り不」申、依」之棺桶ゟ名前番附いたし積置候分、如」山、同所ゟも不二相立一候而者骨上ニ不二相成一、然ル處未暑氣之時節ニ付、右死骸腐爛致し、其臭氣下谷淺草神田〇市内。邊迄ニ至り候。依」之公儀ゟ假埋之御沙汰有」之候。實ニ前代未聞之珍事とも可」申歟。

當八月朔日〇安政五年(紀元二五一八年)。頃ゟ見候得ハ、寅卯之方ニ當り、曉七ツ時頃、

此丈壹丈程

如」斯ほうき星ニ候哉、物干ニ上り漸々見へ申候。同日頃ゟ見へ候由。暮六ツ頃宅ゟ戌亥之方ニ當り、六尺程 同斷相見へ申候。同月〇安政五年(紀元二五一八年)九月。廿八九日頃ゟ暮六ツ時頃ゟ宅ゟ申酉之方ニ當り、此丈十丈与も可」申歟。是ハ至而高く、宅ゟ見候ニ、先ツハ眞上とも可」申程ニ有」之、北光ニ而闇夜もあ

かるき程ニ候。尤悉く動キ早く、夜五ツ時頃ニ者戌亥之方へ下り、光も至而薄く追々丈も短く、同〇安政五年(紀元二五一八年)。九月十二三日頃迄少々相見へ申候。右ニ付品々浮説等も有之候得共、更ニ取留れ義無御座候、心得迄ニ記置。

申渡

千住小塚原〇武藏國。此節死人をんほう數多之事故手廻り兼、數日其儘ニ致し置臭氣立、下谷邊、淺草邊〇市内。等者、殊之外迷惑之趣ニ付、夜中ハ殊更甚しく、此躰ニ而ハ、右臭氣ニかふれ候もの共、疫癘故熟等之病症相發し可申旨、醫道方ハ此節ゟ心配致候趣ニ付、當分假埋等ニもいたし候歟、又ハ手廻しいたし方も可有之歟厚勘辨いたし、右樣之次第ニ不至樣、精々其筋ゟ可申渡候。

右之通、寺社奉行ゟ其筋ゟ申渡候間、町中其心得を以、埋葬之儀取計候樣可申渡候。

右從町御奉行所被仰渡候間、組々早々申通、月行事持場所者最寄名主共世話可致。

午〇安政五年(紀元二五一八年)。八月

右之通被仰渡奉畏候。以上。

午〇安政五年(紀元二五一八年)。八月卅日

右、館市右衛門殿ニ而被申渡候事。

壹組年番壹人ツヽ

受　印

——布令留

安政五年戊午〇紀元二五一八年。の秋は、長崎〇肥前國。より始りて、山陰南海を經て、天下に遍く、其中江都甚しく、初冬〇安政五年(紀元二五一八年)。の頃は、奥羽まで傳播し、雪天に至て初て止むと云。喜多村拷窓翁曰、安政五年戊午〇紀元二五一八年。の秋、都下古呂利と云病流行す、即醫通說く所の番沙の如し、八月八日〇安政五年(紀元二五一八年)。伊藤宗益、朝四時下痢して、昏瞀、七時に斃れたり、翌日〇安政五年(紀元二五一八年)。八月九日。同家婢も死す、隣家田中彦七十六も七日〇安政五年(紀元二五一八年)。に死せり、近街死者相踵す、下町邊〇市内。は最多し。其初は長崎〇肥前國。より、漸々西國へ傳はり、大坂〇攝津國。最甚し、東海道原吉原〇駿河國。邊、圖境皆斃と云、傳言、咬吧の邊甚多死す、英魯人其病を避て、崎窠に來る、其船中二三十人は、此病に罹て、崎窠に上陸せり、其より傳染する所と云へり。予〇喜多村拷窓。の考には、古の尸注の一種にて、飛尸遁尸の類ならん、中惡鬼撃と云も、此類症なり。醫通の治方は迂緩なり。予〇喜多村拷窓。別に考あり云々。是歳〇安政五年(紀元二五一八年)。の古呂利は、江都最甚しく、斃する者男女併せて、武家二万二千五百五十四人、町家一万八千六百八十人にて、實に棺も給すること能はず、茶

毘所も宛も酒舗の空樽を積累するか如くにて、適は數日の間に、蘇生せしものも有と云ふ。享保〇元年(紀元二三七六年)歟。以後の大疫と云へし。〇中略。余〇淺田惟常。戊午〇五年(紀元二五一八年)。ノ秋七月二十九日より、九月十日〇安政五年(紀元二五一八年)。ニ至るまで、此病を療すること凡八百有餘人、日夜寢食を忘るゝに至る。

——古呂利考

安政五年戊午〇紀元二五一八年。ノ初秋ヨリ、東武ノ都下、忽然トシテ惡症流行セリ。其狀初メ先ヅ下痢、滑脫スルコト數十行、既ニシテ惡心嘔逆ヲ發シ、吐利交加、手足厥冷シ、漸ク轉筋煩躁シテ死スルコト頃刻ノ間ニ在リ。十餘日ニシテ益々劇シク、闔門合閭死者相踵ギ、〇中略。予〇田宮尙施。ガ寓居仲橋〇市內京橋區。ノ邊ハ此患殊ニ甚シク、近隣有名ノ國手大醫奔走ニ暇アラズ。〇中略。數百ノ病者ヲ施治シタルニ、幸ナルカナ仲秋〇安政五年(紀元二五一八年)。ノ頃ヨリ、偶中ノ奇效ヲ奏セシ者尠カラズ。既ニシテ重九〇安政五年(紀元二五一八年)。已後ニ至テハ、此病モ漸次ニ薄ク、今霜露稠キニ及デ殆ト地ヲ掃フニ至ル。

——暴病管見

安政五年〇紀元二五一八年。六月、肥前崎陽〇長崎。暴瀉流行シ、西國ヲ經テ浪華〇攝津國。京師〇山城國。ニ及ヒ、七月下浣〇安政五年(紀元二五一八年)。ニ迨テ江戶ニ流轉ス。其病ニ傳染スルモノハ箭ヲ射ルガ如ク、即時目陷リ、鼻尖リ、忽チ鬼籍ニ上ル者、男女併セテ武家二萬二千五百五十四人、町家一萬八千六百八十人ト云フ、〇中略。九月上旬ニ至リ始メテ病根絕ス。

——橘黃年譜

今茲安政五戊午〇紀元二五一八年。六月下旬、東海道筋より流行初、近國一圓にひろごりて、此の病に犯さるゝ者、九死に一生を保つゝ稀なり。遠く隔る地ゝ、去來不知僕が輩。既に目前に見聞しる土地をいゝんに、大江戶ゝ七月〇安政五年(紀元二五一八年)。の上旬、赤坂〇市內。邊に始り、靈岸島〇市內京橋區。邊にも多くありて、日ならず諸處に押移り、八月上旬〇安政五年(紀元二五一八年)。より中旬〇安政五年(紀元二五一八年)八月。に至りてゝ、病倍々盛んにして、死する者多きゝ一町に百余人、少きゝ五六十人、葬禮の棺大道小路に陸續て、晝夜を棄ず絕る間なく、御府內數万の寺院ゝ、何所も門前に市をなし、燒場の棺所せきまで積ならべて山をなせり。夕に人を燒葬坊も、旦に茶毘の烟りと登り、誂へられし石塔屋も、今の間に自己が名を五輪に止るなど、一々に言も盡さず。博識の漢の倭の史とも披閱ても未かゝる例を見出ず。名たゝる醫工の鑑定にも、病根名證を知る由なく、徒に頭を傾け、手を拱きて死を待而已、如何とも方便なし。適々芳香散の如き御傳方、和蘭シーボルトの經驗なんど、救急の要方を得るとも、卒病即死用るに間なく、腹するに時を失ふ。

故に土俗病名を狐狼狸と渾號して、あらぬ說を流言し、妖怪變化の所爲なりとし、且水毒といひ、魚毒とす。是が爲に市中の上下、水上清き玉川の流を汲ず、盤に踊る生魚を喰ず、貴も賤も日夜此病に犯されんことを愁ひ、門戸にハ諸神の守札を張、八ッ指の木の葉を釣し提、十字街ハ鎭守の神輿を舁出し、獅子頭を舞し、幣帛を振繽繙(ふりひらめ)かし、軒並家毎を秡淨めるあれば、かゝる年の疾過ぬべしと思ふより歟、門邊に松竹を銜り立、七五三繩を引巡らし、煎豆を蒔もあれば、厄拂ふとて外面に來るあり。その樣祇園會と年越とを打交へたる心地せり。

御府內四里四方、町かず三千八百十八丁、各三十六丁壹里にして百六十八里十三丁なり。此度暴瀉病流行につき死亡人多く、依之御救被下置。

表店八十五万十三軒。

男三百四拾万十四人　壹人五合ぶちさして、此米高壹萬七十石七升。
女百七十万二十八人　壹人三合ぶちさして、此米高五千百石八升四合。

裏店九十二万五千二百貳軒。

男百十一万千百二十人　壹人五合ぶちさして、此米高五千百五十五石六斗。
女八十五万千二百八人　壹人三合ぶちさして、此米高二千五百五十三石三斗二升。

盲人九千百十三人。出家七万百十人。

尼僧三千九百九十人。神主八千九百八十人。

山伏六千八百四十八人　四百九十五石二斗四升五合。

御府內町方惣人數合て七百十万千三百十八人也。

今般御救之儀ハ、表裏ニ不限貧民へのみ被下置るゝ。

但、長袖地借三才以下にハ不被下、死亡人ハ勿論也。

貧民男三十一万六千廿人、此米高壹万五千八百壹石。同女子廿万七千五十六人、此米高八千百十六石八斗。

右者御救米六万俵高御割付を以被下置るゝなり。貧民男女御救米合て惣〆貳万三千九百十七石八斗。爲四斗相場、此代〆金六万兩なり。

流行の病をもつて身まかる人の中に、其名四方に聞えしを聊こゝに記す。猶貴賤の差別なきハ見ゆるし玉へ。又餘病もあるべき歟。

書家大竹蒋塘同市川米庵。俳諧惺庵西馬。同福芝齋得蕪。同過日庵祖鄕。狂哥燕栗園講談一龍齋貞山。咄家馬勇。同上方戈六。畫工立齋廣重。同櫻窓三拙。作

者綠亭川柳。同柳下亭種員。畫工歌川國郷。角力寶川石五郎。同万力岩藏。三弦杵屋六左衛門。同鶴澤戈治。同清元市造。碑名石工龜年。畫家英一笑。狂哥六朶園。畫師菁々所其一。作者樂亭西馬。太夫清元延壽。同清元染太夫。同清元鳴海太夫。同清元秀太夫。同都與佐太夫。常磐津須磨。同常磐津和登。同人形吉田東九郎。役者松本虎五郎。同尾上橘之助。同嵐小六。同嵐岡六。三弦岸澤文字八。作者五返舍半九。女匠都千枝。同〆常磐津文字榮。同小登名。太夫竹本梶尾。同豐川小玉。

——頃痢流行記

安政五午年〇紀元二五一八年。七月の末つかたより八月〇安政五年(紀元二五一八年)。に至り、俗に二日ころり又單にころりと稱する病いたく流行す。其症暴吐瀉轉筋、胸腹疼痛煩悶、手足厥冷、大やう二三日にて死するもの多し。此病そのかみ亞細州の南方より流行傳染し、或人曰、西洋人の說に、亞細洲東印度より歐羅巴に傳染し、速に大洋をこえて亞墨利加へも吹送ると云々。和蘭にてコレラと名付け、こゝに、西洋學の醫のアジヤ窪亂といふよし。そも〳〵この病、昔し寛政〇紀元二四四九年―二四六〇年。の頃、都下に流行し、此度また東海道小田原〇相摸國。殊に甚しく〇註略。鐵砲洲・靈岸島・八丁堀〇市內。京橋區。茅場町〇市內日本橋區。中橋〇市內。より日本橋〇市內。のほとり、佃島(〇市內京橋區)は、殊に甚しく、一島凡五百人程死したりと云。甚しとか聞ゆ。豫じめ

これを防く藥方、また療法等くさ〳〵有りて、或は印施し、或は寫し傳へ、八月廿三日〇安政五年(紀元二五一八年)。の頃、公より療治の御書付をもて、武家を始め、町方へもふれ示させたまふ。されはこれが爲に世の中最噪しく、始はこの病玉川の上水に毒あるよりおこる、今年(〇安政五年紀元二五一八年)は、夏の初より雨かちにて、水源の山々より硫黃氣其他種々の惡水の流れ出てしにぞ、毒あるなりなどいふ。かたく飲用すべからず、掘拔の井の水のみを飲べしなどいひて、此秋(〇安政五年紀元二五一八年)深川(〇市內)淨心寺にて、甲斐の國小室の妙法寺といふ日蓮宗の祖師の帳をかゝげて拜ませ、消毒の符と稱するものありて、其宗門の徒いたく尊み、此ころ大喪の事ありて、暫く開帳を休みしかども、猶その符を乞ふもの多く、日に二十金三十金か程出しつといふ。されは中に口さがなきものゝ、水道に毒ありといふは、小室(〇甲斐國)のものゝ工みて言ひいでしならんなどいふ。水道の井には、赤羽根の水天宮の神符を竹に夾みてたて、又は井に投じ、注連はるもあり、砂漉して用らるゝ者も多かり。又異國人の船を近海に繫ぐうち、海中に毒を流したれば。又は外國人船中にて、豚なと屠りその骨をたゞちに舟の邊にうち捨る故に、もろ〳〵の魚ども異船の際へこぞりよるを網する故に、自ら毒あるなりなどいふ。魚を食ふべからず、殊更に鰯に毒あり、近ころ鰯のあたひ殊に貴く十尾を七八十錢より百二三十錢にひさぎしが、此ごろは食ふものゝ少なければにや、十尾を凡十五六錢より、いやしきは十二錢にうるよしきこゆ。などいふ。八月〇安政五年(紀元二五一八年)。の中ばに至つては、この病は狐のまかわさするにて、けふも本石町〇市內日本橋區。の邊に、狐の犬に逐はれしを見たり、或は神田永富町〇市內。の邊にて、狐を逐いたしたりなとのゝし

るさればその病人手足のうち何處となく腫るゝ處あり、こは狐のより居る處なれば、其前後を紐もてくゝり置き針をさせば、たゞちに愈るなどとて、中には已もこのごろさる事あり、三所針をさして愈しと、腕を露し針痕をしめして、公然人にほこるもあり。又は濕氣の皮膚の間にこもりてあるなり、橘氏曰、濕氣の皮膚症を發し、腕臂或は股腓都て脂多き跡位へ、勃々として桃のごとく卵の如く隱顯する者頗多し。かくのごときの類をいへるにや。夫を見て、ずはや狐なれとて執りおさへうちひしぐにぞ、病む人狐ならずといはゞ、猶いかなる辛き目にあはんかと、ひたすら打わびゝ、病いへても打撲に臥すもありなど聞ゆ。病む人の虚にのりて、狐のまが、わざするも間々ありしとぞ。又狐に纏憑ざるにゝ、男ゝ左、女ゝ右の手足の大拇指を糸もてくゝれば、さる事をまぬかるゝとて、男女老幼をいはず、此頃ゝ十人が五六人ゝ斯ものす、又ゝ先に來りしアングリヤ人の本國より、狐を牽き來り、この大日本に禍せは、位階を授け神に崇ひ齋らんとて、殘し置て歸りし、こゝ其形の殊に小き狐にて、夫か所爲なりなど、あらぬ事をもいふ。また公より藥方の御示し有りしより、益智仁ゝ遠藥にて、常にはむねと入らぬ品なるを、一時に用とある故に、此頃ゝ品の切れて無しとかいひ、又流行病を避るため、杜松子硫黄の類を焚き、今年

ゝ濕氣の強くて、書物衣類ゝ更なり、家居の鴨居懸額紙門など黴を生じ、八月〇安政五年(紀元二五一八年)。の頃にいたりても尚黴雨中のごとくなれば、濕氣をはらゝんと、蒼朮を家毎にたき、又狐を恐れて薫陸蕃椒を焚くものも有り。されば、杜松子蒼朮たき蒼朮とて賤き品なり。の價常に八九倍にいたりしときこゆ。予は月なかば黴雨なりけれども、用のの上はいふも畏し、書家には高久隆古高橋波藍二藤三拙俳諧狂歌師にゝ、燕栗園千壽俳家には、惺庵西馬福芝齋得蕪狂句家にゝ、綠亭川柳角觜家にゝ、寶川石五郎方力岩藏戯作者ゝ、山東京山柳下亭種員曲亭琴童樂亭西馬浮世畫師には、一立齋廣重立川國郷豊後節にゝ、清元延壽太夫同く三絃彈清元市造、長唄の三絃彈杵屋六左衛門義太夫の三絃彈鶴澤才治軍談師にゝ神田伯山、一龍齋貞山渾話家には鈴々舎馬風上方才六老妓にゝ稻本樓小稻幇間にゝ都與三太夫俳優にゝ嵐小六尾上橘之助嵐冠五郎松本虎五郎等死しぬ。はしめ尾上菊五郎片岡仁左衛門中村延雀其餘數人死したりて、中には追善畵と唱ふるものを彫りて、繪見世にひさき、又通街を役者追善の發句などしてうり歩行しが、皆そら言にて、仁左衛門市川市藏延雀等も病しかごも、辛うじて愈え、この外に其伎の拙にて名もあらぬ俳優のひとりふたりも死したるなり。猿若町邊のものゝかたりし。

七月末〇安政五年(紀元二五一八年)。の頃より、都下〇江戸。に時疫行はれて、芝の海邊・鐵砲洲・佃島・靈岸島〇市内。の畔に始まり、家毎に此病痾に罹らさるいなし。東海道駿河の邊よりは來りしと云。八月〇安政五年紀元二五一八年。の始より次第に熾にして、江戸中並近在にはびこり、即時にやみて即時に終れり。始のほどい一町に五人七人、次第に殖て檐を並べ、一ッ家に枕を並へ臥たるもあり、路頭に匍匐して死につけるもありけり。此病暴瀉又い暴瘧など號し、俗諺にころりと云へり。西洋こはコレラ又アジアテイカなど唱ふるよし。〇中略。八月〇安政五年(紀元二五一八年)。末の頃い、次第こ蔓延し、その邊際いたしかならねども、奥羽のあたりにもいたりしと聞けり。九月初旬〇安政五年(紀元二五一八年)。より些しく遠ざかり、十月〇安政五年(紀元二五一八年)。に至りて漸く此噂止みたり。

——續武江年表

當時のされ歌も聞およびしを三つ四つしるす。〇節三。

借金を娑婆へ殘しておきざりや、迷途の旅へころり欠落。

紀のをろか

此たびは醫者も取あへず死出の山、よみじの旅路神のまじない。

作者不知

埋ンこむ、燒場は困る苦の中に、何とて魚喰(サカナク)へなかるらん。「お寺はよろこべ、二日で佛になつたはヤイ。

作者しらず

——頃痢流行記

同日〇安政五年(紀元二五一八年)十月廿一日。御届

先般流行之病症ニ而死亡いたし候者、格別多輩之趣ニ相聞いたし候間、去月〇安政五年(紀元二五一八年)九月。中、右病ニ而死亡之者取置いたし候分、身分幷男女ニ不レ拘員數、御府内寺院銘々名書出しいたし候樣、諸宗觸頭共ゟ申達いたし候處、追々届出いたし候ニ付、惣人數取調いたし候處、左之通ニ御座いたし候。

身分幷男女ニ不レ拘惣人數貳萬八千四百廿一人。內火葬九千九百廿三人。

右者此程迄ニ追々届出いたし候分ニ而、未だ届後レニ相成いたし候分も可レ有レ之いたし候得共、凡取調入ニ御聽置申いたし候。

廿七日〇安政五年(紀元二五一八年)八月。暴瀉病流行

此日〇安政五年(紀元二五一八年)八月廿七日。暴瀉病療治觸達有レ之

暴瀉病七月下旬〇安政五年(紀元二五一八年)。より天下普く流行、阿蘭陀國にてはコレラと云よし。兩三度も暴瀉すれば、更に治し難し。故ニ是をコロリ病と通言す

る也。〇八月〇安政五年(紀元二五一八年)。中江戸中町屋計り病死人一萬二千五百九十三人と云ふ。全流行始終、七月廿日〇安政五年(紀元二五一八年)。頃より九月十日頃迄凡五十日間、武家及寺院町方等人別書上に洩れし者共、大概差加へ、三萬人程の死亡と云。

——嘉永明治年間錄

第二次ノ虎列刺流行ハ、安政五年〇紀元二五一八年。ニシテ、文政五年〇紀元二四八二年。ノ第一次流行ヲ距ルコト、三十六年ナリ。當年〇安政五年(紀元二五一八年)。ハ支那地方ニアリテ、該病盛ニ流行シタレバ、其ノ種子ハ彼ヨリ我ニ傳ハリシモノト察セラル。其初メ長崎〇肥前國。ニ起リシハ五月〇安政五年(紀元二五一八年)。ニシテ、出島〇長崎。ニ吐瀉患者アリ、米國汽船「ミシツピー」號ニモ、多數ノ同樣患者アリ。在留ノ蘭醫ボムペ、フアン、メールデルフオールド、其虎列刺病ナル事ヲ斷定シ、治方及豫防法ヲ記述シテ、長崎奉行所ニ提出シ、奉行所ハ之ヲ公布シテ、府內〇長崎。ノ醫家ヲシテ其治則ヲ知ラシメタリ。然ルニ六月下旬〇安政五年(紀元二五一八年)。ニ傳ハリ、七月上旬〇安政五年(紀元二五一八年)。ニハ江戸ニモ此病起リ、赤坂〇市內。邊ヨリ始マリテ、靈岸島〇市內京橋區。邊ニ多ク、八月〇安政五年(紀元二五一八年)。ニ及ヒテハ、其病ハ殆ド全國ニ普及シ、殊ニ江戸ニアリテハ、其勢最モ猖獗ニシテ、〇中略。今回流行ノ虎列刺ノ症狀ハ、之ヲ文政五年〇紀元二四八二年。ノ流行時ニ於ケルモノニ比スルニ、大抵相同シク腹痛・嘔血ナキヲ異ナリトスルノミト云フ。——日本醫學史

〔參考〕日本災異志ニ據レバ、

安政五年(〇紀元二五一八年)七月二十七日ヨリ九月二十三日マデ五十五日間ニ於テ、江戸中ノ諸寺院ヨリ各其取扱タル死亡者ヲ書キ上ゲタルモノ(〇摘要。)

淺草ノ分一萬五千百四十八人。下谷ノ分一萬二千八百四十九人。小石川ノ分一千九百七人。牛込ノ分二千四十一人。水道町ノ分七百五十四人。青山ノ分一千八百九十七人。本郷丸山ノ分一千三十一人。市ヶ谷ノ分二千百十七人。原町ノ分一千三十七人。雜司ヶ谷ノ分五百八十四人。赤坂ノ分二千八百九十人。麻布ノ分六千六百六十七人。目白ノ分九百四十五人。四谷ノ分二千百五十五人。澁谷ノ分一千九十人。飯倉ノ分九百六十九人。三田ノ分三千三百四十八人。金杉ノ分一千九百人。高輪ノ分六百八十三人。二本榎ノ分一千百十二人。切通シ九百九十一人。目黑ノ分一千四百六十人。白金ノ分一千三百七十四人。品川ノ分二千六百七十九人。向島ノ分一千四百八十二人。押上ノ分二千七十六人。深川ノ分八千四百五十九人。本所ノ分六千九人。

西本願寺一萬一千八百二十人。增上寺一千九百八十七人。眞法寺六百七十二人。

總不殘高二十六萬八千五十七人。

掃寄草紙左ノ如キ戲文ヲ載ス。亦慘狀ノ一端ヲ推ス可キ資料ノ一タリ。

霸都時代ノ疫癘

しん板冥途の旅穴の都路

みやこぢは、五十日あまりの御てうじも、げにしづかなる御ゐかうや、さきえてはやるゑきれいに、しにゆくひとはかずしれず。老若男女おしなべて、ころり〳〵としぬゆへに、そのなをころりとなづけたり。お江戸ばかりとおもひのほか、品川へんはなをおほし。なかにも信者はありがたや、川崎だいしへぐはんかけて、ぶじにくらすもりやくなり。のきをならべてきちうふだめもあてられぬありさまや。このゝにあはれはげいにんの、ながのやすみでぜにはなし、なかまへかうでんやるうのもあり。そんとくなしのたてんぼう、あたりはづれはとちに、じぶんゑもらふものもなく、またおれたちのぎりじんぎ、ゆかればならぬみしんるい、のべのおくりをきのうん。むりなねかひも神奈川で、うれしと思ふかひさへも、はや程ヶ谷のほどそこ〳〵に、わがやへいそぐもごりみち、やくびやうかみに戸塚まり、むじやうのかぜにさそはれて、ついにめいごのたびのつれ、あとはやきばのけむりぐさ、くさきにほひもことわりや、しびとのおけでやまをつき、しゆらのぢごくにことならず。藤澤でらのおぢうれん、これをあらよのはなむけに、あとからつゞくそうれいは、ひら一めんの平塚も、みなほだいしよへ大磯ぎ、つま子がなくもむりならず。いつけしんるいうちょりて、むだそうだんは小田原や、箱根こへてもなをやます、三島のかみのめぐみにて、たすかるものはうんつよし。しぬもいきるもじやうやごの、あるじはひんのくるしがり、沼津くはずにごふとふし、はやり病ひのくせとして、原がいたむとすぐにしぬ、つゆのいのちとあとはらふ、ふだんにぎはふ吉原も、專らはやる狐つき、これまでおゝくのきやくじんを、たぶらかしたるむくいに

て、いまはきつねにばかさるゝ、人をいのらばあな二ツ、たま〳〵あがるきやくあれば、四百ころりのごろれなり、これもとうじのはやりもの、ひとつながやのさじべごの、人にはゑちごの蒲原で、正じきいちぎのものなるが、いかなるぜんせのいんぐはやら、ころりやまひになやむゆへ、むかふ三げんりやうごなり、いへ主はじめよりたかり、ゆいごんあらば由井なされ、かならずたつしまらせんと、いふうちいきはたへにけるなかやのぎやうじさきにたち、はやく興津のあさぼらけ、江尻からげてさしにない、府中きちうのかけすだれ、のこる子どもはぐはんぜなく、おやのわかれもわきまへず、鞠子ついてぞあそびゐる、ふびんといふもあはれなり。おほくのひとのしぬるのも、もとのおこりは魚るいとかや、岡部ばかりをくふてゐりや、いのちにさはるうれいなし。とはいふものゝなまざかなくはねばことに藤枝なり。むすめは島田でとしわかく、しやうじんさすもいとしらし、たとへきつねがじやますとも、しんじやのとくには金谷せん、うぢこのものがあつまりて、あくまをはらふしゆかうとて、じかうはづれのみこしをば、日坂かまはずもちあるき、おみきのかげんかゐせいよく、とをきところへ掛川で、しづまりしだい袋井のもとのやしろへあんちなす。またも見附しあなさがし、濱松てうのともたちに、もとれかぎりにばらしつゝ、ようやくその日はしまいしが、舞坂あそんでゐられれば、きのふにこりずまた河岸で、荒井いはしをいつかかいいはし〳〵とかけあるき、よう〳〵いつけんよぶゆへに、かしでやつこのおゝいわし、げためにせふといふたれば、白須賀ならばはんふんれと、あいてにならぬしわんぼう、二夕川とてはみかへらず。とうじなんぎのよのなかに、てらとこしやとおんぼうは、しあわせ

吉田でかれまうけ。さはさりながらあくせんは、かならずみにはつかぬぞや、御油だんあればちりやすし、かぢやきさうをいゝ立に、たぶんのはつほむさぼりて、わざはひその身にかゝるとき、いづれもかほは赤坂や、よそのさいなん藤川を、岡崎でみるきのどくさ。くよ〳〵くらすもいつせうぞ、くうてしんだら百れんめと、池鯉鮒（いけのこいふな）てりやうりに、ひとくちのんでひぢまくら、さめておどろくまるじるし、そんりやうしちやはそうやすみ、いかに鳴海もいとはずに、宮もかざりもすてたとて、まさか桑名じやゐられまい。たび〳〵なれど四日市おばごのかたへまたむしん、こんどばかりはまちがひなし、かたいせうこは石藥師もしもかさずはどう庄野よはひひさしき龜山でも、ぜにかれなければいきがひなし、しにゆくひとに關もりなく、坂の下やら土山やら、思ひ〳〵のはかしるし、水口ぐちのうはさには、とりつくきつれをいけどりて、石部のでるほどたゝきすへ、きやつゆへしんだれいこんへ、草津にさいてたむけなば、さぞやみらいでよろこばん、大津けころりをかりつくし、しかいしづかにおさまらば、しよにんあんどのをもひせん。なをとうれんはいつよりか、たぐひまれなる豐作にて、きつねたいぢのそのあとは、たぬきにあらでばんみんも、みなたいへいのはらつゞみ、うつてかはりしたのしみは、これ神こくのみかげぞと、御代の壽祝ゐたりける。

〔附記〕　柳營日次記

廿三日〇安政五年（紀元二五一八年）八月〇中略下總守殿〇間部詮勝。御渡御書付

此節流行之暴瀉病ハ、其療治かた種々ある趣にハ得共、其中素人心得べき法を示す。豫しめ是を防ぐには、都而身を冷す事なく、腹には木綿を卷、大酒大食を愼み、其外こなれ難き食物を一切給申間敷ハ、若し此症催しハはゝ早く寢床ニ入而、飮食を愼み、惣身をあたため、左に記す芳香散と云ふ藥を用ゆへし。是のみにして治すもの少なからす、且又吐瀉甚しく、惣身冷ゆる程に至りしものハ、燒酎壹貳合之中ニ、龍腦又ハ樟腦壹貳匁を入れあたゝめて、木綿之切にしたし、腹并手足ハ靜ニすり込み、芥子泥を心下腹并手足ハ小半時位ツヽ度々ハるへし。

芳香散　桂枝（上品）　細末　益知　細末　乾姜　細末　等分。

右調合いたし、壹貳分つゝ、時々用ふへし。

芥子泥　からし粉　溫飩粉　等分。

右あつき醋にて堅く練り、木綿切にのばし張ハ事。但し間に合さる時は、あつき湯にて芥子粉計りねりハ而もよろし。

又法

あつき茶に、其三分一燒酎を和し、砂糖を少し加へ用ゆへし、但し座敷を

閉、布木綿等ニ燒酎をつけ、頻に惣身をこするべし。

但、手足の先并腹冷る所を、温鐵又は温石を布に包み、湯をつかひたることき心持になる程こするも又よし。

右ハ此節流行病甚敷、諸人難儀いたしいニ付、其症ニ拘ハらす、早速用い而害なき藥法、諸人心得之ため、無急度相達い事。

八月〇安政五年(紀元二五一八年)。

安政五年風邪事蹟

安政五年風邪　續武江年表ニ、

九月下旬〇安政五年(紀元二五一八年)。風邪流行。

安政六年麻疹

安政六年虎狼痢

安政六年風邪

六年己未〇安政〇紀元二五一九年。四月、麻疹行ハレ、〇續武江年表。七月〇安政六年(紀元二五一九年)。ヨリ九月〇安政六年(紀元二五一九年)。ニ至ルマデ、虎狼痢再ビ流行シ、〇續武江年表。古呂利考。十月〇安政六年(紀元二五一九年)。風邪行ハル。〇年表續紹錄。

安政六年麻疹事蹟

安政六年麻疹　續武江年表云フ、

同月〇安政六年(紀元二五一九年)四月。頃より、麻疹に類する病氣行はる。

安政六年虎狼痢事蹟

安政六年虎狼痢　傳へ云フ、

同月〇安政六年(紀元二五一九年)七月。下旬より、去年〇安政五年(紀元二五一八年)。行はれし暴痧病ふたゝび行れ、男女死亡多し。九月〇安政六年(紀元二五一九年)。に至て止む。南都(〇大和國)泉州・大坂(〇攝津國)の邊、わけて行れしよしなり。

——續武江年表

〇上略。其翌年己未〇安政六年(紀元二五一九年)。又流行し、其後麻疹と併行、最劇く、これに繼て、年々斷せず、近歲に迨て、時々甚く、人民を損すること、其數を知らず。

——古呂利考

安政六年風邪事蹟

橘黃年譜ニモ「是歲〇安政六年(紀元二五一九年)。七八月ノ際、暴瀉又流行ス。蓋其證大同小異アリト雖、往年ニ比スレハ稍緩ナリトス。」ト見ユ

安政六年風邪　年表續紹錄ニ、

同日〇安政六年(紀元二五一九年)十月五日。內藤紀伊守殿〇信親。御達

此節風邪流行ニ付、長髮ニ而罷出い而も不苦旨、紀伊守殿〇內藤信親。無急度本多越中守〇忠ゟ德。被仰聞い段、伊澤美作守〇政義。申聞い。

萬延元年風邪

萬延元年麻疹

萬延元年庚申〇安政七年三月朔日改元〇紀元二五二〇年。春、江戸風邪流行ス。〇續武江年表。閏三月〇萬延元年(紀元二五二〇年)。麻疹行ハル。〇增訂武江年表。

萬延元年風邪事蹟

萬延元年風邪 ハ、春○萬延元年(紀元二五二〇年)。風邪流はる。

——續武江年表

萬延元年麻疹事蹟

萬延元年麻疹 增訂武江年表云フ、閏三月○萬延元年(紀元二五二〇年)。麻疹流行。

文久元年疾疫

文久元年辛酉○萬延二年二月廿改元○紀元二五二一年)。**傷寒熱病眼病ヲ患フル者多シ。**○續武江年表。

文久元年疾疫事蹟

文久元年疾疫 ハ、四月○文久元年(紀元二五二一年)。痘瘡流行シタルコト增訂武江年表ニ見ユ。

是月○文久元年(紀元二五二一年)四月。疱瘡流行。

——續武江年表

文久二年麻疹

五月○文久元年(紀元二五二一年)。**傷寒熱病眼病等多し。**

文久二年暴瀉病

此頃○文久元年(紀元二五二一年)五月。**傷寒又熱病眼病等ノ行ハレタルコトハ、**橘黃年譜ニハ、「辛酉歳○文久元年(紀元二五二一年)。夏秋ノ交、疫邪流行ス。蓋シ陰位ニ陷ル者至テ少シト。」有リ。

二年壬戌○文久二年(紀元二五二二年)。**夏、江戸麻疹大ニ行ハレ、次テ暴瀉病流行ス、九月**○文久二年(紀元二五二二年)。**ニ至リテ漸ク止ム。**○幕府沙汰書。續武江年表。橘黃年譜。疫毒攘防說。嘉永明治年間錄。

文久二年麻疹事蹟

文久二年麻疹 文久二年○紀元二五二二年。麻疹大ニ流行シタルコトハ、左ノ諸傳ニ詳也。

七月廿日○文久二年(紀元二五二二年)。大目付御目付ゟ

覺

此節流行之麻疹病人多向々ゟ、人少ニ而難儀可ㇾ及ㇾ間、明後廿二日○文久二年(紀元二五二二年)七月。增上寺○市内芝區。御參詣者、不ㇾ被ニ仰出一ㇾ間、其段向々ゟ可ㇾ被ㇾ達ㇾ事。

八月六日○文久二年(紀元二五二二年)。大目付御目付ゟ

覺

此節流行之麻疹病人多向之御人少ニ而、難儀可ㇾ及ㇾ間、明後八日○文久二年(紀元二五二二年)八月。東叡山○市内下谷區。御參詣ハ不ㇾ被ニ仰出一ㇾ間、其段向々ゟ可ㇾ被ㇾ達ㇾ事。

——幕府沙汰書

夏○文久二年(紀元二五二二年)。の半より麻疹世に行はれ、七月○文久二年(紀元二五二二年)。の半に至りては彌蔓延し、貴賤男女この病痾に罹らさる家なし。此病夙齡の輩に多く

翻都時代ノ疫癘

天保七年（〇紀元二四九六年）の痲疹にかゝらざる輩なり。強年の人こゝ稀なり。凡そ男ゝ輕く、女は重し。それが中に妊娠にして命を全ふせるもの甚だ少し。産後もこれに亞ぐ。後に聞けば、二月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）の頃、西洋の舶崎陽（〇肥前國。）に泊してこの病を傳へ、次第に京（〇山城國。）大坂（〇攝津國。）に弘まり、三四月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）の頃より行はれけるよし。江戸に肇まりしゝ小石川（〇市内。）某寺の所化何某二人、中國より江戸に來りし旅中に煩ひて、四月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）の末に至り少しく行はれ、六月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）の末よりゝ次第こゝ熾こして、衆庶枕を並べて臥したり。文政（〇紀元二四九〇年。）の度にかはり、こたびゝ殊に劇しく、良醫も偏こ藥餌を施すこと能はず、或ゝ吐し、咳嗽を生じ、手足厥冷に及ぶ。烏犀角ゝ內攻を防ぐの藥なれども、用ふること度こ過ぐれば逆上して、正氣を失ふに至るとぞ。固より熱氣甚しく、狂を發して水を飲んとしてゝ駈出し、河溝へ身を投じ、又ゝ井の中へ入て死ぬるもありし。醫師は巧拙を言はずして東西に奔走し、藥舖ゝ藥種を擇ばずして售ふに遑なく、高價を貪れるも多かるべしかるに醫生も藥舖も又續て同病に罹れるも尠からず。（〇中略。）七月より別

痲疹流行錦繪

原寸　竪一尺一寸九分　横八寸一分　富士川游所藏

文久二年痲疹流行當時ノ錦繪也。馬槽ヲ冠レバ、痲疹ヲ免レ、若クハ輕カル可シトノ俗傳ヲ畫キタル者ナラム歟。

麻疹養生之傳

麻疹流行年數

一慶安三庚寅年秋　四十五年目
一元禄三庚午　四十年目
一享保十五庚戌年春　二十五年目
一宝暦三癸酉年春　二十四年目
一安永五丙申年秋　二十一年目
一享和三癸亥年夏　二十二年目
一文政七甲申年春　十四年目
一天保八丁酉年秋　二十八年目
一文久三亥戌年夏

て盛にして命を失ふもの幾千人なりや量るべからず。三昧の寺院、去る午年（○安政五年（紀元二五一八年））。暴瀉病流行の時に倍して、公驗を以て日を約し、茶毘の烟といなしぬ。故に寺院は葬式を行ふに遑なく、日本橋○市内。上こゝ一日棺の渡ること二百に及べる日もありとぞ。

是歲（○文久二年（紀元二五二二年））。諸國麻疹流行シ、夏六月中旬——續武江年表

一般之ヲ患フ。其症往年ニ比スレバ、邪熱特ニ甚シク、其始滿身壯熱、面腮紅赤、眼胞腫起、脣舌乾燥、咽喉痛ミ、或ハ物アッテ刺戟スルガ如ク、或ハ半夏南星ヲ噬ムカ如ク、簽刺如何トモスベカラズ。身體酸疼煩燥シ、二三日ヲ經テ、通身朱ヲ塗ルガ如ク、斑々粒ヲナシ、或ハ蚊蚤ニ咬ルヽガ如ク、點々紅色アリ。噴嚏頻ニ出デ、或ハ鼻清涕ヲ流シ、漸ク咳嗽ヲ見ル。其最劇者ハ隨テ出テ隨テ沒シ、或ハ紅雲片ヲナシテ形ヲ見ズ。或ハ皮膚ノ間ニ隱々トシテ發スルコト能ハズ、或ハ肌膚枯燥シテ胸腹ノ間ニ磊々疥ノ如キノ狀ヲ見、口舌焦爛、齦血ヲナシ、嘔吐喘息曠語煩悶、種々危篤ノ證ヲ現ハス。往年ノ疹ハ發出二三日ニシテ疹色白ニ變ジ、四五日ヲ過キテ痂ヲナス。其形白瘡ノ剝落スルモノ更ニナク、偶々解熱ノ後、皮膚ヲ檢スレバ、傷寒ノ如ク皮膚一面枯剝スルヲ見ルノミ。此其

毒ノ淺深劇易知ルヘキノミ。一老醫曰、安永丙申（〇五年（紀元二四三六年）。）ノ麻疹ハ、未ダ詳、其後享和三年癸亥（四六三年。）ノ麻疹ハ、重症多ク、死人夥シ。幸ニ免レタルモノモ、眼病腫瘍、虚勞痢疾、腸癖脚氣水氣等ニ變シ、死セシ者多シ。（中川壺山戊辰錄云、享和癸亥（〇三年（紀元二四六三年）自レ春至レ夏、麻疹大行、醫各從二其方法一、先生所レ用、大抵大黄劑而以レ下レ毒、爲二醫務一至二秋世多患一餘毒、間生二異證一就二先生一受レ治者、無復他患、一時翕然感服。）文政甲申（〇七年（紀元二四八四年）。）天保丙申（〇七年（紀元二四九六年）。）ノ兩度ハ、輕症ニシテ不治ノ者至テ少シ。享和（〇三年（紀元二四六三年）。）ノ後此ノ如キ劇症ヲ聞カズ、死亡亦恐ラクハ享和（〇三年（紀元二四六三年）。）ノ疫ニ下ラズ、麻疹亦五六十年ニシテ一厄運ヲナス、鑑セズンバアルヘカラズ。

——橘黄年譜

麻疹並ニ暴瀉病大ニ流行ス。

此月（〇文久二年（紀元二五二二年）六月。）中旬より閏八月下旬（〇文久二年（紀元二五二二年）。）まで麻疹流行、人多く死す。暴瀉病ハ、五年前戊午の年（〇安政五年（紀元二五一八年）。）よりハ輕し。

——嘉永明治年間錄

麻疹年代記ニハ、「ことし文久二年壬戌（〇紀元二五二二年。）夏はじめより、京都（〇山城國。）大坂（〇攝津國。）麻疹流行せしか、漸尾張に傳播し、六月七月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）に至て、病勢熾に、府下（〇名古屋。）病ざる者少し。今年（〇文久二年（紀元二五二二年）。）の麻疹熱氣疫癘のごとく、輕き者も病苦は甚しといふ。江戸其外諸國一般に傳播して、皆同じ症也とぞ。八月（〇文久二年（紀元二五二二年）。）末に至て、漸く歇む。」ト有リ。

（參考）麻疹年代記ニ、

文久二年壬戌（〇紀元二五二二年）麻疹流行之時、江戸板行一枚摺類

流行道化三十六歌仙

天ち天のう　あきれたよばしかのやまひかさなみで、我子供らもついにやみつゝ。

ぢさう天のう　春すぎて夏きにゐりて此さはぎ、ばしかをすてふ子どもなく山。

かきの本の人丸　さし引のれつにうかされうは事も、なが〳〵きよをくるしかもれん。

山べの赤人　どこのうらに打よりみてもいしや樣と、藥やみせに金ぞふりつゝ。

さる丸大夫　おくさまも紅葉のごとくはれあがり、うなりしこへをきくそかなしき。

あべの仲麻呂　あめが下をふりむきみればはしかなる、はやりやまひのつきし人かも。

小のゝ小町　かほのいろはまつかになりていたはしや、わがみなからにれつのせしまに。

きせん法し　わか家はくひ物とせいはしかゆへ、よう休しと人はゆうなり。

せみ丸　うりやもゝ梅もあんずもくはれない、そばやうどんも大かたのどく。

三ぎたかむら　かゝのはらのぼるがいなやぶりかへし、五たいしひれてすじはつりふね。

そう正へんじやう　あまつさへ風のれつきをふきはらひ、うさいかくにてしばしといめん。

元よししんのう　酒みればくびく〳〵したるいぢきたなだこへしんでものまんこそおもふ。

あり原のなりひら　しかられるこごともきかずだゝつ子か、薬ものまず水くらふとは。

そせい法し　ごくたてこいひし計りにながひこと、七十五日をまちいづるかな。

文屋やすひで　やむからに又もく〳〵こぶりかへし、これじや命もあらじこいふらん。

大江千里　やみぬれば日々にものこそくへぬなり、わが身ひとりのこことにはあられど。

かんけ　此たびはいしやもさりあへずたい一人、とうけもこしてかぜるまにまに。

三條右大じん　名にしあふ大あはしまのかるやきや、人にしられてかふよしもかな。

源のむね行あそん　いろ里は今そさびしさまさりける、菜や女郎やもかれるとおもへば。

みぶの忠みね　いしやさまざ薬しゆばいやく其外に、はしかで計りよき物はなし。

右こん　まじなはるみくじはんだんかぢきとう、人は命のおしくもあるかな。

けんさくこう　あはれともいふべき物は芝居町、長き休となりぬべきかな。

それよし忠　町で戸をたてゝ休んだ諸あきんど、いく萬けんかかぎりあるまじ。

藤原よしたか　らしやめんでもうけた金は身につかず、こんごはしかでみんなたれすり。

いせの大すけ　いにしへのなまのまくろにめじかつを、けう此頃はくふにくはれず。

清少なごん　よのふけてれつのつよきははかれども、よにせい〳〵とせきはゆるさじ。

前大僧正行そん　もろ共にあはれとおもへはしかつこ、ごくたて斗くうものはなし。

のういんほうし　客はなし女郎はみんなはしかして、ぐちいふものはあるじなりけり。

其せんほうし　さびしさに吉原町をながむれば、くるわも同じ秋の夕ぐれ。

藤原の元よし　しちおきしわづかな錢でかいぐすり、あはれこことしも今にこまらん。

二條のいんさぬき　わかはしか人めにみへぬ内にあり、しんそこれつのさめるまもなし。

德大寺左大臣　ほどすぎてはしかの跡をなかむれば、たい薬禮のかりそのこれ

東京市史稿

る。

西行法し　なげけともゆやは客がはいらざり、あくひ顔なる我なみだかな。

中なごん定家　しぬ人をかず　もかぎりのおんぼうが、やきばのまきで身をこがしつゝ。

後とはのいん　人もする人もはしかで日をくらし、よふひだつゆへ物おもう身は。

じゆとくいん　ひもしくもめしやは休そばはどく、なほあんまりなはしかなりけり。

文久二年暴瀉病　文久二年〇紀元二五二二年。ノ虎列刺流行ハ、今茲文久二壬戌〇紀元二五二二年。ノ夏麻疹大ニ行ハレテ、後再ビコレラ病盛ニ行ハレ、〇中略。其死ニ至ルモノ先般ノ流行ニ比スレバ其幾倍ナルヲ知ラズ。又之ガタメニ全家悉ク死亡シ、嗣ヲ絶シ、産ヲ失フモノ擧ゲテ算フベカラズ。

——疫毒豫防說

七月〇文久二年元二五二二年。の半より、暴瀉の病にまさりし急症やむもの多くこれあり。こゝ老少をいはず、即時兆し、吐瀉甚しく、片時の間に取詰て投藥すべからず、死後總身赤くなるもの多し。その中には麻疹の後食養生懈りて再感せるもありしとか。又霍亂の類もありと聞けり。錢湯風呂屋簀頭舖更に客なし。

〇中略。**八月**〇文久二年元二五二二年。の半より町々木戸に齋竹を立て、軒に奉燈の提灯を釣り、鎭守神輿獅子頭をわたし、神樂所をしつらへて神をいさめ、この禍を攘ふといへり。後にハ次第に長じて、大なる車樂を曳渡し、伎踊ねり物を催して街頭をわたす。此風俗一般なれあり。今年〇文久二年元二五二二年。米穀豐饒にして、八朔二百十日僉日和なり。しかれとも、諸物の價尙貴踊し、麻疹其餘の病にて、合家枕を並べて臥し、活業を休しもまゝあり。賤民甚困苦せる故、七月上旬〇文久二年元二五二二年。より、町會所の倉廩を發して、市井の貧民へわかたる。又有德の輩よりも施行多し。

——續武江年表

橘黃年譜ニモ、「文久二年〇紀元二五二二年。秋、暴瀉流行ノ後。麻疹ス。輕者ハ五苓散生姜瀉心湯、重者大柴胡湯小半夏加苓石膏湯ニテ愈、而メ疫症ヲ見ルモノ往々アリ。」ト見ユ。

三年癸亥〇文久二三年。〇紀元二五二三年。**七月、江戸暴瀉流行ス。**〇續武江年表。〇橘黃年譜。

文久三年暴瀉病　ハ、七月〇文久三年元二五二三年。暴瀉病少しく行はる、死亡のもの去年〇文久二年元二五二二年。の

半ばより少し。

橘黃年譜亦「是歲（○文久三年(紀元二五二三年)。秋、暴瀉流行スト。」記ス。

慶應三年丁卯（○紀元二五二七年。六月、江戸風邪行ハル。（○續武江年表。

慶應三年風邪

慶應三年風邪事蹟

慶應三年風邪　續武江年表云フ、

六月初旬（○慶應三年(紀元二五二七年)。冷氣催し、諸人袷を著く、風邪熱病行わる。

疫邪流行年譜ニ據レバ、「今年（○慶應三年(紀元二五二七年)。ノ疫ハ、大患ニ至ル者少ナシ。柴葛解肌湯柴白湯ナドニテ癒タリト。」有リ。

（參考）日本醫學史云フ、

其病症ヨリ推シテ流行性感冒トナス事ヲ得ベキハ、享和元年（○紀元二四六一年。乃至二年（○享和○紀元二四六二年。ノ風邪ニシテ、（此年ハ、支那ニモ該症流行シタリト云フ。又文久元年（○紀元二五二一年。ノ疫邪ハ、竹内玄同之ヲ律期聖京（リスシンキング）倔ト診定シ、謨斯篤（モスト）治療書中ノ該病ニ關スル一篇ヲ鈔譯セシコトアリ。律斯聖京倔ハ、一名「ギリーブ」(Grippe)ト云フ。即チ流行性感冒ナリ。）其他ノ流行ハ記錄ノ備ハラザルガ故ニ、之ヲ判定スルニ苦シム所アリト雖モ、假ニ之ヲ流行性感冒ナリトシテ、之ヲ西洋ノ「インフルエンツア」流行年紀ニ比較スレバ、

風邪流行年紀

	相當西歷	歐米流行年紀	
寶永四年	一七〇七	一七〇九	歐洲
延享元年	一七四四	一七四二—四三	歐洲
延享四年	一七四七	………	
明和六年	一七六九	一七六七	歐洲
安永五年	一七七六	一七七五—七六	英佛兩國
天明元年	一七八一	一七八〇	露國
天明四年	一七八四	一七八一—八二	支那獨逸伯剌西亞
寬政七年	一七九五	一七九八	北米
享和元年—二年	八〇一—二	一八〇〇—一	獨佛兩國
文化五年	一八〇八	【一八〇七 一八〇七—八	【北米 英國
文政四年	一八二一	………	
文政七年	一八二四	一八二四—二五	北米
文政十年	一八二七	一八二六	西半球大流行
天保二年	一八三一	一八三一	歐洲全體
天保七年	一八三六	一八三六—三七	東半球大流行
嘉永三年	一八五〇	一八五〇	世界各地
安政元年	一八五四	一八五二—五六	世界各地
安政四年	一八五七	一八五七—五八	世界各地
萬延元年	一八六〇	一八六〇	世界各地

文久元年	一八六一	一八六〇―六一	世界各地
慶應二年	一八六六	一八六六―六七	歐洲

所謂風邪(又ハ風疾)ハ、海外ニ於ケル「インフルエンツア」流行ト、略ボ其時ヲ同フシテ流行セシモノナルコトヲ知ル。

明治三年瘡瘡風疹
明治三年瘡瘡風疹事蹟

附記
明治四年風疹
明治五年疫眼

第二節　本記

帝都時代ノ疫癘

明治天皇明治三年庚午(紀元二五三〇年。)東京瘡瘡及風疹流行ス。(疫邪流行年譜。)

明治三年瘡瘡風疹　疫邪流行年譜ニ據レハ、左ノ如シ。

明治三年(紀元二五三〇年。)自レ春至レ夏疫病流行。

一月ノ末ヨリ六月頃迄風疹盛ニ行ハレ、毎戸煩ラハサル者ナク、其證惡風寒ノ後熱ヲ發シ、一夜ノ內ニ疹ヲ發シ、熱モ從テ解シ、四五日ニノ愈。俗ニ南京瘡瘡ト云フ。升麻葛根湯消毒飲合方ニ蒼石ナトヲ加ヘテ愈タリ。此年眞瘡流行セシ故ニ、此疹ヲ南京瘡瘡ト云ヘリ。(疱瘡モ流行シタリ。)

〔附記〕疫邪流行年譜ニ、

同(明治。)**四年**(紀元二五三一年。)二三月、風疹流行ス。

同(明治。)**五年**(紀元二五三二年。)自二二月一至三五月一疫病流行。

此年(明治五年(紀元二五三二年)。)雨少ク風多ク吹キ、爲ニ二月ノ末ヨリ疫眼流行ス。然カシ難治ノ者少ク、大概參敗ニ芩石ニテ功ヲ奏ス。齒痛モ流行ス。

明治六年麻疹　明治六年麻疹事蹟

六年〇明治〇紀元二五三三年。四月ヨリ七月ニ至リ、麻疹流行ス。〇麻疹年譜。疫邪流行年譜。

明治六年麻疹　麻疹年譜云フ、

明治六年甲戌〇紀元二五三三年。自二四月一至二七月一麻疹流行。

三月ノ下旬、横濱〇武藏國。ニ麻疹流行スル話ヲ聞クト間モナク、四月ノ上旬ヨリ府下ニ流行ス。五月中尤モ盛ニ行ハル。其症候ハ、文久ノ疫ニ比スルニ輕キ事一等也。六月ニ至リ、暑熱ノ爲温覆スル事能ハスメ、表氣閉塞、發疹セズ熱氣熾盛、煩燥ナラシメ、重證ニ陷リシ者モ多クアリヌ。家大人ノ遺訓ヲ奉シ、升麻葛根湯消毒飯ノ合方ニ芩石ヲ加テ使用シ、一人モ誤ル事ナシ。疹患者百七十人ヲ治療ス。内男四人、女五人、男兒八拾四人、女兒七十七人。各地方ニハ秋ヨリ冬ニ至リ、翌七年ノ春マテ行レシ事、當時ノ新聞ニ見ヘタリ。

附記　〔附記〕明治六年〇紀元二五三三年。ニハ、蝦蟆瘟、水痘亦行ハル。事疫邪流行年譜ニ見ユ。

明治六年蝦蟆瘟水痘　同治〇明治。六年〇紀元二五三三年。三月、及自二五月一至二七月一疫病流行。

三月末ヨリ四月ニ至リ、蝦蟆瘟幷ニ水痘流行。五月ヨリ麻疹流行ヲ爲ス。

明治七年天然痘　七年〇明治二五三四年。七月、東京天然痘流行シ、八年〇明治〇紀元二五三五年。春ニ及ブ。

明治七年天然痘事蹟

〇東京府衛生科回議錄。

明治七年天然痘　東京府衛生科回議錄ニ、

當今府下ニ於テ、天然痘致二流行一死亡之者モ不レ尠ト趣、右ハ何月比ヨリ相始マリ、感染之者ハ何人、死亡之者何人、且豫防之御手當相定居ルヤ、其方法、至急致二承知一度、此段及二御照會一ル也。

明治七年五三四年。十一月二日　文部省

東京府

知事
參事
奏任出仕

別紙之通、文部省ヶ掛合越候ニ付、取調候處、各區々長ヨリ天然痘感染之者、死亡之者取調書差出候。就テ者、左之通及二回答一可レ然哉、伺候也。

文部省御中

府下ニ於テ、天然痘流行、死亡之者モ不レ尠趣ニ付、何月頃ヨリ相始リ、感染之者凡何人、死亡之者何人、且豫防手當方法、可レ及二御報知一旨、御照會之趣承知、取調ル處、別紙之通、各區々長ヨリ申出、則御廻し申ル。且豫防之手當之義者、種々論議

帝都時代ノ疫癘

も盡しゝ得共、別ニ施設方法も無之、尤府下病院ニ於テハ、種痘施行可致筈、即今取調中ニ付、尚可及御打合与存ゝ。此段御回答旁申進ゝ也。

七年〇明治〇紀元二五三四年。十二月九日

當七月〇明治七年(紀元二五三四年)。頃ゟ天然痘感染ノ者、

一、百八拾四人。　内、九十八人死亡。

同斷、

一、壹人。　一人死亡。

同斷、

一、六人。　内、四人死亡。

同斷、

一、七人。　内、四人死亡。

同斷、

一、五十六人。　内、十九人死亡。

同斷、

一、四十七人。　内、二十八人死亡。

合計三百壹人。

内譯百四十七人　感染平癒ノ者。
百五十四人　死亡ノ者。

右之通御座ゝ。尤昨今追々減少衰微之模樣ニ相見へ申ゝ。此段申上ゝ也。

各大區區長

七年〇明治〇紀元二五三四年。十一月

當〇明治七年(紀元二五三四年)。七月頃ヨリ天然痘感染者、

一、五人。　内、二人死亡。

同斷、

一、貳人。　内、一人死亡。

同斷、

一、無之。

同斷、

一、貳人。　内、一人死亡。

同斷、

一、無之。

合計九人。

帝都時代ノ疫癘

第一大區
第二大區
第三大區
第四大區
第五大區
第六大區
第七大區　〇第一小區後市内。
第八大區　〇第一小區、大部分後市内。
第九大區　〇第一小區及第二小區大部分後市内。
第十大區　〇第一、二、三小區大部分後市内。
第十壹大區　〇第一、二、三小區大部分後市内。

内譯五人　感染平癒之者。
四人　死亡之者。

右之通御座ゐ。當今者天然痘相見へ不ㇾ申ゐ。此段申上ゐ也。

七年〇明治〇紀元二五三四年。

郷村
區長

府下昨年〇明治七年(紀元二五三四年)。來今日ニ至ルマテ流行ノ天然痘、又ハ種痘ニテ死去ゐ者ノ員數、右兩樣ニ區別シ、至急御取調ノ上、御差廻シ有ㇾ之度、此段及ㇾ御掛合ゐ也。

八年〇明治〇紀元二五三五年。三月廿二日

左院内務掛
書記官印

東京府參事御中

庶務本課

知事
參事
奏任出仕

左院内務掛書記官御中

流行之天然痘又ハ種痘ニテ死去ゐ者ノ員數、右兩樣區別シ、取調御廻シ可ㇾ申旨、御掛合之趣致ㇾ承知ㇾ則別紙取調書御廻シ申ゐ。御落手有ㇾ之度ゐ也。

八年〇明治〇紀元二五三五年。四月八日

去七年〇明治〇紀元二五三四年。十二月一日ヨリ本年〇明治八年(紀元二五三五年)。三月廿二日迄、各大

區總計、

一、天然痘死亡

一、種痘死亡

一、種痘ノモノ天然痘ニ再感シ死亡

合三千四百貳拾四人。

右之通御座ゐ也。

明治八年〇紀元二五三五年。四月

知事
參事
奏任出仕

庶務本課

左院内務掛書記官御中

流行痘幷種痘中死亡ノ者員數、兩樣ニ區別シ取調方、御掛合ニ付、庶千十八號ヲ以御廻答およひ候處、右取調書之内、種痘死亡四十四与記載ゐハ、種痘中合發他病ニテ死亡ゐ者ニ有ㇾ之、右樣御承知有ㇾ之度、此段重而申進候也。

八年〇明治〇紀元二五三五年)四月十日

〔參考〕東京府衛生科回議錄所收各區長ノ報告書ニ據レハ、前報告天然痘及種痘死亡者ノ各區別ハ、左ノ如シ。

第一大區　天然痘死亡九百貳拾五人、種痘死亡六人。計九百三拾壹人。

三千三百七拾七人。

四十四人。

三人。

帝都時代ノ疫癘

第二大區　天然痘死亡四百五拾人、種痘死亡三人、計四百五拾三人。
第三大區　天然痘死亡四百七拾八人、種痘死亡九人、計四百八拾七人。
第四大區　天然痘死亡五百廿七人、種痘死亡十五人、計五百四拾貳人。
第五大區　天然痘死亡五百八拾四人、種痘死亡拾人、種痘ノモノ天然痘ニ再感死亡ノモノ三人、計五百九拾七人。
第六大區　天然痘死亡四百拾三人、種痘死亡壹人、計四百拾四人。

知事參事奏任出仕　庶務本課

文部省醫務局御中

天然痘ニ感ジ全癒ノ者、死亡ノ者、七年（明治〇紀元二五三四年。）十二月一日ヨリ、當二月廿日（明治八年（紀元二五三五年）。）迄取調書、各區長ヨリ差出ル間、則御廻シ申ル。御落手有之度ル也。

八年（明治〇紀元二五三五年。）四月十四日

七年（明治〇紀元二五三四年。）十二月一日ヨリ當二月廿日（明治八年（紀元二五三五年）。）迄、

一、天然痘ニ感シ全癒ノ者、

七百五拾壹人　第一大區。
四百八人　第二大區。
四百八十九人　第三大區。
四百八十三人　第四大區。
六百八十七人　第五大區。
四百七十八人　第六大區。

〆三千百拾八人。

一、同斷死亡ノ者

八百九十一人　第一大區。
三百四十九人　第二大區。
四百八人　第三大區。
四百七十六人　第四大區。
五百五十五人　第五大區。
貳百七十七人　第六大區。

〆貳千七百六十四人。

一、種痘致シル者　總計六千〇七十四人。

六百八十四人　第一大區。
六百十八人　第二大區。
六百五人　第三大區。
六百六十四人　第四大區。

帝都時代ノ疫癘

六百六十一人　第五大區。
五百三十二人　第六大區。

〆三千七百六十四人。

右之通御座候也。

八年〇紀元二五三五年。三月

知事　庶務本課
參事　學務取扱
奏任出仕　鄉村取扱

各區區長

當今惡痘流行之趣ニ付、市在共種痘說諭方、區戸長に御達有レ之度、且又各大區警視出張所内ニ設置之病院ニ於テ、巡査種痘致シ候ニ付、最寄之小兒、同所へ罷出候ハヽ、無代ニテ種痘施行可レ致候間、是亦區戸長へ御達有レ之度旨、警視廳ゟ坂部寔ヲ以談示有レ之候ニ付、左之通取計可レ然哉、御達案共伺候也。

警視廳御中

天然痘流行ニ付、市在ニ說諭方幷御廳御設立之各病院ヱ罷出ル者ハ、無料ニ而種痘御施行相成ル段、坂部寔ヲ以御談示之趣致ニ承知一則別紙之通、區戸長ニ相達可レ申ニ与存ル間、一應御協議ニおよびル。早行御回答有レ之度ル也。

七年〇明治二五三四年。十二月廿七日

警視廳御中

天然痘流行ニ付、市在ニ說諭方幷御廳御設立之各病院ヱ罷出ル者ハ、無料ニ而種痘御施行相成ル段、坂部寔ヲ以御談示之趣致ニ承知一則別紙之通、區戸長ニ相達可レ申ニ与存ル間、一應御協議ニおよびル。早行御回答有レ之度ル也。

七年〇明治二五三四年。十二月廿七日

各區區長

小兒生れて凡七十五日間餘相立ルハヽ、天然痘ニ不レ罹樣、種痘爲レ附ルハヽ、父母たるものヽ心掛ケニ有レ之、中ニハヽ、謂なき浮說ニ迷ヒ、時期ニ後れ居ルより、即今流行の如き惡痘ニ感染し、死におよびルものも有レ之、可レ憐事ニハ。かた〳〵未痘之小兒種痘ハ勿論、前々種痘いたし、五七年を過きルものといへとも、再種痘爲レ致、差向惡痘免れル樣、區々戸長ニ於テ、無洩懇切可ニ申諭一、此旨相達ル事。

但、各大區警視出張所内病院ニ於テ、當分無料ニテ種痘施行之趣、同廳ゟ報知有レ之ル間、最寄之ものは、無遠慮罷越、種痘ル樣是又厚以可ニ申諭一事。

明治八年〇紀元二五三五年。一月四日

天然痘流行ニ付、各大區當廳病院ニ而、無料ニ而種痘施行之義、御照會之末、區戸長ゟ御布達案御打合之趣、致ニ承知一右ハ、當廳ニ而意存無レ之ル間、御布達有レ之度、此段御答ル也。

明治八年〇紀元二五三五年。一月四日

東京府御中

警視廳

太政類典ニ據レハ、七年〇明治二五三四年。十二月十四日海軍省兵員中ノ天然痘未

帝都時代ノ疫癘

朱引内外各區區長戸長。

濟者種痘セシムルコト見ユ。東京日々新聞ニハ、五月十二日（○明治七年（紀元二五三四年）。ノ記事中、左ノ如ク有リ。種痘忌避者少ナカラサリシ者歟。

客月（○明治七年（紀元二五三四年）四月。來、府下天然痘流行し、逐次盛んになり、俗に云世並惡しく、十に五六は死に至れりと。實に惜むへく、憫むへき事ならずや。方今善良の牛痘種法准允ありて、是等の患ひを救はせ給はんとするの至仁を戴せず、舊習に固着して、貴重の性命を誤るに至る。愚も亦甚しと云べし。（○明治七年（紀元二五三四年）

五月雜報。

都下近日痘瘡ノ傳感夭折夥多、或ハ幸ニ死ヲ免ルモ、痘斑光面業平（○在原。小町（○小野。ノ美モ變シテ醜怪トナリ、甚シキハ聾トナリ盲トナル。種痘ノ良法アル、官屢告諭アルモ、頑民或ハ信セズ、或ハ貧窶ナス能ハサルモノアリ、或ハ陋醫ノ僻說ニ眩惑シ、手ヲ束ネ、天然ニ任ス。（○下略（○明治七年（紀元二五三四年）十二月卅一日寄書。

〔附記〕疫邪流行年譜云フ、

同（○明治八年（○紀元二五三五年。自二月至四月疫病流行。

二月ノ末ヨリ風邪大イニ流行ス、三月尤盛ナリ。

日本醫學史ニ據レハ、明治九年（○紀元二五三六年。ニモ天然痘流行シ、延テ十年（○明治○紀元

附記

明治八年風邪

明治九年天然痘

二五三七年。夏ニ及ブコト見ユ。

明治十年虎列刺

十年（○明治○紀元二五三七年。九月十四日、東京虎列刺病ヲ發ス、是ヨリ先七月中旬（○明治十年（紀元二五三七年。ニ清國厦門ニ流行シタル同病ハ、九月初旬（○明治十年（紀元二五三七年。ニ及ヒ、長崎（○肥前國。ニ傳播シ、遂ニ之ヲ東京ニ傳ヘ、十月（○明治十年（紀元二五三七年。ニ入リテ、次第ニ蔓衍シ、十月廿六七日（○明治十年（紀元二五三七年。ニ至リテ一日ノ患者二百人以上ヲ出シタリ。是ニ於テ、東京府ハ、愛宕下（○市内。ニ臨時病院ヲ設ケ、深川（○市内。淺草（○市内。ニ出張所ヲ開キテ貧窮患者ヲ收容シ、尋デ警視本署ノ市谷（○市内牛込區。向岡（○市内本郷區。綠町（○市内本所區。品川（○武藏國荏原郡。各避病院亦成リ、陸軍ノ小日向（○市内小石川區。臨時副病院ハ、兵士ノ患者ヲ收容シ、一面ニハ官民協力シテ消毒豫防ヲ勤ム。是年（○明治十年（紀元二五三七年。十二月ニ至リテ漸ク消滅ス。（○明治十年惡性虎列刺病流行記事。東京府衛生科回議錄。

帝都時代ノ疫癘

明治十年虎列刺　明治十年惡性虎列刺病流行記事、東京府衞生科回議錄等ヲ左ニ抄ス。內、流行記事ハ、記述全國ニ亘ルト雖、行文分載シ難ケレバ、其儘之ヲ抄シ、以テ其全國ニ於ケル流行位置ヲ察スルニ便ズ。

今玆明治十年〇紀元二五三七年。我ガ內地ニ流行セシ淵源ヲ考按スルニ、七月十五日〇明治十年(紀元二五三七年)。清國厦門ニ於テ虎列刺病流行シ、甚タ暴劇ニシテ、多クハ終日ヲ保タス、一日間ノ死亡百人ニ至ル。蓋新嘉坡ヨリ流傳セシモノナルベシト、厦門在留領事ヨリ報知アリシニ始レリ。我內務省ハ、此報知ヲ外務卿ヨリ得ルヤ、直チニ神奈川、長崎、兵庫ノ三縣ニ令シ、假ニ避病院ヲ人家隔絕ノ離島等ニ設ケ、醫員及ヒ屬吏ヲ撰差シ、內外人ヲ問ハスシテ、入港ノ船舶ヲ檢按スベキノ備ヲ爲サシム。又郵便飛脚船常ニ清國地方ヘ往來スルヲ以テ、三菱會社ニ命シテ、乘客貨物ヲ點檢シ、其流傳ヲ豫防セシム。二十四日〇明治十年(紀元二五三七年)。太政官ニ上申シテ各國公使ニ通達セシ各開港場檢病規則十四箇條ヲ寫致ス。是ノ日〇明治十年(紀元二五三七年)七月廿四日。電報ヲ以テ上海領事官ニ致シテ、虎列刺ノ景況ヲ問フ。二十六日〇明治十年(紀元二五三七年)七月。ニ至リ、厦門地方虎列刺病流行セリ、上海ハ其ノ類似ノ下痢、土人ニ多ク、往往死ニ至ルトノ答報アリ。二十七日〇明治十年(紀元二五三七年)七月。外務省ニ照會スルニ、內國各開港場ニ於テ豫防ニ着手セシムルニ因リ、其本源タル厦門、香港、上海等ニ於テモ各國領事ト協議シ、出入船舶ノ檢查健康狀態等ノコトヲ我ガ領事ニ通達アラン事ヲ以テス。二十八日〇明治十年(紀元二五三七年)七月。檢病規則中若干條ヲ加除シ、各國公使ノ協議ヲ經テ施行アラン事ヲ、外務省ニ照會ス。然ルニ三十一日〇明治十年(紀元二五三七年)七月。ニ至リ、同省〇外務省。ヨリ英國公使ノ香港總督ニ牒シテ避病院ノ設否ヲ諮問セシニ、其答書ニ、近日厦門ヨリノ來報患フベキニ非サレハ、避病院ノ設立ハ必シモ要セズトノ電報アリ、然ラハ橫濱〇武藏國。ニ於テモ設立ニ及バザルベシトノ意見書ヲ送致ス。因テ更ニ三縣ニ令シテ、姑ラク船舶檢按ノ着手ヲ停ム。然レ𪜈該病ノ流播スルヤ勢ヒ甚タ迅疾ナレハ、病毒侵入ノ前ニ及テ之カ豫防ノ方法ヲ講ゼサレハ、一旦臍ヲ噛ムモ及ブ可カラス、再ビ壬午〇文政五年(紀元二四八二年)。戊午〇安政五年(紀元二五一八年)。ノ轍ヲ蹈ムニ至ランコトヲ慮リ、虎列刺病豫防法心得ト養生法吐瀉物洗淨法トヲ草シテ上呈セリ。是レ養生法等ハ、各人一身ノ手當ヲ諭シ、豫防法心得ハ、警視本署及ヒ地方官吏ノ着手順序ヲ示セル者ニシテ、彼此相傳テ毒焰ヲ消滅スルノ備ヲ成サ令ンコヲ欲スルナリ。即チ決

判アリテ、養生法等ハ第五號ヲ以テ八月廿四日（明治十年（紀元二五三七年））ニ報告シ、豫防法ハ本省（内務省）。乙第七十九號ヲ以テ廿七日（明治十年（紀元二五三七年））八月。ニ公達セリ。已ニシテ九月五日（明治十年（紀元二五三七年））。ニ至リテ、神奈川縣下ニ二人ノ虎列刺ニ罹ルモノアリ、初メ縣官ハ之ヲ疑似症ナリト認メシガ、後チ醫員ノ診斷ニ因リテ、其眞症タルヲ決セリ。而シテ同縣報スル所ノ醫案ニ據レハ、此二人ノ該症ニ罹リシハ獵師町（武藏國橫濱市。）ニ一娼アリ、又伊勢町（武藏國橫濱市。）ニ一女子アリテ、同ク亞國ノ三番舘ニ往キ焙茶ノ業ヲ執リシニ、舘中ニ於テ發病シ、各之ヲ其家ニ傳ヘテ病毒流播ノ基ヲ致セリ。然ラハ廈門ヨリ該舘ヘ航載スル物品中ニ毒芽ヲ含有シ、更ニ舘内ニテ釀散セシモノナラント云フ。長崎縣（肥前國。）ニ於テハ九月上旬（明治十年（紀元二五三七年））。ヨリ港内大浦及ヒ浪ノ平町ニ流行シテ、遂ニ蔓衍ノ勢ヲ逞フス。其病源ハ各國軍艦及ヒ諸船舶ノ爲ニ艀艇ヲ掉スヲ以テ業トセル一壯夫ノ之ニ罹リテ斃レタルヲ初トスト、本地病院報告中ニ記載セリ。且海軍管人ノ長崎（肥前國。）ニ於テ目擊スル所ヲ傳聞スルニ、九月六日（明治十年（紀元二五三七年））。ニ英艦ニ虎列刺患者アリ、實ニ傳播ヲ恐ル、交際ニ注意ス云々ト普國士官ノ話アリシガ、八日（明治十年（紀元二五三七年））九月。ニ至テ碇泊英國ノ軍艦中ニ半バ其國旗

ヲ低フスルモノアリ、因テ直チニ尉官一名ヲ英艦ニ遣リ、其所以ヲ尋問セシニ、一名ノ水夫虎列刺病ニ罹リ斃ルヽガ爲ナリト對ヘリ。其後該艦ヨリ艀艇二艘ヲ下シ、士官水夫等乘組ミ、大浦（肥前國。）山地ニ於テ三聲ノ砲響アリ。是埋葬吊禮ノ式ニシテ、蓋シ其水夫ヲ埋葬セルモノナルベシ。而シテ本港ノ感染者アルハ、該埋葬地近傍ヨリス。又是ヨリ先キ英艦ニテ該病ノ爲ニ斃ルヽモノ十三四名アリト云フ。此兩報ヲ合セ考フルニ、橫濱（武藏國。）長崎（肥前國。）ハ各其病源ヲ殊ニスルカ如シト雖モ、其實ハ先ツ長崎（肥前國。）ニ入リ、然ル後チ同港（長崎港。）ヨリ橫濱（武藏國。）ニ傳播セシ者ナラン カ、未タ測ル可ラサルナリ。

東京ニ於テハ九月十四日（明治十年（紀元二五三七年））。始テ牛込早稻田山吹町（内。）市等ニ此病ヲ發セシカハ、該患者施治ノ醫員ヲ召シ、親シク其患狀ヲ尋問セリ。其後チ本所（内。）市品川（藏國。）武濱町（本橋區。）市港町（京橋區。）市本芝（芝區。）市内等ニ於テ、漸次ニ發病スル者アリテ、遂ニ府下各所ニ蔓延スルニ至ル。其病源ハ、或ハ小網町（内。）日本橋區ノ橫濱通船ヨリシ、或ハ橫濱（藏國。）武ト往來セル羽田村（藏國。）武ノ漁船ヨリスル等、傳播スル處一ナラス。又千葉縣ニ於テハ、十三日（明治十年（紀元二五三七年））九月。ヨリシ、山梨縣ハ廿四日（明治十年（紀元二五三七年））九月。ヨリシ、茨城縣ハ廿六日（明治十年（紀元二五三七年））九月。埼

玉縣ハ廿九日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。群馬縣ハ十月三日〇明治十年(紀元二五三七年)九月。廿八日ニ始レリ。其原由埼玉茨城ハ、東京ヨリシ、千葉ハ橫濱ヲ距ル一葦ノ間ニ濱シ、山梨群馬長野ハ蠶絲ヲ業トスル者、及ヒ商賈ノ常ニ橫濱東京ニ往來スルアレハ、此諸縣モ恐クハ神奈川縣ヨリ傳播セシモノナルベシ。而メ橡木縣ハ、十月六日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニ群馬ヨリ再傳セリ。其他福島縣ハ九月廿六日、〇明治十年(紀元二五三七年)九月。靜岡縣(縣塚港)ハ廿九日、〇明治十年(紀元二五三七年)九月。愛知縣(知多郡)ハ十月六日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリセリ。其路線ニ就キテ之ヲ考フレハ、靜岡三重愛知ノ如キハ、橫濱ヨリ直達シ、他ノ地方ハ東京ヲ經テ傳播セシ者ナラン。其長崎縣ヨリ傳播セシ地方ハ、鹿兒島縣九月十七日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニ發シ、大坂府及ヒ兵庫縣廿二日〇明治十年(紀元二五三七年)九月。ニシテ、開拓使ハ廿五日〇明治十年(紀元二五三七年)。堺縣ハ十一月一日、〇明治十年(紀元二五三七年)。高知縣ハ十日、〇明治十年(紀元二五三七年)十一月。十皆大坂ヨリ再傳シ、青森ハ二十日、〇明治十年(紀元二五三七年)十一月。秋田ハ廿七日、〇明治十年(紀元二五三七年)十一月。ニ於テ、箱館ヨリ再傳セリ。其他石川縣ハ十月二日、〇明治十年(紀元二五三七年)。岡

山島根ノ二縣ハ六日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ヨリスト雖モ、其感染ノ由ル所ヲ詳ニセサルナリ。

此ノ如ク、漸ク各地ニ傳染セルモ、未タ其慘毒ヲ極ムルニ及バサリシニ、西南ノ賊徒已ニ平定シテ、逐次征討ノ諸軍凱旋スルニ際シ、嘗テ長崎〇肥前國。ヨリ鹿兒島〇薩摩國。ニ浸染セシ病毒ノ、兵士間ニ撒布スルモノ、船中ニ稠聚スルニ因リテ、大ニ其蕃殖ヲ促カシ、十月一日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニ至リ隅田兵庫熊本豐島敦賀東海佳江平安ノ諸船、一時ニ神戸〇攝津國。ニ湊リテ、病毒ヲ齎ラス者少ナカラス。和歌浦船稍後レテ至リ、就中患者尤多ク、既ニ兵員ノ死亡スル者六名、瀕死者五十名許、艀ニ移スヤ直チニ死スルモノ十六名、上陸ノ後ニ發スル者四十名ニ及フ。此時ヤ神戸〇攝津國。ノ危險ナル、實ニ戰地ノ如ク、或ハ陸地ノ命令ヲ肯ンゼズ、銃ヲ擧ケテ陸梁シ、悍然上陸スルノ兵士アリテ、檢疫法行ハレス、遂ニ上陸ノ後ニ於テ、大ニ病毒ヲ神戸兵庫〇攝津國。ニ撒布シ、行々京阪滋賀ノ間ニ傳播セシメタリ。是ヨリ先キ九月廿八日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヲ以テ豫メ兵隊患者着港ノ際ニ於テノ處分ヲ陸海軍二省ニ諮問セシカ、未タ其回答有ラザルニ、兵庫京都滋賀ノ地方ヨリ、比々其慘狀ヲ概報スルニ至レリ。三日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ニ

太政大臣ヨリ陸海兵隊ノ凱旋スル海路ハ狢ケ谷、陸路ハ箱根〇相模國。ニ於テ派出ノ醫官檢查ヲ遂ケ、時宜ニ因リ滯船ヲ命シ、進行ヲ止メシムル等、陸海軍兩省ト協議シ、嚴密ニ豫防法ニ着手スヘキヿヲ達セラル。是ニ於テ本局〇衞生局。御用掛リ一名屬官一名ヲ東海ノ諸縣ニ派出シテ、通行ノ軍醫ト地方官吏トノ間ニ協議シ、且ツ地方官ニ豫防法ヲ指諭セシム。陸軍省ヨリモ大尉一名ヲ使シテ凱旋ノ大佐以下各隊長ニ諭達シ、凱旋ノ諸員傳染病ニ罹ル者アラハ、速ニ地方官ニ協議シ、其ノ地ニ駐メテ治療ヲ加ヘ、傳染ノ患害ナカラシム。大坂陸軍事務局ニ於テハ、是日〇明治十年(紀元二五三七年)十月三日。ヲ以テ大會議ヲ起シテ駐兵ノ事ヲ議定シ、姑ク兵隊ノ陸路行軍ヲ駐メテ檢疫幷豫防ニ從事セシム。爾後病勢稍〻衰フト雖モ、十月〇明治十年(紀元二五三七年)。中旬ヨリ陸軍兵士ノ東京ニ於テ發病スル者續々トシテ生シ、十九日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリ小日向〇市内小石川區。ニ臨時副病院ヲ開キテ該患者ヲ治療シ、又廿五日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ヨリシテ新撰旅團兵ニ發病數十人アル者、皆西南ヨリ病毒ヲ齎ラシ歸ル者ニシテ、更ニ府中流行ノ勢ヲ熾ニセリ。其他福岡・大分ノ二縣ハ、十月二日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリ、愛媛・山口ノ二縣ハ三日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ヨリ、廣島ハ四日、〇明治十年(紀元二五三七年)十月。岐阜ハ十一日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ヨリ發病ス。是レ皆西南凱旋ノ兵士及ヒ軍夫ノ傳播スル所ナリ。

各地ノ病勢ノ盛衰ト死亡ノ比例トハ、下ノ表面ニ於テ詳明ナリト雖モ、今其概略ヲ擧ゲン。神奈川縣ハ、九月五日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリ廿一日〇明治十年(紀元二五三七年)九月。ニ至ルマテニ患者百九十四人ニシテ、其內四十九人死亡セシガ、追日感染スル者蔓衍シテ、十月二日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニハ新舊患者二百十四人ノ內、廿四人ノ死者アリ。是ヲ尤旺盛ノ時トス。十一月〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリ漸ク衰ヘ、十二月十六日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニ至リテ管下各地トモ復タ新患者アルナシ。長崎縣ハ、九月十三四日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニ及ヒテ新舊患者三百五十四人中死亡十四人アリ。廿五六日〇明治十年(紀元二五三七年)九月。ニ至ルマテハ每ニ三百人以上ノ新患者アリシガ、漸ク衰ヘ、十月三四日〇明治十年(紀元二五三七年)。百人ニ止リ、後七八十人ニ下リ、十二月廿日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニハ舊患者盡ク治シテ、避病院中亦一人ノ患者ナシ。東京ハ九月十四日〇明治十年(紀元二五三七年)。ヨリ廿三日〇明治十年(紀元二五三七年)九月。ニ至ルマテ患者ノ數二十六人ニ至リ、其內十一人ノ死亡アリ。十月一二日〇明治十年(紀元二五三七年)。ニハ新舊患者百六人中十人死亡シ、遂ニ蔓衍シテ十八九日〇明治十年(紀元二五三七年)十月。ニハ

二百十二人中死亡二十二人アリ。其尤多キハ廿六七日（明治十年（紀元二五三七年））ノ間ニシテ、毎ニ新舊患者二百人以上ニ上リシガ、其後漸ク衰微ニ赴ケリ。是ヨリ先キニ警視本署ハ、市谷（牛込區）向岡（本郷區）ノ二所ヲ十一月一二日（明治十年（紀元二五三七年））ノ四箇所ニ、避病院ヲ設置セシカ、廿一日（明治十年（紀元二五三七年））十月。ニ至リ、逐日撲滅ノ効ヲ得ルヲ以テ、市谷（牛込區）向岡（本郷區）ノ二所ヲ閉鎖シ、綠町（本所區）品川（原郡）ハ、沿海地方ニ感染アルカ爲ニ、姑ク存置セリ。又陸軍省小日向臨時副病院ノ患者ハ、十一月（明治十年（紀元二五三七年））ノ仲旬ニ至リ、日ヲ追ヒ減少シテ、更ニ新患アルコトナク、其在院ノ者亦唯衰弱ヲ遺スノミニテ、傳染ノ患無ケレハ、之ヲ本病院ニ移シ、廿一日（明治十年（紀元五三七年））十一月。ニヲ以テ該院ヲ閉鎖セリ。其後府下（東京府。）ノ景況ハ、十二月（明治十年（紀元二五三七年））ニ至リテ益々衰ヘ、新患者死亡併セテ無キノ日アリシカ、廿八日（明治十年（紀元五三七年））十二月。ニ於テ一人ノ新患者アリテ死亡セリ。鹿兒島縣ハ、九月十七日（明治十年（紀元二五三七年））ニ起リ、一時ニ四十人ノ患者アリテ、其死亡十一人ニ及ヒ、日ニ蔓延シ、十月廿日（明治十年（紀元二五三七年））。ヨリ廿四日（明治十年（紀元二五三七年））十月。ニ至ル五日間ニハ、新舊患者二百七十三人ニシテ、死亡七十二人、同（明治十年（紀元二五三七年））十月。廿七日ヨリ十一月三日（明治十年（紀元二五三七年））。

ニ至ルノ間ニハ、三百六十餘人ニシテ、死亡五十餘人アリ。此後ハ漸ク衰退シ、十二月（明治十年（紀元二五三七年））。ニ至リテ消滅ノ景況ヲ見ハセリ。大坂府ハ、九月廿二日（明治十年（紀元二五三七年））。ニ發シ、追日蕃殖シ、十月（明治十年（紀元二五三七年））。中旬ニハ一日ニシテ百三十五人ノ新患者アリ、舊患者ヲ併セテ三百七十八人、內九十八人ノ死亡アルニ至ル。是ヨリ廿七八日（明治十年（紀元二五三七年））十月。ニ至ルマデハ、一日ノ新患者大抵七十人ヨリ多カラス、三十人ヨリ少ナカラザリシガ、十一月三日（明治十年（紀元二五三七年））。以後ハ十人ヨリ上ラス、病勢頓ニ衰フト雖モ、十一月（明治十年（紀元二五三七年））。ニ至リテ、未タ全ク撲滅ニ至ラス、其當初ヨリ十二月三十一日（明治十年（紀元二五三七年））。マデノ總計千六百三十六人ニシテ、死亡千二百三十九人トス。兵庫縣ハ、九月廿二日（明治十年（紀元二五三七年））。ヨリ十月三日（明治十年（紀元二五三七年））。マテノ間ニ、患者總計廿三人、內死亡十人アリシカ、凱旋兵士ヲ入港セシヨリ、該兵ノ患者、船中ノ發病ト上陸ノ後ニ發病スル者トヲ合セテ三百四十九人ニ及ビ、其後モ日ニ百人以下ノ新患者アリ。是ヨリ土人ノ傳染モ亦增加シ、多キ日ニハ廿七人ノ感受者アリ。熊本縣ハ、九月廿三日（明治十年（紀元二五三七年））。ヨリ十月三日（明治十年（紀元二五三七年））。マデニ六十人ノ患者ヲ生シ、此中死亡三十一人アリシガ、十一日（明治十年（紀元二五三七年））十月。ヨリ七日間

ニハ、新患者三百八十人中、死亡二百十六人、次ノ三日間ニハ、四百五人中死亡九十人、廿五日（明治十年（紀元二五三七年）十月。ハ、一日ニシテ新患者九十二人、新舊患者ノ死亡四十六人アリ。當初ヨリ十二月廿五日（明治十年（紀元二五三七年）十月。ニ至ルマデノ總計ハ千六百九十八人ニ上リ、死亡ハ九百八十四人トス。其後稍々衰勢ニ赴クト雖モ、十一月十四日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至ルマデハ、新ニ感染スルモノ、一日ニシテ或ハ上リテ六十ニ至リ、或ハ下リテ十七ニ至ル。而シテ更ニ十位ヨリ下タル者二日アルノミ。初メ蔓延ノ勢アリシニ、十月十八日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至ルマテニ十四箇所ノ避病院ヲ設ケシガ、十一月廿九日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至リ復タ新患死亡ノ無キヲ以テ、熊本假病院一箇所ヲ除クノ外、悉皆破院セリ。

千葉縣ハ、九月十八日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至ルマテ、新患者疑似症ヲ併セテ三十九人、内死亡八人アリシカ、後盛衰常ナラス。十月三日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ三十七人ノ新患アリ、舊患ヲ併セ六十九人ニシテ、死亡十七人アリシヲ以テ、尤盛ナリトス。其他新患十六七人ヨリ上ラス。又一二人ニ止ルノ日アリ。然レトモ漁民ノ海上ニテ感發スルモノ絶ヘス。上總國ハ、十二月廿一日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至リテ、始テ新感ナク、安房國モ同（明治十年（紀元二五三七年）十二月。廿一日ニ止レリ。開拓使ハ、九月廿五日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ至ルマデノ患者百四人ニ止リ、其後消滅ノ景況ニテ、同月（明治十年（紀元二五三七年）十月。中ニ避病院ヲ閉鎖セシカ、該所ノ患者ハ、元ト西南凱旋ノ屯田兵及ヒ豫備兵ヨリ發シ、頗ル惡症ニシテ、經過急劇、死亡七十八人ニ至レリ。福岡縣ハ、十月廿一日（明治十年（紀元二五三七年）。ヨリ廿三日（明治十年（紀元二五三七年）十月。ニ至ル三日間ニ於テ、新感六十四人、新舊患者ノ中、死亡廿六人アリ。此際ヲ以テ尤旺盛ノ日トス。十一月廿五日（明治十年（紀元二五三七年）。以後ニ至リテハ、復タ新患者アルナシ。京都府ハ、凱旋兵士ニ新患者アルヲ以テ、十月一日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ始リ、其後ノ感者モ多クハ兵士ニシテ、土人ニ傳染スルモノ七十人ニ止ル。三十一日（明治十年（紀元二五三七年）十月。以後ハ復タ發病者アルナシ。滋賀縣モ、同日（明治十年（紀元二五三七年）十月一日。ニ凱旋兵士ノ新患者アリシカ、其土人ニ傳染スルハ三十六人ニシテ、十一月三日（明治十年（紀元二五三七年）。ニ過キスト雖モ、其眞ノ症ニハ劇性ニシテ、一家ニ患者五人ヲ生シ、其三人ハ死亡スルモノアリ。其他ノ地方ノ總計、福島縣ハ疑似ノ症三十九人、山梨縣ハ眞疑併セテ廿一人ニシテ、十月（明治十年（紀元二五三七年）。下旬ニ止リ、愛媛ハ百廿六人ニ

シテ、十一月四日（○明治十元二五三七年（紀）。）ニ止リ、大分ハ百五十五人、高知ハ百八人、堺ハ二百二十四人、三重ハ六十九人、茨城ハ六十人、青森ハ二十四人、石川ハ廿九人ニシテ、十一月（○明治十元二五三七年（紀）。）下旬ニ止リ、山口ハ百二十三人、廣島ハ八十六人、静岡ハ六十九人ニシテ、十二月（○明治十元二五三七年（紀）。）上旬乃至中旬ニ止ル。岡山縣ハ百五十三人ニシテ、十二月（○明治十元二五三七年（紀）。）ノ晩季ニ止リ、和歌山ノ如キハ、延キテ十一年（○明治二五三八年（紀）。元）ニ至ル。夫ノ橡木・岐阜・群馬・長野・秋田・愛知・島根・新潟ノ諸縣ノ若キハ、多キハ九人、寡キハ二人ニシテ、復タ其盛衰ヲ列スルニ足ラス。又兵士ニ至リテ、陸軍ハ京都・鹿兒島・滋賀・愛媛・廣島・岐阜等ノ各縣ニ於テ發病幷死亡スルモノ少ナカラスト雖モ、兵庫ニ於ケル者七百三十七人ニシテ、是ヲ多キノ極トシ、其寡キモノ岐阜ニ於ケル一人ノミ。又十月十九日（○明治十年（紀）元二五三七年）。ヨリ小日向臨時副病院ヲ開キテ患者ヲ治療ス。本日（○明治十年（紀）元二五三七年）十月十九日。ヨリ十一月八日（○明治十年（紀）元二五三七年）。ニ至ルマテ、其總計九十二人ニシテ、死亡五十一人アリ。海軍ハ浦賀・横須賀（○以上相摸國。）・品川（○武藏國荏原郡。）ノ避病院ニテ治療ヲ加フルモノ、九月七日（○明治十元二五三七年（紀）。）ヨリ十月十三日（○明治十元二五三七年（紀）。）ニ至ルマテ五十七人、内死亡十六人アリ。又三菱會社ハ、鹿兒島（○薩摩國。）神戸（○攝津國。）横濱（○武藏國。）函館・札

幌（○以上北海道。）諸地碇泊、幷航海中併セテ五十九人アリ。外國人ノ内地ニ於テ感受スルモノハ、神奈川（○武藏國。）ニテ五人、東京ニテ二人、而シテ前日ノ長崎港（○肥前國。）ニ於テ海軍管人ノ見聞セシ者ノ如キハ與カラザルナリ。今各地方ヲ平均シテ、其病勢最熾ナルノ期ハ、十月（○明治十元二五三七年（紀）。）ノ初旬ヨリ十一月（○明治十元二五三七年（紀）。）ノ初旬ニ渉レリ。又一般ノ患者及死亡ニ就キテ其劇易ヲ比較スルニ、大坂府熊本縣ヲ以テ最甚シトス。蓋シ熊本ハ、兵亂ノ餘、風雨ニ露宿シ、飯食ノ不良ナル者多キニ際シテ此傳染ヲ承クルカ爲ナルベク、大坂ノ如キニ至リテハ、亦船舶ノ輻湊シテ病毒ノ衢路タルカ故ナルベシト雖モ、之ヲ其隣境兵庫堺ノ兩縣ニ比例スルニ、其患者非常ニ夥シク、且ツ死亡ノ數モ殆ト患者五分ノ四ニ居レリ。是レ何等ノ理由アリテ然ルカ得テ詳ニスル能ハサルナリ。

本局（○衛生局。）ハ、流行ノ地方ヨリ二十四時間毎ニ本省（○内務省。）ニ報知セル患者死亡治愈ヲ採錄シテ、日ニ之ヲ各種ノ新聞紙ヲ以テ報告シ、又一週間コトニ患者ノ眞疑治愈死亡治療中等ヲ區別シテ、毎週表ヲ製シ、之ヲ太政官ニ呈セリ。九月廿二日（○明治十元二五三七年（紀）。）第六號報告虎列刺治方概略ヲ發行シ、又驛遞局ノ照會ニ因リテ、三菱會社ノ船中ニ在リテ虎列刺病ニ罹リ死亡セシ者アル片ノ

處分五箇條ヲ定メテ回答セリ。十月四日（明治十年（紀元二五三七年））。本省（内務省）。乙第九十一號ヲ以テ、内國郵船商船出入港取締乙第七十九號ニ照準シテ、地方限リ處分シ、外國船幷居留地ハ、豫防方心得第六條以上ノ趣ヲ以テ、各領事及ヒ醫官ヘ、内國軍艦幷兵員乘組ノ船舶ハ、陸海軍醫官隊長船長ヘ協議シテ處分スヘキ旨ヲ達シ、十七日（明治十年（紀元二五三七年）十月。）内國郵船幷回送船ノ到達スル地及ヒ通港滯船ノ地ニ於テ、患者或ハ死亡アル片ハ、之ヲ處置シ、尋テ乘客貨物等ニ消毒法ヲ行ヒ、港外適宜ノ港ニ退去、五日間滯泊シ、消毒中ノ標旗ヲ建テ、然ル後ニ出港セシメ、其船ノ着港スベキノ地ヘ豫メ電報ヲ以テ通知スベキヿヲ、開拓使、大坂府、神奈川、兵庫、長崎、新潟ノ諸縣ニ達セラル、ノ處分ヲ爲シ、又驛遞局ヘ照會シテ、其由ヲ三菱會社ニ通知シ、且ツ船中消毒法心得五箇條ヲ下付セリ。十九日（明治十年（紀元二五三七年）十月。）本省（内務省。）ヨリ陸軍省ヘ通議スルニ、内國軍艦幷陸海軍用船ヲ除クノ外、長崎神戸其他ヨリ歸港ノ郵船中ニ西南凱旋ノ兵員アル片ハ、先ツ相州追濱沖ニ於テ軍醫檢疫ヲ受クベシト、神奈川縣幷三菱會社ニ達スルヿヲ以テス。廿三日（明治十年（紀元二五三七年）十月。）三菱會社ノ船舶、本春（明治十年（紀元二五三七年）。）以來東西奔走、日夜寸暇ナク、船中ノ掃除ニ

不注意ノ聞ヘアレハ、各地着港ノ上ハ、悉皆貨物ヲ陸上ケシ、船底ノ砂石ニ至マテ之ヲ交換シ、清潔ニ掃除シテ、船窓ヲ放開シ、十分ニ日光大氣ニ晒シ、病毒ノ包藏ヲ絶タシムベキノ嚴達アランコトヲ、驛遞局ヘ照會ス。是月（明治十年（紀元二五三七年）十月。）第十號雜誌ヲ頒布シテ、船中心得及ヒ消毒藥用法ヲ示シ、又横濱司藥場試藥師ハ、神奈川縣ヨリノ依頼ヲ受ケ、飲料水ヲ分析シテ其能毒ヲ表セシガ、尋テ東京大坂ノ司藥場モ、咸ナ府廳ノ依頼ニ因リテ同ク分析ニ從事セリ。抑飲水ノ不純ナル、病毒ノ媒酌タルモノ多シトス。此擧ヤ、三地方ノ病毒ヲ撲滅スルニ於テ與リテ力アリトス。本局（衛生局。）ノ此際ニ方リ、人家用水說ヲ譯出シ、第十一號雜誌ニ記載シテ頒布スルモノ亦之ガ爲ナリ。

——明治十年惡性虎列刺病流行記事（東京醫事新誌所收。）

〔參考〕

明治十年（千八百七十七年）ノ流行ハ、明治十年（紀元二五三七年）九月上旬、長崎（肥前國）横濱（武藏國）ノ兩地ニ發生セシヲ始トシ、之ヲ第三回ノ流行トス。

是ヨリ先キ虎列刺ノ鄉國ニ於テハ、又大ニ蔓延ノ勢アリテ、已ニ千八百七十二年（明治五年紀元二五三二年）ニ在リテハ、獨露ニ進入シ、次テ匈牙國ニ及ホシ、千八百七十二年（明治五年紀元二五三二年）乃至七十三年（明治六年紀元二五三三年）帝都時代ノ疫癘

年)ノ間猖獗ヲ同國ニ恣ニシテ、四十四萬人ヲ犯シ、(第六國際衞生及ヒデモグラヒイ會バベス報告)此年又佛國白耳義國ニモ流行セリ。千八百七十七年(〇明治十年紀元二五三七年)七月初旬ヨリハ清國厦門ニ虎列刺病甚シク流行シ、上海ニモ亦類似ノ下痢病アリテ、土人中之ニ罹ル者頗ル多シトノ報アリシカ、九月(〇明治十年紀元二五三七年)ニ入リテ、一方ハ厦門(〇清國)長崎(〇肥前國)ニ入港セル英國軍艦ノ死屍ヲ大浦(〇肥前國)ニ埋葬(此前諸艦ニ於テ其國旗ヲ檣半ニ揭ケシヨリ、其所以ヲ尋問セシニ、一名ノ水夫虎列刺ニ罹リテ死セシカ故ナリト對ヘシカ、此埋葬ノコトアリ)シタル後、同地ニ患者ヲ續發シテ遂ニ長崎港(〇肥前國)内ニ蔓延シ、一方ニ於テハ、横濱(〇武藏國)三番館(此前厦門ヨリ該館ニ輸入セシ貨物アリテ、其内ニ病毒ヲ含有セシトノ説アリ)ニ通ヒテ焙茶ノ業ヲ執レル老媼二人、其館内ニ發病セシヨリ、漸次京濱兩地ニ病毒ヲ傳播シ、東西相呼應シテ、遂ニ此流行ヲ爲セリ。

——虎列刺病流行事蹟報告書

明治十年(〇紀元二五三七年)九月、惡性虎列刺病内國各地ニ流行セリ。此病ヤ、亞細亞霍亂東印度吐瀉病等ノ數名アリテ、其始メ東印度ノ海濱及安日(ガンヂス)ノ河邊ニ生シ、亞細亞ニノミ限レル病ナルガ爲ニ此名アリシガ、漸ク轉遷シテ諸國ニ蔓延シ、終ニ全世界ニ傳播シ、今ヤ歐米各國檢疫規則中惡性病ノ最タルニ至レリ。抑此病ノ内地ニ入ルハ、文政五年壬午(〇紀元二四八二年)八月ニ始ル。是ノ月(〇文政五年紀元二四八二年八月)山陰山陽二道ニ厲氣流行シ、九月(〇文政五年紀元二四八二年八月)ニ至リテ益々盛ニ、覃テ畿内ニ及ヒ、或ハ闔戸傳染シ、甚シキモノハ門ヲ滅スルニ至ルアリ。江戸ノ醫師、其証候ヲ考ヘ、斷シテ惡性虎列刺病トセリ。是ヨリ前二年(即チ文政三年)和蘭領瓜哇(ジヤハ)島跋太肹亞(バタヒヤ)ノ地、惡性虎列刺病流行シテ、翌年(即チ文政四年)殊ニ甚シク死亡勝テ數フベカラズ。蘭醫勃微兒(ボーイル)ト云フ者、病屍ヲ解剖シ、其病源ヲ明ニシテ治法ヲ定ム。之ガ爲ニ全治スル者甚タ多カリシト云。壬午(〇文政五年紀元二四八二年)ノ春、和蘭人貌魯莫火弗(ブロムホフ)ノ入貢スルヤ、勃微兒ノ定メシ治法ヲ齎シ至ル。江戸醫師ニ之ヲ得テ譯述スルモノアリ、題シテ虎列刺沒爾爸斯(モルビユス)説ト曰フ。今日ニ在リテ其始テ本邦ニ傳播スル所ノ原因ヲ考フルニ、之ヲ詳カニスルヿヲ得ズト雖モ、當時外國船ノ我カ長崎港(〇肥前國)ニ進ムモノハ獨支那和蘭ニ過ギザレハ、之ヲ蘭船ノ輸入スル所ト曰フモ誣言ニ非ザルベシ。又故老ノ説ヲ聞クニ、其後二十年許ニシテ、東奥ノ海濱及ヒ上野下野ニ行ハレシコトアリシト。然ルニ其原因及ヒ症候ノ如キハ、當時ノ記錄ヲ具ヘザルヲ以テ、復タ考フベキモノナシ。後チ安政二年乙卯(〇紀元二五一五年)ノ歲、和蘭風説書ニ、瓜哇及近島風雨不順、虎列刺流行シ、歐洲地方魯西亞英吉利ノ營スル所、水潦累ニ至リ、士卒困墊シ、亦是ノ疾ニ中リテ死亡スルモノ甚ダ多シトアリシカ、五年戊午(〇安政〇紀元二五一八年)六月ヨリ我カ長崎港(〇肥前國)ニ行ハレ、七月(〇安政五年紀元二五一八年)ニ至テ大ニ江戸ニ流行セリ。當時江戸人ノ記スル所ニ據ルニ、八月上旬(〇安政五年紀元二五一八年)ヨリ中秋(〇安政五年紀元二五一八年八月)ノ頃ニ至ルマテ、最モ盛ニシテ、毎日ノ死亡千ヲ以テ數フヘク、下浣(〇安政五年紀元二五一八年八月)ニ至ルマテ爲ニ斃ルヽ者殆ト十萬人ニ及フト云。又其他ノ地方ニ於テモ、京攝ハ八月(〇安政五年紀元二五一八年)ニ始リ、蝦夷地ハ七月(〇安政五年紀元二五一八年)ヨリ始リテ、死亡頗ル多シトゾ。斯クテ時季ノ冷氣ニ向フニ隨ヒ、一時ハ屏息

セシモ、翌歳（〇安政六年紀元二五一九年）ニ至テ其毒芽再ビ發シ、延テ各地方ニ及ヒ、甚シキ慘毒ヲ極メタリ。時ニ東國ニ於テハ痧病ト名ケ、西國ニテハ三日虐ト唱ヘリ。痧病トハ支那人ノ目スル所ニシテ、蓋シ南方人ノ暑月沙磧ヲ履ミテ中テラルヽ所ヨリ名ヲ命シ、虐トハ卒倒ノ義ニシテ、邦人ノ俚語ニ出ツ。其國音ノ虎列剌ト相近キモ又奇ト謂フベシ。是時ニ當リ幕府私ニ鎖港ノ禁ヲ弛メ、歐米諸人ノ我濱港ニ到ル者少ナカラザレハ、其病源亦是レニ由ルナルベシ。而シテ今其毒芽ヲ輸入スル、何レノ國ナルヲ定ムベカラズト雖モ、乙卯（〇安政二年紀元二五一五年）以來歐米各地流行ノ餘毒ヲ齎シ至ル者アルハ、斷シテ疑ヲ容ル可カラス。其始テ感染スルハ何レノ港ニ在リシヤ知ル可カラズト雖モ、其地脈ヲ以テ之ヲ推スニ、先ツ長崎（〇肥前國）ニ入リテ、京攝ニ及ビ、江戸箱館ノ如キハ別ニ傳播シ、遂ニ翌歳（〇安政六年紀元二五一九年）ニ至リテ各地ニ撒布スル者ナランカ。

夫レ惡性虎列剌病ノ毒タル、單ニ一地方各自ノ氣候瘴癘ニ因リテ一時釀發スルノ類ニ非ズ、心ズ其傳播ノ由テ基ク所アリ。故ニ歐米諸洲ニ於テモ亦之ヲ長懼スル殊ニ甚シク、其豫防救治ノ方實ニ至ラサル所ナクシテ、既ニ我ガ明治七年（〇紀元二五三四年）ニ當テ、歐羅巴亞細亞ノ二十一國ヨリ、之カ爲ニ澳國維也納府ヘ代議士ヲ派遣シ、七月一日（〇明治七年紀元二五三四年）ヨリ八月一日（〇明治七年紀元二五三四年）ニ至ル迄會議ヲ開キ、結局一箇ノ會議所ヲ同府ニ設立シ、時々ノ景況ニ隨ヒ、其方法ヲ立テントスルニ決セリト。以テ其該病ノ爲ニ心ヲ盡スノ一斑ヲ見ルニ足ル可シ。

——明治十年惡性虎列剌病流行記事

今般本縣（〇神奈川縣。）下第壹大區壹小區橫濱宮崎町及港町（〇武藏國。）ニ於テ、虎列剌病類似之症ニ罹リ死去ル者三名程有」之、右ハ眞正傳染症ニ可」有」之哉否ハ、未タ判然不」致ル得共、此際別テ注意ヲ要スヘキ儀ニ付、夫々豫防手當罷在ル。此段不」取敢」及二御通知一ル也。

明治第十年〇紀元二五三七年。九月十五日　神奈川縣權令野村靖印

東京府知事楠本正隆殿

本縣（〇神奈川縣。）下第一大區橫濱濱港町及宮崎町（〇武藏國。）ニ於テ、虎列剌病類似之症ニ罹リ死去ル者有」之旨、一昨十五日（〇明治十年（紀元二五三七年）九月。）付ヲ以、及二御通知一ル處、其後引續右類似之症ニ罹ル者有」之、右ハ全ク眞正傳染症ノ虎列剌病ニ相違無」之趣管下公立十全病院雇米醫セメンス氏診斷ル仁付、兼テ內務省より達相成ル虎列剌病豫防心得ニ準據、夫々手配致ル。此段更ニ及二御通知一ル也。

十年〇明治〇紀元二五三七年。九月十七日　神奈川縣權令野村靖印

東京府知事楠本正隆殿

九月廿日（〇明治十年紀元二五三七年）

神奈川縣管內橫濱港（〇武藏國。）於テ、虎列羅傳染病流行之趣、該縣より通知有」之、自

然當管内ニ傳染之程モ難レ計、就テハ病院本分局幷ニ區醫同出張所等ハ、兼テ相達置ク旨モ有レ之ニ付、速ニ便宜之場所ヘ申出、治療受ケ𠮟樣可レ致旨、布達𠮟事。

但、病毒消滅藥之義ハ、病院本分局及ヒ區醫同出張所等於テ、可レ致二付與一筈ニ付、便宜之場所ヘ申二出一、受取可レ申、尤代價自辨難レ致モノハ、無代價付與可レ致事。

右消毒藥買上ケ、幷醫員ニ分賦方ハ、病院長ヨリ取調、別途ニ可二相伺一𠮟也。

九月廿日(〇明治十年紀元二五三七年)發令

區戸長

今般甲第八十七號布達𠮟ニ付テハ、每區内巡視之上、傳染之徵候アル病者見聞𠮟カ、又ハ病者ヨリ届出アルトキハ、速ニ最寄醫員(病院本分局及ヒ區醫同出張所。ニ協議ヲ遂ケ、病毒消滅之方法、可レ致二注意一此旨諭達𠮟事。

九月廿一日(〇明治十年紀元二五三七年)區長ヘ直達

虎列剌病流行之徵候有レ之ニ付、萬一該病ニ感染之モノ、汚穢物取捨等難二行屆一𠮟テハ、獨リ該家之難義而已ナラス、近接之者ヘ傳播ヲ釀シ、不二容易一義ニ付、自然右樣之場合ニ於テハ、施治之醫員ヲ、即時其地主又ハ差配人等ヘ、汚穢物取捨方可二相通一筈ニ付、各區務所ヨリ地主幷差配人等ヘ懸篤相示置、實際差支無之樣、取計可レ有レ之、此段及二通達一𠮟也。

但、自然病勢蔓延之景況ニ至リテハ、該區務所ニテ右等世話方之モノ相定置、精々注意爲レ致度候事。

東京府庶務課

各區長戸長中

九月廿二日(〇明治十年紀元二五三七年)迭達

區戸長

虎列剌病流行之兆有レ之ニ付、右病症ニ罹ルモノ治療方、及ヒ病毒撲滅等之義ニ付、每區々醫ヨリ受持區内之開業醫師ヲ集合シ、可レ及二協議一義モ有レ之ニ付、此旨醫術開業之モノヘ無レ洩相達置可レ申事。

九月廿八日(〇明治十年紀元二五三七年)

區戸長

虎列剌病流行之兆有レ之ニ付、本府(〇東京府。)病院本分局及ヒ區醫同出張所等於テ、病毒撲滅藥付與可レ致旨、甲第八十七號ヲ以及二布達一置𠮟ニ付テハ、每區務所於

テ、公立小學校及ヒ路傍便所等ヘ灌漑可レ致、且演劇場寄セ席之類、都テ人民集合之場所ヒ、各持主ヨリ最寄病院本分局若クハ區醫ヘ申出、撲滅藥灌漑ゐ樣、懇篤可レ及二諭達一ゐ事。

但、公立小學校及ヒ路傍便所ニ可二相用一分ニ限リ、病院本分局幷ニ區醫出張所於テ、無代價付與可レ致筈ニゐ事。

十月二日〇明治十年紀元二五三七年〇達

第六大區第十一大區區戸長

頃日虎列刺病流行之兆有レ之處、深川〇市内。ヘ邊於テ該病感染之者有レ之趣ニ付、今般深川富岡門前山本町三番地〇市内。ヘ當府病院臨時出張所ヲ設ケ、醫員派出治療相施候條、該病患染之モノハ、可レ成丈ケ同所ゐ入院治療受ケゐ樣、懇篤可レ及二諭達一、此旨相達ゐ事。

十月十六日〇明治十年紀元二五三七年〇達

知事　書記官　　庶務課

虎列刺病勢稍猖獗之勢ニ赴キ、既ニ深川臨時出張所ニ於テハ、看病人ゐモ傳染イタシゐニ付、愈豫防ヲ嚴ニセサレハ、蔓延之恐不レ少ニ付、深川・淺草兩出張所ノ醫局事務局共別所ニ移シ、且掛醫員及ヒ看病人之外ハ、一切病室ゐ出入被レ禁ゐ樣仕度、左之御達按共併セテ相伺ゐ也。

愛宕下〇市内芝區東京府臨時病院

深川〇市内東京府病院臨時出張所

淺草〇市内東京府病院臨時出張所

各通

醫員幷ニ看病人其他必用之人員ヲ除クノ外ハ、出張衞生掛ノ者ト雖モ、一切病室ニ出入不レ致樣、可二相心得一、此旨相達ゐ事。

十月十六日〇明治十年紀元二五三七年〇　庶務課

第六大區之内、深川〇市内〇地方之義ハ、從來井水汚濁、飲用ニ供シ難候處、貧窮之小民共、上水買入之資力無レ之ヨリ、往々汚濁之井水ヲ飲用シ、夫レカ爲メ病毒蔓延之勢モ有レ之、目下難二差置一場合ニ付、差向別紙各小區ゐ、井水飲用不レ致樣、御諭達相成度、此段相伺候也。

尙以、別紙御達相成候上ハ、小民共飲用之上水買入方差支ハ必然之義ニ付、區務所ニ於テ、兼テ窮民之戸數取調、給水之方法相設ケ可レ申候得共、差向右費用一ケ月概算金四百圓程モ可ニ相掛一見込ニ有レ之、右ハ追テ相當之課出方モ可レ有レ之候得共、一時官費ヲ以、至急御施行相成候方、可レ然哉、添テ相伺候也。

御達按

帝都時代ノ疫癘

其區內近況、コレラ病ニ感染之者多人數ニ及ヒ候處、全ク井水之汚濁ヨリ病勢增加ㇾ旨、各醫員等申出モ有ㇾ之、目下難ニ差置一場合ニ付、當分之內、神田玉川利根川等之清水ヲ用ヒ、該地之井水飲用不ㇾ致樣懇篤可ㇾ及ニ諭達一、此旨相達ㇾ事。

但、貧窮ニシテ上水買入方差支ㇾ者ハ、無代給水ㇾ條、該區務所於テ、實際取調、差支無之樣可ニ取計一事。

十月十七日（〇明治十年紀元二五三七年）

第六大區一貳三四五小區
區戶長

知事　書記官

病院深川出張所於テ、新聞紙ヘ別紙之通リ廣告致度旨申出ㇾ處、差支筋モ無ㇾ之ト存ㇾ間、伺之通リ爲ニ取計一可ㇾ然哉、相伺ㇾ也。

深川〇市內。地方近況、虎列剌病感染ノ徵モ有ㇾ之處、本月二五三七年）十月。十二三日來、俄然病者ノ數ヲ倍シ、頓ニ蔓延ノ勢ヲ加エリ。蓋シ本月（〇明治十年紀元二五三七年）十月。十一日ノ暴風雨ニ際シ、江河急漲シテ、汚水路上ニ溢出シ、或ハ病者ノ吐下物等、汚水ニ混シ、地層ヲ滲透シテ井水ニ和シ、以テ病勢增加ノ一原因トナリシ者ニシテ、今般該地方井水飲用云々ノ件、府廳ヨリ其區戶長ニ達

庶務課

セラレシ趣旨ノ存スル所ナラン歟。該病等流行ノ片ニ臨ンデ飲水如何ニ注意スルハ、豫防法中ノ一緊要事ナレハ、特リ該地方ノ人ノミナラス、各自嚴ニ謹戒セサルヘカラス。此旨廣告ス。

十月十八日（〇明治十年紀元二五三七年）
御達按伺。

庶務課

方今コレラ病流行ニ付、第一大區九小區山城町十番地〇市內ニ在ㇾ當府〇東京府。病院出張所ヲ設ケ、醫員派出病者診察爲ㇾ致ㇾ條、最寄人民便宜治療受ケㇾ樣可ㇾ致、此旨相達ㇾ事。

但、該出張所之儀ハ、患者入院不ニ相成一義ト心得ヘシ。

十月十九日（〇明治十年紀元二五三七年）

第一大區第二小區
區戶長

區戶長

去月〇明治十年（紀元二五三七年）九月。中ヨリ虎列剌病流行ニ付、本府〇東京府。病院ヨリ管內各地ヘ臨時病院ヲ設ケ、自宅ニ於テ療養シ難キモノ、及ヒ貧窮患者無代治療等施行ㇾ處、警視本署避病院之義モ、方今完全之趣ニ付、當廳所轄各地臨時病院之

帝都時代ノ疫癘

義ハ、自今新患者入院相止メ候條、爲ニ心得一此旨相達候事。

但、自宅ニ於テ本府病院本分局幷ニ臨時出張所醫員區醫等ニ治療相托候義ハ、從前之通り各人民之望ニ任スヘキ事。

病院
區醫　臨時病院　區醫取締
區醫出張所

各地臨時病院ニ、自今コレラ病新患者入院相止メ候義、別紙之通リ區戶長ニ相達候條、自宅於テ療養シ難ク入院ヲ要スル患者有レ之節ハ、最寄警視分署ニ可レ致ニ通知一事。

但、現今入院之患者治療之義者、是迄之通リ可ニ相心得一事。

十二月廿二日（〇明治十年紀元二五三七年）送達

按

先般コレラ病流行之際、深川地方（〇市內）飲料水之儀ニ付、御諭達之旨モ有レ之候處、今般該區々長井病院長等ヨリ、別紙上申之趣モ有レ之、最早平常ニ復シ差支筋モ有レ之間敷ニ付、左之通リ御達相成可レ然哉、相伺候也。

先般虎列刺病流行之際、其區內飲料水之義ニ付、丙第貳百六十三號ヲ以及諭

第六大區一貳三四五小區
區戶長

達置旨モ有レ之處、最早病毒撲滅ニ歸シ候ニ付、給水相廢候條、此旨相達候事。

但、平常飲料水、各自注意スヘキハ勿論ナレ共、可レ成丈ケ清水撰用候樣可レ及ニ告諭一事。

虎列刺患者總計表　明治十年分

病症	男	女	小計	治癒	死亡	治死不詳
眞症	三百四十二人	百五十三人	四百九十五人	六十七人	四百十二人	十六人
類似	百五十四人	八十八人	二百四十二人	百三十人	百五人	七人
通計	七百三十七人					

〔參考〕東京府衞生科回議錄——

虎狼痢病豫防養生法印刷落成ニ付御屆

過般伺濟ニテ致ニ印刷一候虎狼痢病豫防養生法（〇畧）之儀、印刷落成ニ付、一枚入ニ御覽一候也。

明治十年（〇紀元二五三七年）九月二十五日

東京府知事楠本正隆殿

長谷川泰印

〔附記〕疫邪流行年譜云フ、

帝都時代ノ疫癘

明治十年風疹百日咳

四五月○明治十年(紀元二五三七年)。ノ頃、風疹大イニ流行ス。又百日咳流行ス。

明治十二年虎列刺

十二年○明治○紀元二五三九年。東京虎列刺病流行ス。即チ六月十九日(紀元二五三九年)○明治十二年○明治○紀元二五三九年。日本橋區濱町○市内。ニ發スル者ヲ始トシ、發生第十週即チ八月廿五日○明治十二年(紀元二五三九年)。ノ頃病勢最モ猖獗ヲ極メ、一週ノ發病者實ニ三百八十七人ヲ算シ、十一月十二日○明治十二年(紀元二五三九年)。全ク消滅ス。其經過日數百四十六日、患者總數二千二百三十六人、死者一千七百九十人也。病毒神戸○攝津國。ヨリ入ル。○明治十二年虎列刺病流行紀事。中央衞生會年報。

明治十二年虎列刺事蹟

明治十二年虎列刺　ハ、日本傳染病小史「千八百七十九年○明治十二年(紀元二五三九年)。は、前年流行の後を受けて、病毒各地に散發し、殊に九州の一部に猖獗を極めしかば、遂に神戸港○攝津國。に侵入して大阪○攝津國。を襲ひ、次で全國に蔓延し、患者總數十六萬二千六百三十七、死亡十萬五千七百八十六人の多數に達せり。而して今次の流行は、三月中旬○明治十二年(紀元二五三九年)。に初發患者を出し、十二月○明治十二年(紀元二五三九年)。末に至る迄、二百八十餘日の長きに渉りて流行し、其最も盛に各地に蔓延せるは六月○明治十二年(紀元二五三九年)。にして、流行の極期は八月○明治十二年(紀元二五三九年)。にてありき。」ト記スル者是也。其東京ニ於ケル流行狀況ハ明治十二年虎列刺病流行紀事ニ詳ナレハ、左ニ之ヲ抄ス。

病毒發生ノ原因及感染ノ媒介

府下○東京。ニ在リテ、虎列刺病ヲ患ヒシ者ハ、日本橋區濱町二丁目十一番地○市内。某及ヒ檜物町二十六番地○市内。某ヲ濫觴トス。兩人共ニ神戸○攝津國。解纜ノ瀛船ヨリ來着セシ者ニシテ、甲ハ六月十七日○明治十二年(紀元二五三九年)。該地ヲ拔錨シ、十九日十日該地ヲ出帆シ、二十二日○明治十二年(紀元二五三九年)。着府、凡二時間ノ後發病シ、乙ハ同月二十四日○明治十二年(紀元二五三九年)六月。着府、二十四日○明治十二年(紀元二五三九年)六月。發病セリ。當時神戸○攝津國。ハ流行地ナレハ、該地ニ於テ病毒ニ感染シ、潜伏期中本府○東京。ニ來リ、發病セシコト明ナリ。尋テ麹町區有樂町○市内。北豐島郡袋村○武藏國。京橋區木挽町○市内。等ニ傳播シ、四方ニ蔓延スルニ至ル。

感染ノ媒介タルハ、多ク豫防消毒隔離ノ方法ヲ履行セス、粗惡及ヒ腐敗ノ飲食ヲ爲シ、勞動過度ナルニ在リ。

帝都時代ノ疫癘

傳染ノ緩急

初發一週間二名ニ傳染シ、次週ニ五名ノ新患者ヲ生ジ、第三週ニ二名、第四週ニ九名、第五週即七月十八日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）ノ頃ヨリ漸次病勢ヲ逞クシ、一週間ニ五十一名ノ新患者ヲ生ズルニ至ル。爾後益々熾ニノ、第六週ニ百三十九名、第七週ニ百七十一名、第八週ニ二百七十八名、第九週ニ三百五十名、第十週即八月二十五日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）頃ニ至リ、病勢最モ猖獗、一週間ニ發病スル者三百八十七名、八月三十日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）ハ一日ニ七十名ノ新患者ヲ生ズルノ酷シキニ至レリ。第十一週即九月五日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）頃ヨリ病勢漸ク衰ヘ、新患者二百六十一名ナリ。第十二週ニハ百三十四名ニ下リ、爾來日ヲ逐ヒテ減少シ、第十三週ニ八十二名、第十四週ニ五十二名、第十五週ニ八十四名、第十六週ニ四十七名、第十七週即十月十七日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）頃ニ至リテハ、一週間二十名ノ新患者アルニ止ル。第十八週ニ二十二名、第十九週ニ八名、第二十週即十一月十二日（○明治十二年（紀元二五三九年）。）ニ一名ノ新患者アルノミ、爰ニ至リテ全ク消滅ス。（十二月六日（○明治十二年紀元二五三九年）。）一患者アルモ、類似症ニシテ直ニ全癒ス。）

病勢ノ劇易

神田區（○市内。）ハ患者百八ニ付、眞症八十二八一分七厘、日本橋區（○市内。）ハ同眞症八十二八七分六厘、京橋區（○市内。）ハ同眞症九十八七分二厘、芝區（○市内。）ハ同眞症八十二八零八厘、淺草區（○市内。）ハ同眞症八十七八八分六厘、本所區（○市内。）ハ同眞症六十五八零九厘、深川區（○市内。）ハ同眞症七十八、荏原郡（○武藏國。）ハ同眞症八十七八三分八厘、南葛飾郡（○武藏國。）ハ同眞症六十九八五分七厘ノ割合ニ當ル。他ノ郡區ハ患者僅々百八ニ充タサルヲ以テ之ヲ略ス。

流行ノ廣狹

府下十五區六郡中、四百五十町七十二村ニ流行シ、其範圍大約東西四里、南北五里餘。

流行ノ進路及時日

初日本橋區濱町（○市内。）ニ一患者ヲ生ジ、五日ヲ經テ檜物町（○市内日本橋區。）ニ、二日ヲ隔テ葭町（○市内日本橋區。）ニ、四日ヲ過キテ麹町區有樂町（○市内。）及北豐島郡袋村（○武藏國。）ニ一日ヲ隔テ赤坂區新町（○市内。）ニ、七日ヲ過ギテ荏原郡大井村（○武藏國。）ニ、一日ヲ隔テ芝區高輪（○市内。）ニ、又一日ヲ隔テ京橋區木挽町（○市内。）ニ、又一日ヲ隔テ石川島（○市内京橋區。）監獄署等ニ傳播セリ。

發熄ノ月日

六月十九日（明治十二年（紀元二五三九年））ニ發シ、十一月十二日（明治十二年（紀元二五三九年））ニ至ク消滅ス。其經過日數百四十六日。

流行地風土ノ景況

神田區橋本町（市内）ハ、其ニ卑濕ニメ、海面ヨリ十四五尺内外ニ位シ、溝渠井邊ニ接近シ、其構造完全ナラザルヲ以テ汚物澁滯シ、有機物等井水ニ滲透スルヿ有リ、且ッ近傍絶エテ深林茂樹ヲ見ズ、寒暖ハ七八月ノ際九十度前後、一二月ノ頃四十度前後、恒風ハ春夏ハ東南、秋冬ハ西北、近傍ニ高山ナキヲ以テ、他ノ地方ニ比スレバ四季倶ニ風多シ、陰晴ハ晴天多キニ居ル、人家稠密、構造極メテ疎惡、住民概シテ貧困、職業ハ力役片布紙屑買等多シ、常食ハ米麥蔬菜及魚介ノ類、飲水ハ橋本町ハ神田上水又ハ堀井ヲ用ヒ、壽町ハ堀井ヲ用フ。京橋區南小田原町（市内）ハ、低地ニメ海面ヨリ殆ト七尺内外ニ位シ、數條ノ川河ヲ帶テ海灣ニ接ス、人家稍稠密、家屋厠房溝渠等ノ構造皆宜シキヲ得ス、住民ハ貧者多ク、船乘漁夫力役等ヲ業トシ、炎天風日ニハ魚臭市街ニ漏發ス、常食ハ米麥蔬菜及下等ノ魚介ヲ食シ、飲水ハ玉川上水ヲ用フ。

而シテ當時ノ豫防消毒及治療法ハ、

豫防消毒及治療ノ方法

豫防消毒法　患者ノ排泄物ハ、漏洩セサル桶或ハ函ニ入レ、燒却地ニ搬致シテ之ヲ燒燼シ、深ク土中ニ埋沒ス。吐瀉物等ニ觸レタル衣服物品類ニメ保存スヘキ者ハ、消毒所ニ搬送シ、法ノ如ク消毒セシム。路傍ノ便所、芥溜、下水、溝渠其他總ヘテ不潔ノ場所ニハ消毒藥ヲ撒布セシム。入港船舶ニ就キ、患者若クハ屍體等ノ有無ヲ調査シ、患者ハ避病院ニ、屍體ハ火葬場ニ送リ、船中ニハ消毒藥ヲ撒布シ、其舟子等他人ト交通ヲ絶ツヿ、法ノ如クセシム。

治療法（避病院報告中ヨリ採錄ス。）　○芥子全身浴　衰脫期ニ於テ皮膚ノ機能ヲ催進シ、且ッ諸機能ヲ挽回センカ爲ニ全身芥子浴ヲ施シ、浴後直ニ「フランケット」ヲ以テ温包スルニ、清神爽快ヲ覺エ、體温稍昇リ、脈稍弾力ヲ生シ、心下ノ苦悶散シ、四肢ノ痙攣歇ミ、吐瀉共ニ減却スルニ至レリ。然レモ或ハ一時反應ヲ起シ、痙攣歇止シ、諸症緩解スルモ、心下苦悶依然逆歩シテ再ヒ吐瀉シ、體温復タ降リ、心音幽微、脈搏應セス、直視上竄等ノ症ヲ現シ、者アリ。蓋シ此浴ハ、衰脫期ニ陷リテ未多時ヲ經過セス、尚ホ抵抗ヲ起スヘキ目的アル者ニハ、速ニ之ヲ施セバ奏

効著シキナリ。○酸素吸入　衰脱期ニ於テ吐瀉全ク歇マス、頻ニ腓腸筋ノ痙攣ヲ發シ、苦悶、煩躁、呼吸促迫、脈搏細數ニシテ倫次ナク、心音不齊等ノ症ヲ發セル者ニ、此瓦斯吸入法ヲ用フ。其法ハ鹽酸加里ニ黒滿俺酸ヲ混ジ、栓塞アル「レトルト」ニ入レ、之ニ適宜ノ護謨管ヲ附シテ、硝子製大漏斗ニ接續シ、然ノ「レトルト」ヲ「アルコール」ランプ上ニ上セ、酸素瓦斯ノ分離スルヲ待チテ、漏斗ヨリ之ヲ十分時乃至十五分時間吸入セシムルニ、呼吸一密扭篤ニ三十八乃至四十ノ者、三十三乃至三十八ト爲リ、脈搏百三十六乃至百三十八ノ者、百二十六乃至百三十二ト爲リ、苦悶及痙攣緩解スルモ、暫時ノ後諸症再歸スルニ由リ、七八回之ヲ反覆シテ奏效アリシ者一名、稍効アリシ者一名、假死ノ狀アル者ニハ奏効ナシ。○亞硫酸瓦斯吸入　衰脱期ニ在リテ「シヤノーゼ」ヲ發シ、生力沈衰、循衣模牀等ノ惡候ヲ呈シ、策ノ他ニ施スベキ無キ者ニ吸入セシメタルニ、著シク其効ヲ奏セシ者一名、一時稍効アリシモノ一名、更ニ奏効ナキモノ二名アリ。○氷片摩擦　未ダ効驗アルヲ見ズ。○局處療法　局處療法ハ屢直ニ諸症ヲ緩解ス、則嘔吐、胃部苦悶ニ於テ胃部ニ反對刺戟トメ芥子泥ヲ貼シ、或ハ四肢ニ之ヲ貼シテ引赤ヲ爲サシメ、又反應期後ニ於テ體溫亢

リ、腦充血ノ徴ヲ現ス片ハ、頭部ニ氷罨法ヲ施シ、又諸症荏苒トメ發作性呼吸困難ヲ發シ、腹部ヲ壓スルニ堪ヘ難キ景況ヲ呈シ、或ハ疼痛ヲ訴ヘ、内部ノ灼熱ニ苦シム片ハ、全腹ニ冷罨法（但食鹽水チ「フラ」ンネル」ニ蘸ス者。）ヲ行ヒ、綿ヲ蓋ヒテ以テ温暖ヲ生ゼシメ、或ハ「フラネル」ヲ温湯ニ蘸シ、全腹ヲ覆ヒ、時々更換シテ腹部ヲ温保スル等總ヘテ効ヲ奏セシヿ鮮カラス。　――明治十二年虎列刺病流行紀事

然ルニ衞生思想尚民間ニ普及セズ、豫防消毒法施行ノ障碍ヲ畏忌スルヨリ、勉メテ病患ヲ隱匿シ、密ニ其衣服ヲ川、河、井ノ邊等ニ洗濯シ、又ハ排泄物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルノ惡弊アリ。

豫防消毒法施行ノ障碍

人民多クハ避病院ニ送致セラルヽヲ

警視廳處務條件、左ノ如シ。

處務ノ條件

虎列刺病府下（東京。）ニ傳染スルニ方リ、各警視分署ニ檢疫掛數百名、警視病院ニ檢疫醫員數十名ヲ置キ、豫防消毒檢疫等ニ從事セシメ、警視本署衞生掛ニ於テ之ヲ統理シ、該疫ニ係ル一切ノ事務ヲ處辨ス。七月三十一日（明治十二年紀元二五〇二年）

三九年)。地方衛生會ヲ開設セラレタルヲ以テ、從來ノ事務總テ同會ニ移サル。後病勢消熄スルニ至リ、十月十日(○明治十二年(紀元二五三九年)。)遂ニ該會ヲ閉鎖セラレ、事務ハ各管理スル所ノ廳ニ歸ス。

明治十二年　虎列刺病流行紀事

中央衛生會年報所載累年虎列刺患者及死亡表ニ據レハ、明治十二年度ノ東京ニ於ケル患者ハ二千二百卅六人ニシテ、死者ハ一千七百九十人ナリト云フ。

明治十四年腸窒扶斯

十四年(○明治○紀元二五四一年。)東京腸窒扶斯流行シ、二千四百卅三人ノ患者ヲ出ス。(○東京府統計書。)是年(○明治十四年(紀元二五四一年)。)發疹窒扶斯亦行ハル。(○東京府統計書。東京醫事新誌。)

明治十四年發疹窒扶斯

明治十四年腸窒扶斯事蹟

明治十四年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據ルニ、明治十四年(○紀元二五四一年。)東京府下ニ腸窒扶斯患者ヲ出スコト、一月五十二人、二月六十五人、三月百卅四人、四月三百六十三人、五月六百九十四人、六月五百五十一人、七月二百卅四人、八月百十一人、九月六十九人、十月五十七人、十一月五十六人、十二月四十七人ニシテ、總計二千四百卅三人也。內區部ハ、

麴町區　八七。　神田區　一五六。　日本橋區　一一四。

京橋區　一二八。　芝區　一六四。　麻布區　三九。
赤坂區　二二。　四谷區　六九。　牛込區　一四〇。
小石川區　四七。　本郷區　一七二。　下谷區　二五九。
淺草區　二三三。　本所區　一八四。　深川區　六五。

東京醫事新誌ハ、是年(○明治十四年(紀元二五四一年)。)ノ傳染病ヲ數ヘテ昨年(○明治十四年(紀元二五四一年)。)東京府下十五區六郡にて傳染病者の合計は、

	死亡		全治		未治	
虎列刺	男 二十三人	女 十人	男 廿二人	女 七人	男 七人	女
腸窒扶斯	三百四十三人	二百一人	二百七十九人	六百八十人	二十八人	八人
發疹窒扶斯	五十人	三十二人	百八十二人	九十六人		
赤痢	十三人	十人	三十一人	三十六人		
實扶的里亞	八十三人	八十六人	五十六人	四十三人		
疱瘡			二人			

トシ、虎列刺患者五十九人、腸窒扶斯患者千五百卅九人、發疹窒扶斯患者三百六十人、赤痢患者九十人、實布的里亞患者二百六十八人、疱瘡患者二人トス。其說東京府統計書ニ同シカラズ。

明治十四年發疹窒扶斯　明治十四年〇紀元二五四一年。ニ於ケル發疹窒扶斯ノ流行ハ、患者ヲ出スコト多シト謂フ可カラサルモ、頗ル世人ノ注意ヲ惹キタリ。內務省衞生局ハ、之ニ關スルドクトルベルツ、ドクトルブーケマノ申報ヲ譯シテ心得ノ爲メ告示ス。

內務省衞生局報告第廿二號

今般東京ニ於テ發疹窒扶斯流行ノ兆候有之ニ付、中央衞生會委員ドクトルベルツドクトルブーケマ兩氏ノ申報ヲ譯シ、心得ノ爲メ報告ス。

明治十四年〇紀元二五四一年。五月二十日　內務省衞生局

目下東京ニ流行スル發疹窒扶斯ノ略說　ドクトルベルツ氏述

發病ノ前數日間前兆ヲ呈シ、身體違和ヲ覺エ、噴嚏スルコト、恰モ感冒ニ罹リシ者ノ如ク、而シ四肢攣痛ス。又此前兆ナリ。率ニ寒戰スル「一回或ハ數回ニシテ發病スル者アリ。其發ルヤ、體溫頓ニ昇騰シテ四十度若クハ四十度以上ニ達ス。此レ腸窒扶斯ト異ナル所ノ徵ナリ。脈搏ハ百至或ハ百至以上ヲ呈シ、患者甚シク疲倦シ、大頭痛ヲ發シ、乃チ褥ニ就カサルヲ得ズ。

上記ノ高熱數日間稽留シ、其際頭痛劇甚ニシテ、食思缺乏シ、舌上乾燥シ、精神恍惚トシテ、耳聾ヲ致シ、又輕キ結膜炎ヲ發スルヲ見ル。發疹ハ、通常病ノ第三四日ニ見點ス。此時ニ於テハ、患者益々困倦シテ、起坐ニ耐ヘス、又强ヒテ四肢ヲ動シ、或ハ壓迫スルトキハ劇痛ヲ覺エシム。是ニ於テ精神痴呆ト爲リ、若クハ昏憒シ、耳聾愈々甚シク、

夜間或ハ晝日譫語ヲ發シ、熱度依然、脈實ニシテ、其數尙ホ百乃至百二十至ヲ算セシム。

發疹ノ形狀ハ、二種アリ。一ハ稍々起脹セル薔薇斑ニシテ、猶ホ腸窒扶私ニ發スル者ニ似タリ。此疹ハ主トシテ軀幹ニ發シ、又時トシテ四肢ニ生ス。一ハ皮上ニ起脹セサル小斑ニシテ、少シク陷凹セルカ如キ狀ヲ呈ス。此疹ハ四肢ニ著シク、而シテ手足ニ及ホス。蓋シ此赤色斑ハ、指ヲ以テ之ヲ壓スレハ乍チ消褪シ、指ヲ退クレハ則故ニ復スト雖モ、重症ニ於テハ出血性ノ血斑ト爲ルヲ以テ、之ヲ指壓スルモ褪色スル「無シ。

眼目光輝アリテ、結膜赤色ヲ呈シ、眼瞼動モスレハ膠着シ、且ツ多少噴嚏ヲ頻發ス。然レモ現今流行スル者ニ於テハ、多ク氣管枝炎ノ症候ヲ呈セス。舌上乾燥シ、大概口內ニ褐色ノ汚物ヲ附着ス。咽喉ニモ亦加答兒症ヲ發スル者多シ。食思全ク廢絕シ、大便常ニ秘シ、尿ハ少量ニシテ、大概蛋白ヲ含メル「無シ。而シテ脾臟肥大ス。

神經症ハ、漸ク增進シ、發疹ハ荏苒持續シ、或ハ漸次增加シ、第十日或ハ第十三日ニ至ルノ後、體溫脈搏暫時ニ常態ニ復シ、一日乃至三日ノ間ニ發疹モ亦其色ヲ減ス。精神昏憒シテ譫語ヲ發セシ者速ニ快了シ、食思モ亦漸ク振ヒ、一二週ヲ出テスシテ忽チ恢復ニ趣ク者多シ。然モ其間往々神經機亢進ノ狀ヲ見ル。

第二週ニ於テ、發疹鉛色或ハ紫色ト爲リ、又同時ニ新ニ血斑ヲ生スル者ハ惡兆ト爲ス。本病ノ屢々死ヲ致スハ則此時ニ在リトス。

第三週ノ初ニ至リテ、熱候始メテ退ク者ハ、其恢復遷延スルヲ常トス。脈搏百二十至ニ過タル者殊ニ衰弱セル者及ヒ人事不省昏睡ノ症ヲ呈スル者ハ、皆豫後至テ

不良ナリトス。

又此ノ如キ重症ニ反シテ輕症ナル者アリ。此症ニ在リテハ第二週ノ初ニ於テ熱候已ニ減退ス。

本病ハ觸接ニ因リテ感染スル者ナリ。故ニ其發病ノ前、他ノ本病患者ニ交通觸接セシコトアルヲ以テ之ヲ判定スルヲ得ヘシ、而ノ腸窒扶私トノ識別ハ、左ノ如シ。

	發疹窒扶私	腸窒扶私
初徴	一回若クハ數回ノ寒戰ヲ以テ頓發ス	病勢漸進シ惡寒著シカラス
熱候	卒然四十度乃至四十一度ニ昇リ日乃至十三日ニシテ太タ速ニ下降ス	漸次ニ昇騰シテ階梯狀ヲ爲シ第四日乃至第六日ニ至リテ穩留シ第三週若クハ第四週ニシテ緩徐ニ下降ス
神經症	速ニ發シ來リ第一週ニ於テ既ニ劇度ニ達ス	漸次ニ之ヲ發シ第二三週ニ於テ最モ著シ
五官所患	耳聾甚シク結膜炎ヲ發シ且ツ噴嚏アリ	屢々耳聾アリト雖著シカラス結膜炎及ヒ噴嚏ナシ
腸諸症	大便秘結シ回腸盲腸部ニ雷鳴ナシ	屢々下利シテ黃色ノ稀便ヲ瀉泄ス回腸盲腸部ノ疼痛及ヒ雷鳴アリ
皮膚現候	多ク小斑ヲ發シ又屢々血斑ヲ交ヘ遍ク全身ニ之ヲ見ル殊ニ四肢ニ多シ又薔薇疹ヲ併發ス	輕ク薔薇疹ヲ發ス殊ニ軀幹ニ在リテ大概四肢ニ及ホサス

（本局第十五號報告ト參觀スヘシ）

凡ソ發疹窒扶私ハ、之ヲ腸窒扶私ニ比スルニ、大流行ヲ爲シ、且ツ往々貧人ノ群居セル市街ニ在ル者ニトス。

近口輕症痲疹モ亦大ニ行ルヽヲ以テ、之ヲ發疹窒扶私ト混一スルヿ勿カレ。此病ハ經過短ク、熱候輕ク、全身症モ亦輕易ニメ危險ナルヿ無シ。而其發疹ハ、通常第二日見點、顏面ニ波及シテ著シク起腫シ、發疹窒扶私ニ比スレハ最モ密發シ、且ツ速ニ消失ス。但粘膜ニ現ルヽ所ノ症候ハ、發疹窒扶私ニ同シ。然ヒ此際患者尙能ク起居テ營ムヲ得ルナリ。

市ケ谷監獄署内の窒扶斯病　該病流行し、囚徒の患者既に百餘名の多きに及ひ、獄中は勿論、近隣の町家にも波及し、谷町〇市内牛込區。邊には、同症に罹る患者多ければ、衞生掛の警視官が親しく病家に就て調べらるゝに、醫師が其病症を押隱し屆け出ざりしゆゑ、去廿一日〇明治十四年(紀元二五四一年)三月。此患者の家に出入せし醫師を殘らず呼び出されて、種々尋問されたるが、其屆け出を怠りたるは、多く漢法醫なりとか。

——東京醫事新誌

東京府統計書ニ據レハ、是時東京ニ行ハレタル發疹窒扶私ハ、二月〇明治十四年(紀元二五四一年)。**中一人ヲ出シタルニ始マリ、三月**〇明治十四年(紀元二五四一年)。**八十七人、六月百四十四人ヲ出シ、七月**〇明治十四年(紀元二五四一年)。**ヨリ稍下リテ六十二人、八月**〇明治十四年(紀元二五四一年)。**十六人、九月**〇明治十四年(紀元二五四一年)。

帝都時代ノ疫癘

四年）。一九人、十月〇明治十四年（紀元二五四一年）。二人、十一月〇明治十四年（紀元二五四一年）。三人、十二月〇明治十四年（紀元二五四一年）。五人ニシテ、府下總計三百五十一人也。〇東京醫事新誌三百六人ト爲スコト既ニ之ヲ記ス。内區部ニ於テハ、最モ多キヲ本所區〇市内。ノ四十一人トシ、芝區〇市内。ノ卅六人之ニ次キ、神田區〇市内。ノ卅二人亦之ニ次ク。次ハ日本橋區〇市内。廿九人、本郷區〇市内。廿八人、牛込區〇市内。廿一人、四谷區〇市内。廿人ニシテ、其他ハ皆二十人ニ及ハズ。

〔參考〕東京醫事新誌ニ據レハ、陸軍本病錄事ニ、

「ロセヲラ」流行報告明治十四年（〇紀元二五四一年）四月十八日

陸軍本病院治療課長陸軍二等軍醫正八杉利雄

近衛教導團諸隊ニ於テ輕症麻疹ニ類似セル一般ノ發疹病目下流行ス。其症タル、發疹前一二日惡寒頭痛等ノ前驅症アリ、次テ發熱攝氏三十八九度ニ至リ、脉數增加ス。而メ發疹ハ、面部ヨリ始リ、漸ク全身ニ瀰蔓ス。殊ニ背部ニ夥シク、胸腹之ニ次キ、下肢ハ最モ少シトス。其色始メ微紅色ニメ、僅ニ皮上ニ隆起シ、數個相結合スル者ノ如ク、而メ次第ニ濃紅ニ變ス。試ニ指端ヲ以テ疹上ヲ壓スレハ、紅色瞬時消褪スルモ、指ヲ放テハ忽チ復色ス。又之ヲ熟視スレハ、疹上ニ小水泡ヲ現スル者アリ。其他結膜充血シ、咽喉赤色ヲ呈シ、時トシテ扁桃腺腫脹スル者アリ。舌白苔ヲ帶ヒテ、尖端微紅乳頭隆起ス。微渴アリテ或ハ輕キ咳嗽ヲ兼ヌ。尿ハ異重增加スルモ、性質成分ニ變化ナク、大便多クハ秘結ス。聽打診上肝脾其他內臟ノ變化ヲ認メス。發疹極度ニ至レハ、熱度減退、二三日ニメ疹全ク消散ス。但シ多クハ鱗屑狀ヲナサスシテ復故ス。時トメハ此期ニ痒癢ヲ覺ユル者アリ。全經過大概一週以內ニメ終ルヲ常トス。治法ハ專ラ自然ノ經過ヲ得セシムルヲ以テ目的トシ、單ニ里沒那垤ヲ與ヘ、便秘スル者ニハ人造カルヽス泉ノ如キ鹽類下劑ヲ投スルノミニシテ、自ラ治癒ス。

以上ノ諸症ヲ參考スルヤハ、麻疹猩紅熱ト異ナル一種ノ傳染病ニシテ、所謂流行性「ロセヲラ」ナル者ナリ。

近衛教導團隊ロセヲラ患者表

隊號	自初起至四月七日	自四月八日至同十四日	通計
近衛歩兵第一聯隊第一大隊	九名	一名	一〇名
同　第二大隊	一名	一名	二名
同　砲兵大隊	二名	三名	五名

教導團歩兵大隊	二名	一名	三名
同　砲兵大隊	二名	〇	二名
同　軍樂隊	六名	一名	七名
合計	二十二名	五名	二十七名

但シ、行軍野營出張中ノ諸隊ハ、不明ニ付除ク。

ト見エ、「ロセルン」流行紀事ト題スル文中ニハ、「本年（〇明治十四年（紀元二五四一年）。）一月以來、一種ノ發疹性熱病府下（〇東京府。）ニ流行スト雖モ、未タ其病名ヲ下ス者ナシ。曾テ聞ク英國醫士某氏ハ之ヲ猩紅熱ナリト謂ヒ、獨逸醫士某氏ハ、其最劇症（或ハ他病ナランカ）ヲ斥シテ發疹窒扶斯ナリト謂フト。余未タ之ヲ信スルヿ能ハス、同業諸子ノ説ヲ聞クニ、或ハ輕症麻疹ナリト謂ヒ、或ハ英醫ノ説ニ雷同シテ猩紅熱ナリト謂ヒ、或ハ麻疹ト猩紅熱トノ中間病ニメ、未タ其名ヲ知ラスト謂ヒ、更ニ一定ノ説ヲ立ツル者ナシ。余私ニ一家言ヲ爲メ曰ク、目下流行スル所ノ發疹熱ハ、其發疹窒扶斯ニ非サレバ、固ヨリ猩紅熱ニ非ズ、又麻疹ニモ非ズ、英語ノ所謂「ロゼルン」ナリト。此病一名假性麻疹ト謂フ」ト有リ。又「ロセルン」此病一名假性麻疹、又日耳曼麻疹ト謂ヒ、米國ノ俗ニ佛蘭西麻疹ト謂フ。本邦ノ俗ニ三日麻疹ト謂フ者是ナリ。此症麻疹或ハ猩紅熱ニ類似スト雖モ、本來全ク別種ニシテ、一種特異ノ傳染性發疹熱ナリ。」ト記ス。日本醫學史是年（〇明治十四年（紀元二五四一年）。）發疹チブス、及猩紅熱流行シタリト爲ス。知ラス發疹窒扶私ノ外、猩紅熱亦流行ヲ見タリシ乎、或ハ所謂「ロセルン」ノ流行有リタル乎、或ハ其實發疹窒扶私ニ過ギサリシ乎、姑ク記シテ後考ヲ俟ツ。

附記　明治十四年實扶的里亞其他

〔附記〕東京府統計書ニ據レハ、是歳（〇明治十四年（紀元二五四一年）。）ニ於ケル東京府下實布的里亞患者ハ二百七十七人、赤痢患者ハ七十三人、虎列剌患者ハ五十五人、天然痘患者ハ二人也。

東京醫事新誌ニハ、又左ノ如キ記事有リ。

府下（〇東京府）に一種の病現る

近來府下（〇東京府）に一種の腫狀症盛んに流行し、其大さは大豆或は小豆の如く、是を患ふる者は婦女子にして、初め口邊或は眉上に發生し、漸時に顏面總部へ發生す。甚しきに至ては、身體中に蔓延す。而して是に痛痒の二症狀ありて、其傳染するは重に湯屋にありと。婦女子は、其發生して諸部へ蔓飛するを以て飛火と云ふ。

明治十五年虎列剌

十五年（〇明治。〇紀元二五四二年。）五月、東京虎列剌流行ス。是月（〇明治十五年（紀元二五四二年）五月。）廿九日芝區（〇市內。）ニ發シタル者ヲ初發トシ、初週九人、次週卅七人、三週廿二人、四週七十二人、五週九十五人ノ進度ヲ以テ蔓延シ、

七月廿五日（明治十五年（紀元二五四二年）。）ノ如キハ、一日ノ發病者百八十八人ヲ算スルニ至ル。八月上旬（明治十五年（紀元二五四二年）。）以降病勢漸ク衰退シ、十月中旬（明治十五年（紀元二五四二年）。）終熄ス。死者總數五千零七十七人、患者六千五百廿八人也。病毒横濱（武藏國。）ヨリ入ル。（明治十五年虎列刺病流行紀事。東京府統計書。）

明治十五年虎列刺ハ、東京ヲ中心トシテ病毒全國ニ蔓延ス。

發熄ノ月日

五月二十九日（明治十五年（紀元二五四二年）。）ニ發シ、十一月十二日（明治十五年（紀元二五四二年）。）ニ至リ終熄ス。

病毒發生ノ原因及傳染ノ媒介

本病發生ノ原因ヲ略言スルニ、第一ハ五月二十九日（明治十五年（紀元二五四二年）。）芝區田村町十番地（市内。）紙商某ノ發病ヲ以テ初發トス。其原因ハ一兩日前横濱（武藏國。）有病地ヨリ止宿人アリト、恐ラクハ是レ感染ノ初因ナラン。又其一日前蛤ヲ食シ、腹痛下痢シタリト即是助因トナリテ發病シタル者ノ如シ。第二ハ同（明治十五年（紀元二五四二年）。）五月。三十日神田區一ツ橋町十二番地（市内。）足袋商某ガ妻ノ發病ニシテ、直ニ其夫ニ感染ス。其因ハ發病前屢横濱（武藏國。）ニ往來シ、爲ニ感染シタルモノナルベシ。又同（明治十五年（紀元二五四二年）。）五月卅日。神田神保町二番地（市内。）某及同區（市内。神田區。）花房町二番地某等ガ發病ハ、其原因詳ナラズ。第三ハ同月（明治十五年（紀元二五四二年）。）五月。三十一日神田區美土代町一丁目二十五番地（市内。）止宿人某ノ發病ニシテ、元來横濱（武藏國。）人ナルノミナラズ、前日同地（横濱。）ニ於テ暴飲暴食シタリト云ヘバ、既ニ感染潜伏期中出京シ、發病シタルヤ明ナリ。是ニ據リテ考フルニ、本年（明治十五年（紀元二五四二年）。）該病（虎列刺病。）ノ府下（東京。）ニ發シタルハ、概ネ横濱（武藏國。）ヨリ波及傳染シタル者ノ如シ。爾後二日ヲ隔テ、即六月三日（明治十五年（紀元二五四二年）。）ニ三人ノ患者ヲ出シ、又一日ヲ隔テ、四人ノ患者アリ。尋テ連日若干ノ患者ヲ出シ、漸次各區ニ傳播ノ兆候ヲ顯シタリ。而シテ傳染ノ媒介ハ、該病（虎列刺病。）ノ恐ルベキヲ輕視スル者巨多ナルヲ以テ、或ハ隱蔽シ、或ハ豫防消毒等ノ杜撰、且ツ粗惡ノ食物、勞働過度ナルニ因ルナリ。

傳染ノ緩急

初週（自五月二十九日至六月四日（明治十五年紀元二五四二年）。）ニ九名、次週ニ三十七名、三週ニ至リ二十二名ノ患者ヲ出シ、四週（七十九名。）五週（九十五名。）ト日ヲ逐ヒテ蔓延シ、病勢倍々猖獗、最モ高

度ニ上リタルハ七月二十五日〇明治十五年(紀元二五四二年)。ニシテ、同日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月廿五日。ノ新患者百八十八名トス。八月〇明治十五年(紀元二五四二年)。上旬頃同月(〇明治十五年紀元二五四二年八月)三日ノ新患者百三人。ヨリ漸ク退縮シ、九月〇明治十五年(紀元二五四二年)。中旬同月(〇明治十五年紀元二五四二年九月)十五日新患者十名。ヨリ一日ノ患者十名以下ニ下リ、十月十三日新患者一名。以降漸ク終熄ニ就キタリ

病勢ノ劇易

國	區郡	死亡時間 三時間以内	死亡時間 六時間以内	死亡時間 十二時間以内	死亡時間 廿四時間以内	死亡時間 廿四時間以外	合計
武	麴町區	一〇	一四	二六	四六	五五	一五一
	神田區	五一	六五	一一四	二七二	二五八	七六〇
	日本橋區	七九	六〇	一四九	二八八	二九七	八七三
	京橋區	二一	三一	七一	一四六	二二一	四九〇
	芝區	三五	三五	六七	一一九	一八〇	四三六
	麻布區	六	六	一二	一三	三三	七〇
	赤坂區	二	五	一二	六	二一	四六
	四谷區	四	一	七	二〇	一二	四四
	牛込區	八	四	一六	一五	三五	七八
	小石川區	三	五	一〇	一四	三六	六八
藏	本郷區	四〇	一〇	三三	四七	九一	二二一
	下谷區	四	一一	五一	五五	一二三	二四四
	淺草區	三五	二四	六七	一一六	二〇一	四四三
	本所區	一七	一五	三九	六六	一〇六	二四三
	深川區	一三	一八	四三	七二	一三〇	二七六
	荏原郡	九	一〇	二四	五一	四四	一三八
	南豐島郡	二	二	五	八	一八	三五
	北豐島郡	五	六	二四	三三	四七	一一五
	東多摩郡	—	—	二	三	四	九
	南足立郡	二	五	四	三四	三八	八三
	南葛飾郡	一〇	六	二三	二八	五五	一二二
國	陸海軍兵營	二	三	二	一二	三三	五二
	監獄署	—	二	四	二三	五一	八〇
	合計	三五八	三三八	八〇五	一、四八七	二、〇八九	五、〇七七
	死亡百人ニ付時間ノ割合	七・〇五	六・六五	一五・八六	二九・二九	四一・一五	

流行ノ廣狹

本病〇虎列刺病。ノ流行、凡十五區ハ一圓ナリト雖、日本橋・神田〇市内。ノ如キ人家稠密ノ區ニ多ク、六郡ニ至リテモ、亦市街ニ接近シタル町村ニ多シ。今其郡村ノ

數ヲ揭クルニ、住原郡〇武藏國。ニ在リテハ三十六村、九十五村ノ内。東多摩郡〇武藏國。六村、三十村ノ内。南豊島郡〇武藏國。十一村、三十二村ノ内。北豊島郡〇武藏國。四十村、八十村ノ内。南足立郡〇武藏國。二十二村、四十三村ノ内。南葛飾郡〇武藏國。六十六村、百十八村ノ内。合計十五區及百八十一町村ニ流行シ、其範圍平積大約十六方里。

流行ノ進路

最初五月二十九日〇明治十五年(紀元二五四二年)五月。芝區〇市内。ニ一人、翌三十日〇明治十五年(紀元二五四二年)五月。神田區〇市内。ニ四人、三十一日〇明治十五年(紀元二五四二年)五月。ニ又同區〇市内神田區。ニ一人ノ新患者ヲ出シタルハ概ネ横濱〇武藏國。有病地ニ於テ感染、潜伏期中出京シ、直ニ發病シタル者及其ヨリ感染シタル者ノ如シ。爾後二日ヲ隔テ即六月三日〇明治十五年(紀元二五四二年)。淺草區〇市内。ニ石川嶋〇市内。監獄署ニ各一人ノ新患者アリ。又一日ヲ隔テ、日本橋區〇市内。ニ四八ノ新患者ヲ出シ、尋テ各區ニ波及シ、殆ンド全府下〇東京。ニ流行ノ兆候ヲ顯シタリ。——明治十五年虎列刺病流行紀事

豫防消毒法ニ關シテハ、明治十五年虎列刺病流行紀事云フ、

豫防法ハ、之ヲ大別シテ二ト爲ス。其一ハ隔離法、即五月三十日〇明治十五年(紀元二五四二年)。ニ於テ本所避病院ヲ開キタルニ、七月初旬〇明治十五年(紀元二五四二年)。ニ至リ、傳播ノ勢倍、猖獗ナルヨリ、同月〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。八日ニ大久保避病院、同〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。十四日ニ芝避病院ヲ開設ス。尋テ又八月十三日〇明治十五年(紀元二五四二年)。ニ本郷避病院、九月三日〇明治十五年(紀元二五四二年)。ニ日本橋避病院ヲ開キ、自宅治療ノ行屆キ難キ者ヲ入院セシム。其二ハ清潔法ニシテ、下水・芥溜其他汚穢ノ場所等、一層嚴重ニ掃除スルハ勿論、防臭劑等ヲ撒布セシメ、時々監督員ヲ派シ巡視セシメタリ。消毒法ハ總テ成規ニ據リタリト雖、凡患者ノ排泄物ハ桶又ハ函等ニ入レ、密封シテ燒却場ニ送リ燒燼セシメ、又其排泄物ニ觸レタル衣服物品ニヌ保存スベキ者ハ、消毒所ニ運搬シ、法ノ如ク消毒セシメ、其他厠房・芥溜・下水・溝渠等ニハ石炭酸水・硫酸鐵等ヲ撒布シ消毒セシメタリ。

治療方法ハ明治十五年虎列刺病流行紀事、本所・芝・本郷・大久保・日本橋五避病院ノ報告ヲ抄載シ、他ハ之ヲ省略ス。

治療ノ方法(各避病院報告中ヨリ摘錄ス。)

本所避病院

發病時ノ治療

初期脈搏尚ホ微弱ナラザル者ニハ、虎列刺液ヲ與ヘ、兼テ發汗療法ヲ試ミタリ。

乃チ薄荷浸ヲ内服セシメ、四肢ニ湯壜ヲ接シ、腹部ニ大巾布ヲ貼シテ頻ニ之ヲ更換シ、或ハ芥子脚浴ヲ施シ、然シテ苦悶煩燥乾嘔、腓腸痙攣ニハ、總テ莫爾比涅ノ皮下注入ヲ行ヒ、或ハ胃部ニ芥子泥ヲ貼シ、或ハ腓腸部ニ氷塊摩擦ヲ行ヒタリ。脈弱ニメ稍厥冷症ヲ來ス者ニハ、龍腦依的兒、薄荷油、阿片丁幾蕃木鼈內服セシメ、兼ヌルニ揮發擦劑(哥囉防依的兒、龍腦薄荷油、阿列布油合劑)ヲ全腹ニ塗擦シ、綿花ヲ以テ被覆シ、頻々之ヲ反覆シテ皮膚ノ引赤ヲ促シ、或ハ越爾護質涅(バラコトイン)等ノ皮下注入ヲ試ミタリ。

厥冷絕脈期ノ治療

絕脈病狀劇烈ニメ、四肢厥冷、皮膚藍色ヲ呈シ、呼吸不利シテ煩燥スル者、或ハ嗜眠狀ニ陷ル者ニハ、全身ノ氷塊摩擦、龍腦ノ皮下注入、或ハ罷蘭地ノ灌腸等ヲ行ヒ、內服ニハ礦砂加茴香精、三鞭、罷蘭地麝香等ヲ撰用シ、下痢尙ホ止マサル者ニハ、硝酸銀溶液ノ灌腸ヲ施シタリ。

反應期ノ治療

厥冷期ヲ經過シテ反應症ヲ來シ、頭痛不安ヲ訴ヘ、顏頰潮紅、結膜充血、脈實大、皮膚發疹等ノ諸症ヲ呈セル者ニハ、頭部ノ氷罨法ニ兼テ四肢ノ芥子泥引赤法ヲ施シ、多量ノ粘滑劑ニ鹽酸ヲ伍シ服セシム。然シテ該症增劇シテ舌苔乾燥、嗜眠、譫語、鼻翼煽動、呼吸緩舒、鼾聲ヲ帶フル等ノ諸症中一症ヲ呈シ、體溫增加セル者ニハ、撒里失兒酸曹達ヲ投シ、泌尿ノ機能復セサル者、或ハ減却セシ者ニハ、多量ノ實麥答利斯浸ヲ內服セシメ、頭部ニ氷水灌漑法ヲ持重シ施シ、項窩ニ水蛭ヲ貼シ、四肢ニ芥子泥ノ引赤法ヲ施シタリ。

恢復期ノ治療

厥冷期ヨリ直ニ恢復期ニ轉セシ者、及反應諸症鎭靜シテ衰弱ヲ殘ス者ニハ、飮食攝生ヲ嚴ニシ、雞子黃乳劑ニ良好赤葡萄酒ヲ配伍シテ內服セシメ、食思振ハザル者ニハ、輕量ノ規尼涅或ハ重酸曹達苦味丁幾劑等ノ健胃藥ヲ與ヘ、食思亢進シテ體力尙ホ奮ハサル者ニハ、幾那浸ニ赤葡萄酒ヲ伍シ內服セシメタリ。

合併症ノ治療

實布的里性腸炎ヲ發シテ血便及粘液ヲ下利シ、或ハ惡臭ノ血便ヲ下利スル者ニハ、結晶硝酸銀水ヲ內服セシメ、雞子黃粘粉藥ノ灌腸ヲ施シ、便意窘迫、腹

痛煩悶スル者ニハ、下腹ニ芭布ヲ貼シ、莫爾比涅ノ皮下注入ヲ行ヒ、出血止マサル者ニハ、硝酸銀水或ハ單寧酸ノ灌腸ヲ行ヒ、虛脫症狀ヲ呈スル者ニ在リテハ、興奮劑ヲ撰用シタリ。實布的里性子宮膣部炎ヲ發セシ者ニハ、稀薄石炭酸或ハ亞麻仁煎ノ洗滌ヲ行ヒ、硝酸銀溶液ヲ患部ニ塗布シタリ。實布的里性口內及咽頭炎ヲ發セシモノニハ、亞爾托根煎ニ鹽酸加里ヲ伍シテ頻々含漱セシメ、咽頭、齒齦、舌背等ニ硝酸銀水ヲ塗布シタリ。肺炎ヲ發セシ者ニハ、局處ニ氷罨法ヲ持重シ施シ、規尼涅ヲ比涅ヲ伍シテ內服セシメ、心臟ノ機能衰弱セシ者ニハ、衝動興奮藥ヲ撰用シタリ。心臟內膜炎ヲ發セシ者ニハ、心臟部ニ氷罨法ヲ持重シ施シ、實芝答利斯浸ニ苦扁桃水ヲ伍シテ內服セシメ、煩悶アル者ニハ、莫爾比涅ノ皮下注入ヲ行ヒ、心機衰憊、呼吸不利ヲ呈スル者ニハ興奮劑ヲ撰用シタリ。肝臟充血ヲ發シ、肥大シテ楚痛スル者ニハ、肝部ニ水蛭ヲ貼シ、氷罨法ヲ行ヒ、莫爾比涅注入ヲ施シテ痛楚ヲ緩解セシメタリ。腎臟出血ヲ發セシ者ニハ、單寧酸ヲ內服セシメタリ。然シテ該患者ハ反應期ヲ過ギ、恢復期ニ至リテ多量ノ尿血ヲ發シ、爾來尿利全ク閉止セシヲ以テ「カテーテル」ヲ挿入セシモ、膀胱中涓滴ノ蓄尿

ナク、二日ヲ經過シテ劇烈ナル尿毒症ヲ發シ、痙攣人事不省ヲ來シ、一時醒覺セシモ、嗜眠譫語ヲ發シ、顴頰潮紅、結膜充血等ノ諸症增劇セシニ由リ、頭部ニ氷水灌漑法ヲ持重シ施シ、項窩ニ蜇針ヲ貼シ、甘汞下劑ヲ投シ、刺戟灌腸ヲ施行スル等專ラ誘導法ヲ力メタリト雖、竟ニ昏睡ニ陷リ斃レタリ。耳下腺炎ヲ發セシ者ニハ、酷酸加里溶劑ヲ內服セシメタリ。然シテ足脚ノ知覺鈍麻シ浮腫セシ者ニハ、心臟ノ機能亢盛シ、苦悶、嘔吐等ヲ發セシ者ニ在リテハ、心部ニ氷罨法ヲ持重シ施シ、莫爾比涅皮下注入ヲ行ヒ、實芝答利斯浸、沸騰散等ヲ內服セシメタリ。心囊水腫ヲ發セシ者ニ在リテハ、芫菁ノ大發泡膏ヲ貼シ、窒息症狀ヲ呈セシヲ以テ、衝動興奮ノ諸劑ヲ撰用セシカ、遂ニ死ニ歸シタリ。

此疫ニ於ケル其筋ノ防疫組織及處務次第、左ノ如シ。即チ明治十五年虎列刺病流行紀事ニ、

七月二十二日（明治十五年（紀元二五四二年））。本局（東京檢疫局）ヲ日本橋區阪本町（市內）ニ設置セラル。內務省幷警視廳東京府ノ官吏ヲ以テ、幹事長、幹事副長、幹事及委員ヲ置カレ、土方內務大輔之カ總理ト爲ル。二十四日（明治十五年（紀元二五四二年）七月）。本局事務權限

ヲ達セラレ、本局ニ庶務掛・檢疫掛・會計掛ヲ設ケ、各掛ニ掛長ヲ置カル。二十五日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。本局ヲ開キ、警視廳ヨリ檢疫事務・消毒所事務、及火葬場事務、東京府ヨリ避病院事務ノ引續ヲ受ク。檢疫掛實地監督員心得及本局會計事務取扱概則ヲ定ム。是ヨリ先虎列刺病府下〇東京。ニ蔓延ノ兆アルヤ、警視廳ニ於テハ檢疫消毒及火葬場ノ事ヲ負擔シ、東京府ニ於テハ本所・大久保・芝ノ三避病院ヲ漸次ニ開設セシカ、此ニ至リ總テ本局ノ管スル所ト爲レリ。二十六日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。各火葬場死屍累積セルニ由リ、臨時竈數ヲ增加スベキ旨ヲ該營業人ニ示諭ス。是日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月廿六日。各郡區長及各警察使ヲ招集シ、總理ヨリ本局ヲ開設セラレタル主旨ハ、一ニ豫防法ヲ嚴ニシ、虎列刺病ヲ撲滅セントスルニ在ルヲ以テ、尙一層嚴重注意アランコトヲ要スルノ意ヲ演達ス。二十七日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。虎列刺病流行猛劇ナルヲ以テ、警視廳ニ照會シテ、當分劇場及道化茶番等ノ興行ヲ差止メシム。二十八日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。明治十三年第三十四號布告傳染病豫防規則中第八條刪除ノ義ヲ建議ス。二十九日〇明治十五年(紀元二五四二年)七月。日々ノ虎列刺病患者數ヲ太政官及宮內省ニ申報ス。神田區〇市內。檢疫醫出張所ヲ置ク。八月一日〇明治十五年(紀元二五四二年)。千住火葬場〇武藏國。

堆積ノ死屍七百有餘ニ及ヒ、到底尋常ノ手續ヲ以テ燒盡ス可カラサルニ由リ、此際限リ室外空地ニ於テ速ニ火葬方取計フヘキ旨ヲ同場ニ達ス。八月二日〇明治十五年(紀元二五四二年)。本局ヲ內務省構內ニ移ス。印刷局長ヨリ同局內檢疫事務委任ノ義照會アルニ由リ、同局員ヘ本局兼務ヲ命シ、且ツ患者取扱手續ヲ定ム。排泄物運搬ハ可成水路ニ依ルヘキ旨ヲ各警察署ニ達ス。是日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。內務卿ヨリ、文部省雇東京大學醫學部教師ドクトル・ベルツ氏ニ東京府下避病院監督ヲ囑任セラル。三日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。陸軍々醫兼一等侍醫池田謙齋ニ東京府下避病院總監ヲ、陸軍々醫監石黑忠悳ニ同副總監ヲ命ゼラル。五日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。深川區〇市內。檢疫醫出張所ヲ置ク。六日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。避病院看病人心得ヲ定ム。神田區〇市內。檢疫醫出張所ヲ增置ス。七日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。本局事務章程ヲ改定ス。八日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。塵芥運搬取棄ノ義注意スベキ旨ヲ各郡區役所ニ達ス。九日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。曾テ東京府ニ於テ定メタル避病院規則幷職務心得ヲ改定ス。十日〇明治十五年(紀元二五四二年)八月。虎列刺病死亡者多數、且炎熱ニ際シ死屍腐敗ノ恐アルヲ以テ、該病死亡者ニ限リ特ニ埋葬證交付ノ手續ヲ定メ、又虎列刺病者死屍・排泄物護送人心得ヲ定ム。十一日